

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(22)

橋 牟 礼 川 遺 跡
範囲確認調査報告書

橋 牟 礼 川 遺 跡 X

(向吉遺跡地点, 敷領遺跡)

1996年3月

鹿児島県指宿市教育委員会

序 文

本書は、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の北、南側近接地、および指宿市十二町に所在する敷領遺跡の確認調査の成果をまとめたものです。調査成果の主なものを挙げますと、まず、南側近接地からは、弥生時代終末から古墳時代はじめ頃の祭祀遺構が発見され、また他にも弥生時代から平安時代に至る様々な遺構・遺物の存在が確認されました。

敷領遺跡からは、開聞岳噴火で埋没した平安時代の水田が面的に確認されるなどの成果がありました。

今回の調査により、両遺跡の価値がより一層高められたものと確信すると同時に、本書が皆様に活用され、将来に守り伝えられるべき遺跡の適切な保存に役立てられることを願ってやみません。この確認調査に御指導頂きました諸機関の先生方をはじめ、ご協力を頂いた関係各位ならびに地元の方々に対しまして心よりお礼申し上げます。

平成8年3月31日

指宿市教育委員会 教育長 中村利廣

例 言

1. 本書は、平成7年7月1日～平成8年3月31日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する橋牟礼川遺跡、敷領遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査、及び整理・報告書作成に要した経費10,800千円のうち $\frac{1}{2}$ は国、 $\frac{1}{4}$ は県からの補助を得て行った。
3. 発掘調査は指宿市教育委員会が実施し、橋牟礼川遺跡（向吉遺跡地点）を渡部徹也が、敷領遺跡を鎌田洋昭が担当した。なお、橋牟礼川遺跡（向吉遺跡地点）出土の遺構・遺物の原図作成・製図・写真図版作成・執筆は渡部が実施し、敷領遺跡については鎌田がこれを行った。なお、製図にあたっては、前田恵子、清秀子の協力を得た。調査の組織については以下の通りである。

調査の組織

発掘調査及び整理作業は以下の組織で行われた。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	
発掘調査責任者	指宿市教育委員会教育長	中村利廣
発掘調査担当課	指宿市教育委員会社会教育課長	山澤郁夫
	指宿市教育委員会社会教育課係長	尾辻隆
	指宿市教育委員会社会教育課派遣社会教育主事	塩入俊実
	指宿市教育委員会社会教育課文化係長	下玉利泉
	指宿市教育委員会社会教育課文化係主査	大久保正一
	指宿市教育委員会社会教育課社会教育係主事	宮原智子
発掘調査員	指宿市教育委員会社会教育課文化係主事	下山覚
	同 上	中摩浩太郎
	同 上	渡部徹也
	同 上 主事補	鎌田洋昭
	同 上	小原愛
発掘調査作業員	安留和子、渡瀬ヤナギ、吉元アヤ子、吉元キヨ子、浜崎イチ子	
整理作業員	阿久根ノリ子、吉留紀代子、東 富子、林山イネ、竹下カツエ、下之園トシ子、新小田千恵子、中間清子、清 秀子、前田恵子、上高原信子	

4. 本書中のレベルはすべて絶対高である。また図中に用いられている座標は国土座標系第9系に準ずる。
5. 本書の層位、遺物観察表の色調名は「標準土色帖」1990年版に基づく。
6. 遺物観察表、実測図、遺構図の表記凡例は「橋牟礼川遺跡Ⅲ」（1992、指宿市教育委員会）に準ずる。
7. 本調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館「時遊館COCCOはしむれ」でこれを保存し、活用を図っている。

橋牟礼川遺跡(向吉遺跡地点)篇

本文目次

第I章 遺跡の立地と環境	1
第II章 層位	3
第III章 確認調査	4
第1節 Aトレンチの調査	4
第2節 1トレンチの調査	6
第3節 2トレンチの調査	24
第4節 3トレンチの調査	30
第IV章 考察	40

挿図目次

第1図 遺跡所在地位置図① (S = 1/25,000)	1
第2図 確認調査地点図 (S = 1/5,000)	2
第3図 橋牟礼川遺跡標準層位模式図	3
第4図 Aトレンチ位置図 (S = 1/1,000)	4
第5図 Aトレンチ完掘状況図 (S = 1/50)	4
第6図 Aトレンチ東壁層位断面図 (S = 1/30)	5
第7図 1トレンチ位置図 (S = 1/1,000)	6
第8図 1トレンチ層位断面図 (S = 1/30)	7
第9図 階段状遺構と柱穴① (S = 1/50)	8
第10図 階段状遺構断面図と柱穴② (S = 1/40)	9
第11図 柱穴平面図及び断面図 (S = 1/20)	9
第12図 祭祀遺構検出状況図 (S = 1/50)	10
第13図 配石遺構平面図 (S = 1/20)	11-12
第14図 甕形土器等埋納遺構平面図・断面図 (S = 1/10)	13
第15図 埋納過程想定模式図	15
第16図 1トレンチ遺物実測図① (S = 1/2)	17
第17図 1トレンチ遺物実測図② (S = 1/2)	18
第18図 1トレンチ遺物実測図③ (S = 1/2)	19
第19図 1トレンチ遺物実測図④ (S = 1/2)	20
第20図 1トレンチ遺物実測図⑤ (S = 1/2)	21
第21図 2トレンチ位置図 (S = 1/1,000)	24
第22図 2トレンチ層位断面図 (S = 1/30)	25
第23図 杭列跡検出状況図 (S = 1/40)	26
第24図 杭列跡平面図・断面図 (S = 1/25)	26
第25図 2トレンチ遺物出土状況図 (S = 1/40)	27
第26図 2トレンチ遺物実測図① (S = 1/2)	28
第27図 2トレンチ遺物実測図② (S = 1/2)	29
第28図 3トレンチ位置図 (S = 1/1,000)	30

第29図	柱穴群検出状況図 (S = 1 / 30)	30
第30図	3トレンチ層位断面図 (S = 1 / 40)	31
第31図	柱穴平面図・断面図① (S = 1 / 20)	32
第32図	柱穴平面図・断面図② (S = 1 / 20)	33
第33図	焼土跡検出状況図	34
第34図	古墳時代柱穴検出状況図 (S = 1 / 50)	34
第35図	古墳時代柱穴平面図・断面図① (S = 1 / 20)	35
第36図	古墳時代柱穴平面図・断面図② (S = 1 / 20)	36
第37図	3トレンチ遺物出土状況図 (S = 1 / 50)	37
第38図	3トレンチ遺物実測図 (S = 1 / 2)	38

写真図版目次

写真図版1	Aトレンチ調査状況	4
写真図版2	6層検出状況	4
写真図版3	1トレンチ調査地点	6
写真図版4	1トレンチ調査状況	6
写真図版5	1トレンチ東壁断面状況	6
写真図版6	1トレンチ南壁断面状況	6
写真図版7	階段状遺構と柱穴(北側から)	8
写真図版8	階段状遺構と柱穴(南側から)	8
写真図版9	祭祀遺構検出状況	14
写真図版10	甕形土器等埋納遺構検出状況	14
写真図版11	2トレンチ調査完掘状況	24
写真図版12	2トレンチ調査東壁断面状況	24
写真図版13	杭列検出状況	27
写真図版14	杭列断面状況	27
写真図版15	柱穴検出状況	30
写真図版16	古墳時代柱穴検出状況	35
写真図版17	3トレンチ西壁断面状況	35
写真図版18	遺物写真	43
写真図版19	遺物写真	44
写真図版20	遺物写真	45
写真図版21	遺物写真	46

橋牟礼川遺跡(向吉遺跡地点)篇

本文目次

第I章 遺跡の立地と環境	1
第II章 層位	3
第III章 確認調査	4
第1節 Aトレンチの調査	4
第2節 1トレンチの調査	6
第3節 2トレンチの調査	24
第4節 3トレンチの調査	30
第IV章 考察	40

挿図目次

第1図 遺跡所在地位置図① (S = 1 / 25,000)	1
第2図 確認調査地点図 (S = 1 / 5,000)	2
第3図 橋牟礼川遺跡標準層位模式図	3
第4図 Aトレンチ位置図 (S = 1 / 1,000)	4
第5図 Aトレンチ完掘状況図 (S = 1 / 50)	4
第6図 Aトレンチ東壁層位断面図 (S = 1 / 30)	5
第7図 1トレンチ位置図 (S = 1 / 1,000)	6
第8図 1トレンチ層位断面図 (S = 1 / 30)	7
第9図 階段状遺構と柱穴① (S = 1 / 50)	8
第10図 階段状遺構断面図と柱穴② (S = 1 / 40)	9
第11図 柱穴平面図及び断面図 (S = 1 / 20)	9
第12図 祭祀遺構検出状況図 (S = 1 / 50)	10
第13図 配石遺構平面図 (S = 1 / 20)	11-12
第14図 甕形土器等埋納遺構平面図・断面図 (S = 1 / 10)	13
第15図 埋納過程想定模式図	15
第16図 1トレンチ遺物実測図① (S = 1 / 2)	17
第17図 1トレンチ遺物実測図② (S = 1 / 2)	18
第18図 1トレンチ遺物実測図③ (S = 1 / 2)	19
第19図 1トレンチ遺物実測図④ (S = 1 / 2)	20
第20図 1トレンチ遺物実測図⑤ (S = 1 / 2)	21
第21図 2トレンチ位置図 (S = 1 / 1,000)	24
第22図 2トレンチ層位断面図 (S = 1 / 30)	25
第23図 杭列跡検出状況図 (S = 1 / 40)	26
第24図 杭列跡平面図・断面図 (S = 1 / 25)	26
第25図 2トレンチ遺物出土状況図 (S = 1 / 40)	27
第26図 2トレンチ遺物実測図① (S = 1 / 2)	28
第27図 2トレンチ遺物実測図② (S = 1 / 2)	29
第28図 3トレンチ位置図 (S = 1 / 1,000)	30

第29図	柱穴群検出状況図 (S = 1 / 30)	30
第30図	3トレンチ層位断面図 (S = 1 / 40)	31
第31図	柱穴平面図・断面図① (S = 1 / 20)	32
第32図	柱穴平面図・断面図② (S = 1 / 20)	33
第33図	焼土跡検出状況図	34
第34図	古墳時代柱穴検出状況図 (S = 1 / 50)	34
第35図	古墳時代柱穴平面図・断面図① (S = 1 / 20)	35
第36図	古墳時代柱穴平面図・断面図② (S = 1 / 20)	36
第37図	3トレンチ遺物出土状況図 (S = 1 / 50)	37
第38図	3トレンチ遺物実測図 (S = 1 / 2)	38

写真図版目次

写真図版1	Aトレンチ調査状況	4
写真図版2	6層検出状況	4
写真図版3	1トレンチ調査地点	6
写真図版4	1トレンチ調査状況	6
写真図版5	1トレンチ東壁断面状況	6
写真図版6	1トレンチ南壁断面状況	6
写真図版7	階段状遺構と柱穴(北側から)	8
写真図版8	階段状遺構と柱穴(南側から)	8
写真図版9	祭祀遺構検出状況	14
写真図版10	甕形土器等埋納遺構検出状況	14
写真図版11	2トレンチ調査完掘状況	24
写真図版12	2トレンチ調査東壁断面状況	24
写真図版13	杭列検出状況	27
写真図版14	杭列断面状況	27
写真図版15	柱穴検出状況	30
写真図版16	古墳時代柱穴検出状況	35
写真図版17	3トレンチ西壁断面状況	35
写真図版18	遺物写真	43
写真図版19	遺物写真	44
写真図版20	遺物写真	45
写真図版21	遺物写真	46

敷 領 遺 跡 篇

本 文 目 次

第Ⅰ章 遺跡の立地と環境	47
第Ⅱ章 調査に至る経緯	50
第Ⅲ章 確認調査	50
第Ⅳ章 第1地点の調査	52
第1節 1トレンチの調査	52
第2節 6トレンチの調査	56
第3節 2トレンチの調査	61
第Ⅴ章 第2地点の調査	64
第Ⅵ章 確認調査の成果	68

挿 図 目 次

第1図 敷領遺跡位置図 (S = 1 / 50,000)	47
第2図 敷領遺跡周辺図 (S = 1 / 125,000)	48
第3図 確認調査地点位置図 (S = 1 / 2,000)	51
第4図 1・6トレンチ位置図 (S = 1 / 400)	52
第5図 1トレンチ北壁・西壁土層断面実測図 (S = 1 / 20)	53~54
第6図 1トレンチ第11層上面検出遺構実測図 (S = 1 / 20)	55
第7図 6トレンチ南壁・西壁・北壁土層断面実測図 (S = 1 / 20)	57
第8図 6トレンチ第6層上面検出状況・コンタ図 (S = 1 / 20)	58
第9図 6トレンチ遺構検出状況図 (S = 1 / 20)	59
第10図 6トレンチ第6層上面検出ピット実測図 (S = 1 / 20)	60
第11図 2トレンチ位置図 (S = 1 / 400)	62
第12図 2トレンチ北壁・東壁土層断面実測図 (S = 1 / 30)	63
第13図 3・4・5トレンチ位置図 (S = 1 / 400)	65
第14図 3トレンチ土層断面実測図 (S = 1 / 30)	別図1
第15図 4トレンチ土層断面実測図 (S = 1 / 30)	別図2
第16図 5トレンチ土層断面実測図 (S = 1 / 30)	別図3
第17図 第2地点水田跡検出状況図 (S = 1 / 200)	67
第18図 3トレンチ水田跡検出状況図・コンタ図 (S = 1 / 80)	別図4
第19図 4トレンチ水田跡検出状況図・コンタ図 (S = 1 / 80)・位置図 (S = 1 / 200)	別図5
第20図 5トレンチ水田跡検出状況図・コンタ図 (S = 1 / 80)・位置図 (S = 1 / 200)	別図6

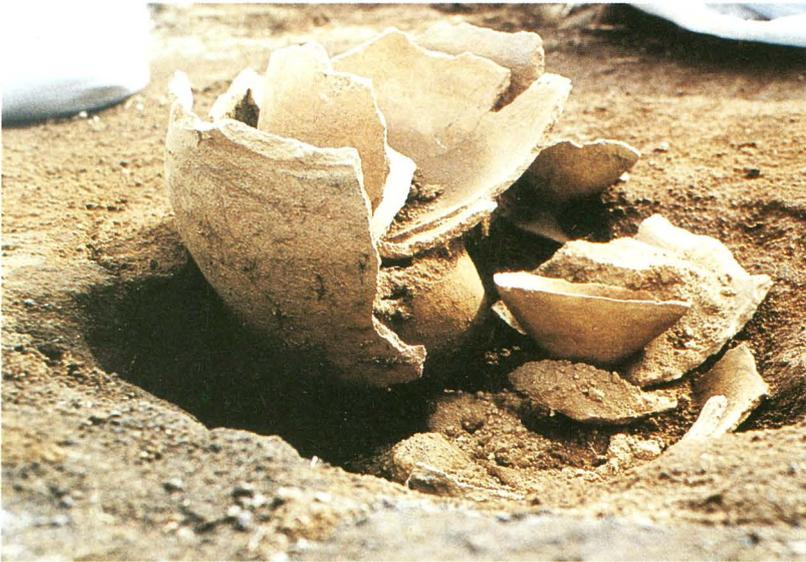
写 真 図 版

写真図版1 敷領遺跡周辺写真	49
写真図版2 1トレンチ・6トレンチ確認調査状況写真	70
写真図版3 2トレンチ・3トレンチ確認調査状況写真	71
写真図版4 4トレンチ確認調査状況写真	72
写真図版5 5トレンチ確認調査状況写真	73
写真図版6 第2地点水田跡検出状況	74



検出状況

手前に高坏が、また右手に高坏の坏部破片が、埋納されている。



内部の状況 その1

調査途中、一部が崩れ、中に埋納されていた高坏が明らかになった。



内部の状況 その2

大きめの甕形土器の中に、やや小ぶりの甕形土器1点、高坏の杯部1点、脚部と坏部がバラバラにされた高坏1点が入っていた。

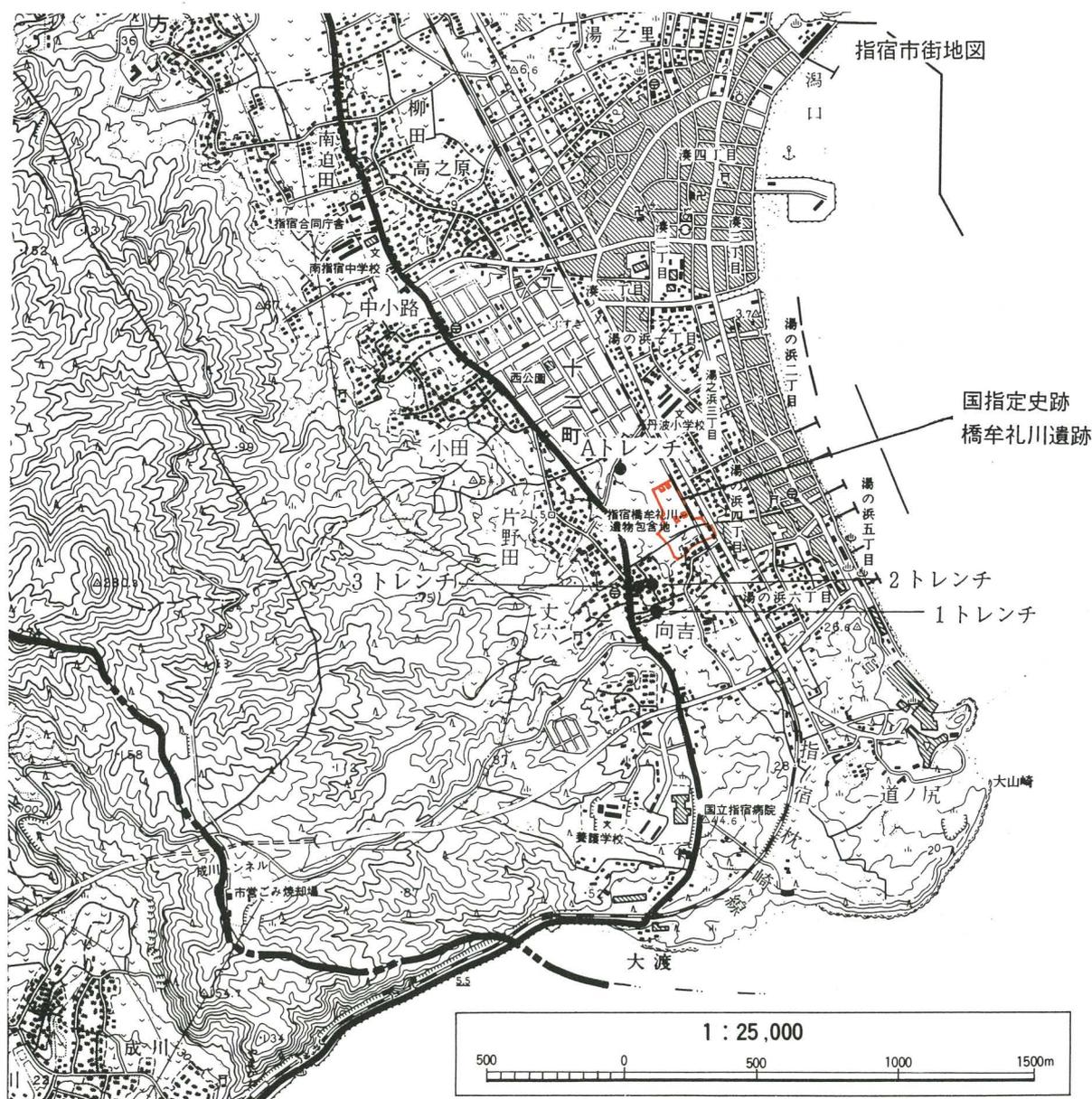
第I章 遺跡の立地と環境

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市十二町下里に所在する。遺跡は、山裾から海岸に向けて緩やかに傾斜する海拔7～20m前後の火山性扇状地上に広がる縄文中期～近世にかけての複合遺跡である。また、遺跡の南西約10kmにある開聞岳の噴火によって度重なる被害を受けた火山災害遺跡としても知られている。

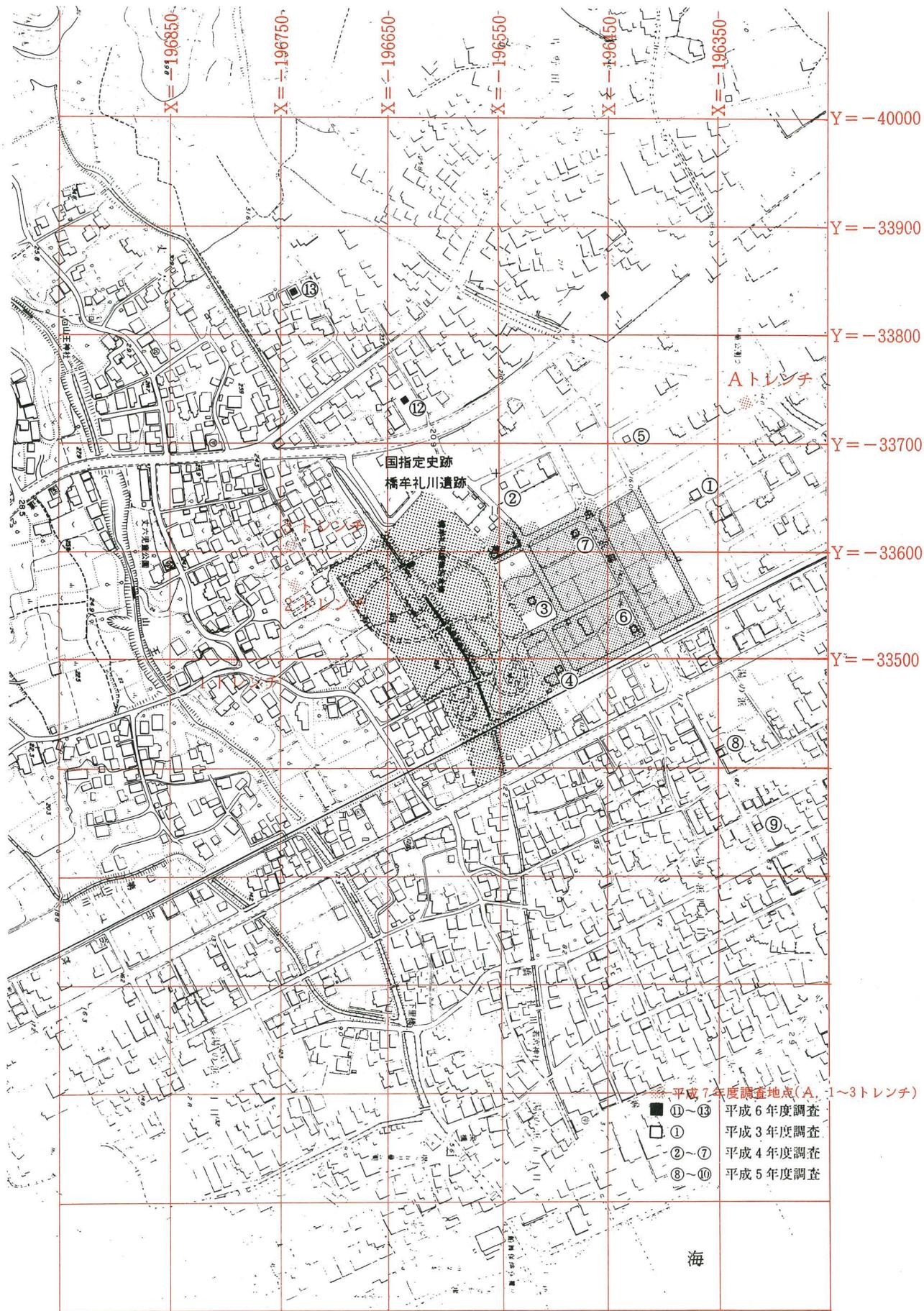
範囲確認調査は、平成3年度より年次的に、国指定地北側、東側、北西側、西側の近接地において実施してきており、各地点で遺跡の広がり方が確認されている。

今回は、指定地北西側の地点を1ヶ所、ならびに南側近接地3ヶ所の調査区を設け実施した。なお、南側近接地については従来、向吉遺跡として呼称されているが、本調査の目的を鑑み、以下、橋牟礼川遺跡の「向吉遺跡地点」と仮称しておく。平成3年度より実施した調査地点、ならびに今回の調査地点については、第2図にその位置を記しているため参照されたい。

(文責 渡部)



第1図 遺跡所在地位位置図① (S = 1 / 25,000)



第2図 確認調査地点図(S=1/5,000)

第Ⅱ章 層 位

以下に橋牟礼川遺跡標準層位をあげる。なお、各地点における細かな特徴については、各トレンチの報告の中でふれる。

第1層	第1層 黒褐色土層(表土) 旧耕作地である。現代の層である。
第2層	第2層 暗灰色土層 近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。
第3層	第3層 黒灰色土層 近世～近代に至る遺物が包含されている。旧耕作地でもある。
第4層 a	第4層 黒色土層 中世(鎌倉～室町時代)の遺物包含層。黒ボタのような腐植土が発達している。厚さは20～50cm前後で、宋代の青磁や白磁、回転糸切り底の土師器などが検出される。
第5層 a	第5層 a 紫灰色火山灰層(紫コラ) 平安時代開聞岳噴出物堆積層で、フォール・ユニットを形成する。第5層 c と一連の噴火による噴出物とする考えがある。
第5層 b	第5層 b 紫灰色火山灰二次堆積物 第5層 c (貞観16年開聞岳噴出物)の二次堆積層で、水流作用で生成されたものと考えられ砂が多く混在し、ラミナが発達する。
第5層 c	第5層 c 紫灰色火山灰層(紫コラ) 貞観16年3月4日(西暦874年)の開聞岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて固く団結し、フォール・ユニットが認められる。
第6層 a	第6層 a～c 暗オリーブ褐色土層 奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は貞観16年の開聞岳噴出物で被覆されていることから、貞観16年の火山噴出物降下直前の旧地表面形状をそのままとどめていると考えられる。第6層は腐植化が進行している a, a に比べ明るいオリーブ褐色を呈する b, c は第7層の二次堆積層と3層に分層が可能である。
第6層 b	
第6層 c	
第7層	第7層 青灰色固結火山灰層(青コラ) 7世紀最終四半世紀頃に比定される開聞岳噴出物堆積層で、下部は火山活動初期のスコリアが2～3cm程度堆積する。
第8層	第8層 橙色土層 砂や池田湖起源の噴出物、軽石を含む扇状地堆積層。古墳時代末頃の土石流堆積物と考えられる。
第9層 a	
第9層 b	
第9層 c	
第10層	第9層 暗褐色土層 古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田湖降下軽石を含みやや粘質である。厚さは50cm～1m程度である。第9層の中位から遺構が掘り込まれる場合などは、埋土色調、粒度から判別することが難しい。第9層の形成は、基本的に扇状地堆積物であるが、集落形成等の土地利用による攪乱や河川の氾濫による要因が複合していると考えられる。
第11層	第10層 赤橙褐色粘質土層 弥生中～後期の遺物包含層で、扇状地堆積物と考えられる。
第12層	第11層 暗紫色火山灰層(暗紫コラ) 弥生時代中～後期に降下した開聞岳噴出物堆積層。
第13層	第12層 明褐色土層 弥生時代前～中期にわたっての遺物包含層で粘性が強い。
第15層	第13層 暗褐色小石混シルト質土層 主に刻目突帯文土器を包含する層で、小礫を含む。
第16層	第14層 赤褐色小石混シルト質土層 主に縄文時代晩期の遺物を含む。黒川武器が主体。
第17層	第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層 主に縄文時代晩期の遺物を含むが、後期の遺物も混在する。
第18層	第16層 黒褐色橙色パミス混シルト質土層 主に縄文時代後～晩期の遺物を含む。
第19層	第17層 暗青灰色火山灰層(黄コラ) 縄文時代後期の開聞岳噴出物堆積層。
第19層	第18層 灰褐色砂質土層 縄文時代後期遺物包含層で下部は池田湖火山灰に変化する。
第19層	第19層 池田湖火山灰層 灰色～黄灰色を呈する層で、約5,500年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものと考えられている。

指宿市教育委員会『第Ⅳ章 遺跡の層序』『橋牟礼川遺跡Ⅲ』を抜粋、一部改変。

第3図 橋牟礼川遺跡標準層位模式図

第三章 確認調査

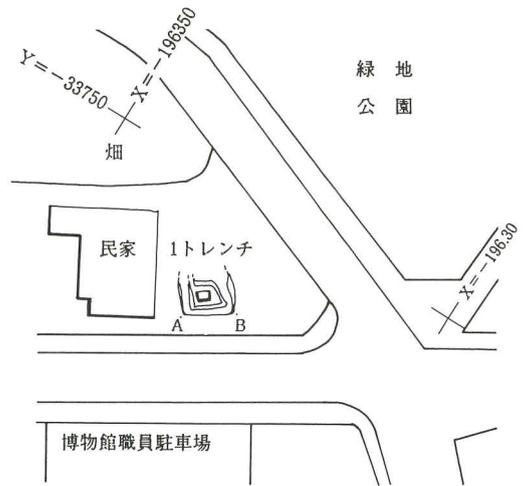
第1節 Aトレンチの調査（北西地点、周知の遺跡地内）

(1) 概要

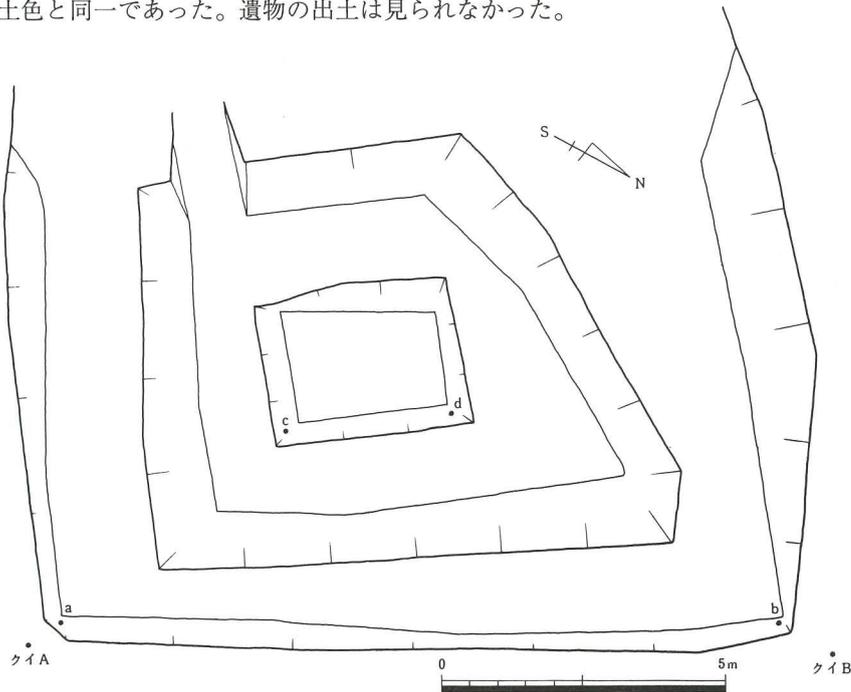
本地点は、橋牟礼川遺跡周知の範囲のうち最も北よりに位置する。すぐ隣を丹波川が流れ、東側隣接地には、指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれがある。

博物館建設前の発掘調査では、平安時代の畠跡が見つかったことから、本地点でもその広がりや確認できるものと期待されたが、明瞭な遺構を把握することはできなかった。

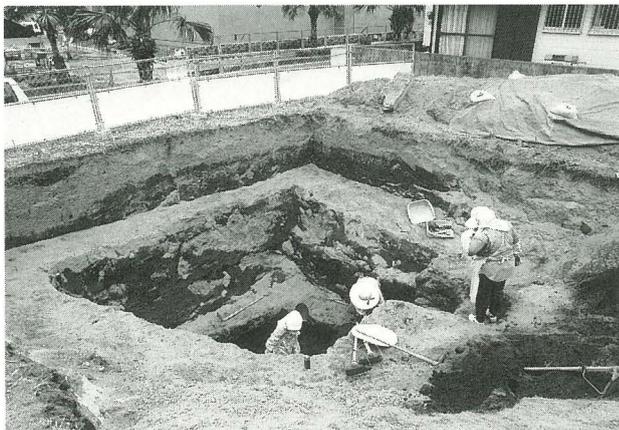
現地表より約2mまでは、近・現代の洪水堆積層が厚く積もっており、かつての丹波川の氾濫を想起させた。砂礫層のため、段掘りを余儀なくされたため、結果、第5層を除去できたのは、約1㎡にとどまった。下層の第6層は、a、bの2層に細分が可能で、博物館建設の事前調査で確認された土色と同一であった。遺物の出土は見られなかった。



第4図 Aトレンチ位置図 (S=1/1,000)



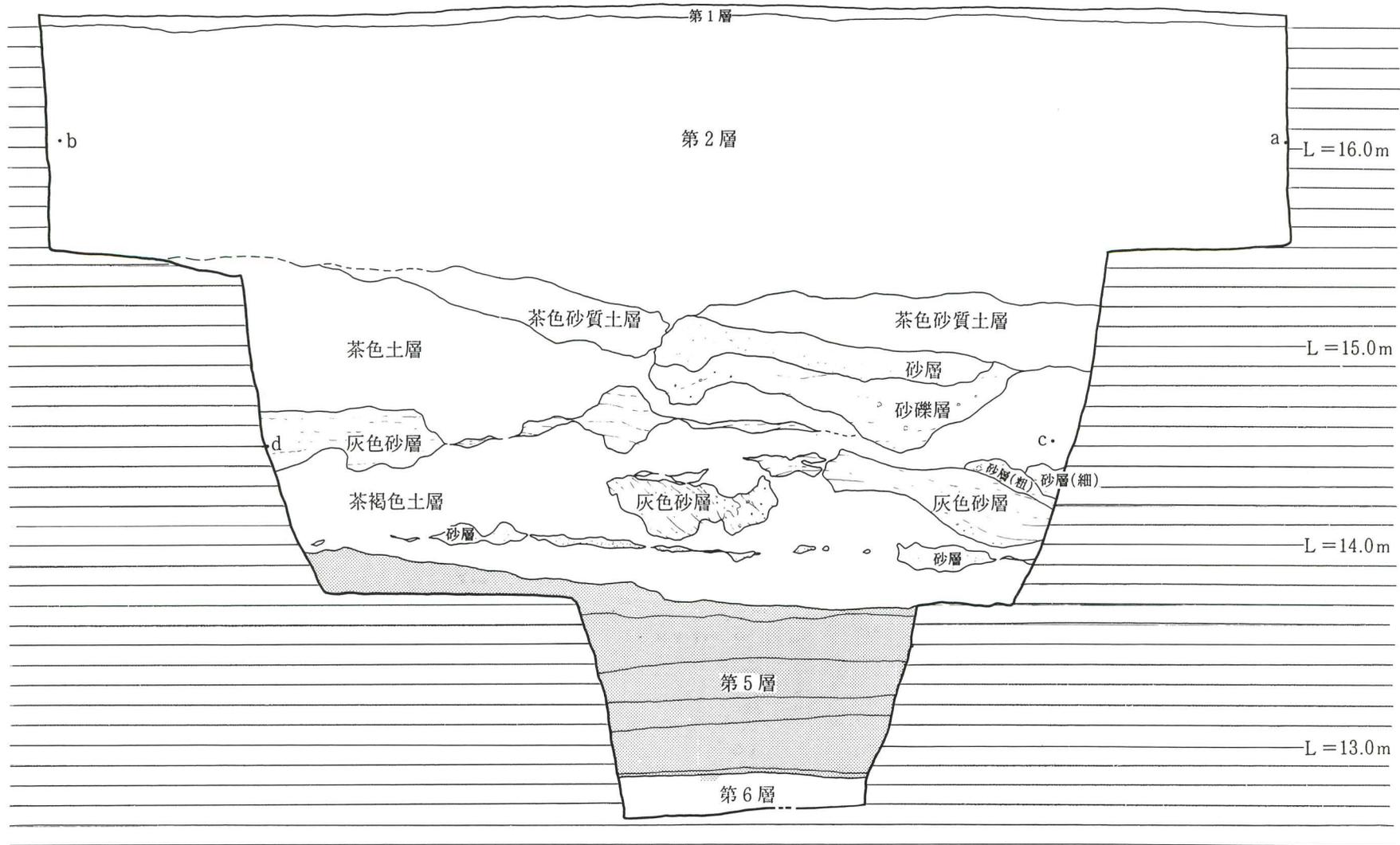
第5図 Aトレンチ完掘状況図 (S=1/50)



写真図版1 Aトレンチ調査状況



写真図版2 6層検出状況



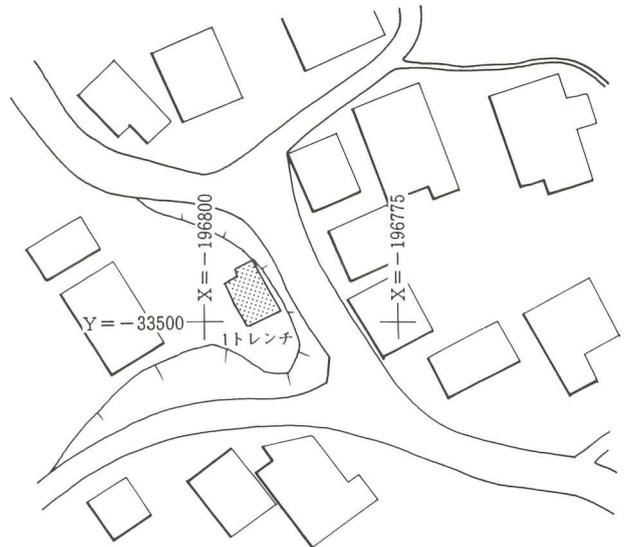
第6図 Aトレンチ東壁層位断面図(S=1/30)

第2節 1 トレンチの調査(向吉遺跡地点)

(1) 概要

国指定地より南へ約200mの所に位置する。現地形は西の山手から東の海岸へ向けて下る傾斜地で、標高約22mの舌状の小さな台地にトレンチを設けた。周辺より弥生土器等の採集報告のある地点ではあったが弥生時代終末から古墳時代の初め頃の祭祀遺構、中世の段階状遺構と柱穴を確認した。

平安時代の包含層はすでに削平され、一部にその痕跡が見られる程度であった。なお、周辺の市道の下水道工事に伴う調査も実施されているが、弥生時代～古墳時代に至る遺物の出土をみている。



第7図 1 トレンチ位置図 (S = 1/1,000)

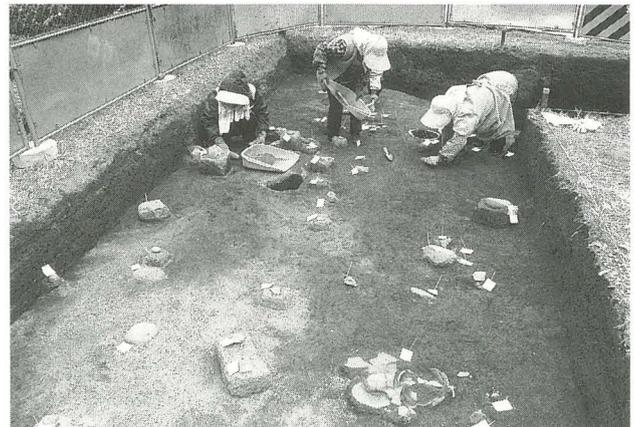
(2) 層位

第1層、4層～13層の11層を確認した。西壁及び南壁の層位より、第11層、暗紫コラの降下時には、すでに旧地形が西から東へ向けて傾斜していた様子をうかがわせている。第11層は厚さが10～13cm前後とこれまで確認調査した地点に比べ、はるかに残存状況が良い。上層の9～10層については、褐色～茶褐色を呈する土層で、弥生土器片～成川式土器までを包含する土層である。第5層～第7層は、平坦地では削平されており、傾斜に沿って深くなっている所に一部確認できた。第4層は、中世の包含層であるが、遺物の出土は見られなかった。

西壁断面に見られる第4層の凹部については、段階状遺構を形成する際、第5層を除去した結果できたものである。



写真図版3 1 トレンチ調査地点



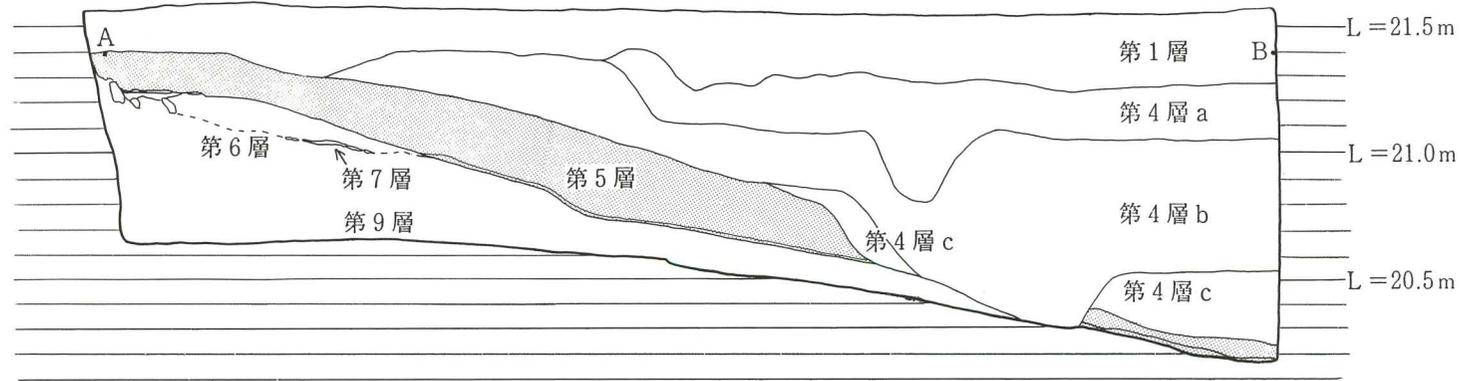
写真図版4 1 トレンチ調査状況



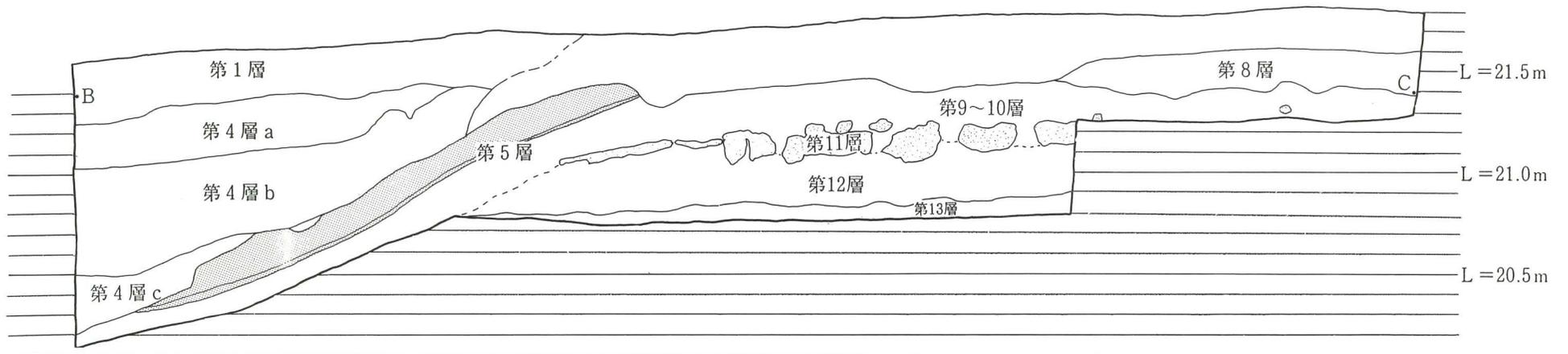
写真図版5 1 トレンチ東壁断面状況



写真図版6 1 トレンチ南壁断面状況



西壁層位断面



南壁層位断面

第8図 1 トレンチ層位断面図(S=1/30)

(3) 遺 構

A. 階段状遺構と柱穴（中世）

トレンチ東隅に、第5層を除去して形成された階段状遺構、ならびに第4層を埋土する柱穴3基を検出した。

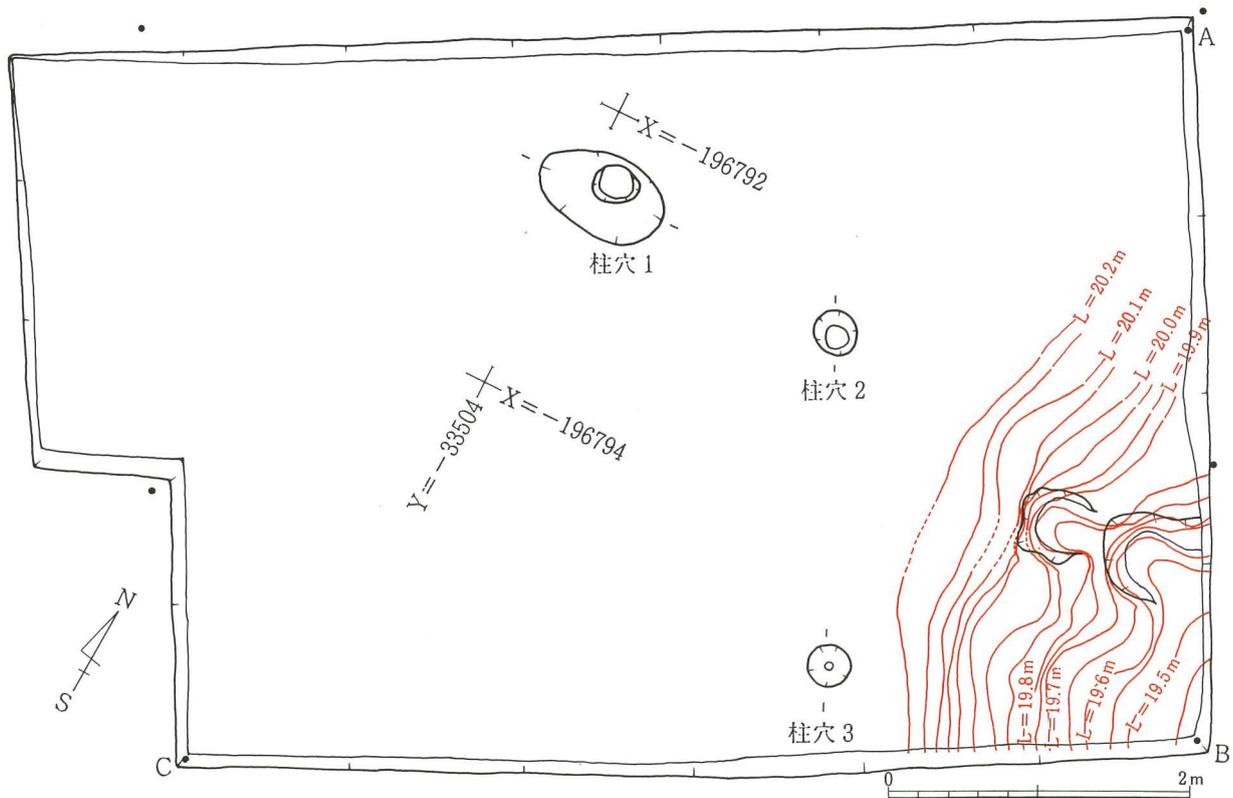
もともと西から東へと急傾斜する地形であるが、階段状遺構は、その急傾面を登るための通路として設けられたと考えられる。約30cm四方のステップを2ヶ所、段差は20cm程度である。ステップの平面の一部は踏みかためられていたためか、硬化していた。他に特別な工夫を凝らした痕跡は確認できなかった。なお、この階段状遺構は、トレンチ東からさらに調査区外へと続くものと思われる。検出したこの遺構は、斜面から平坦面へと移る間際の部分に確認されたが、そこからわずか50cm西側で、2基の柱穴を確認した。階段状遺構との位置関係からも、何らかの関連を思わせる。門、あるいは鳥居のような施設があったのであろうか。なお、調査地点のすぐ西側には、現在も小さなほこらがあり地神様が祭ってある。興味をそそられるが、このほこらの由来や、歴史的な内容については今のところ資料がない。



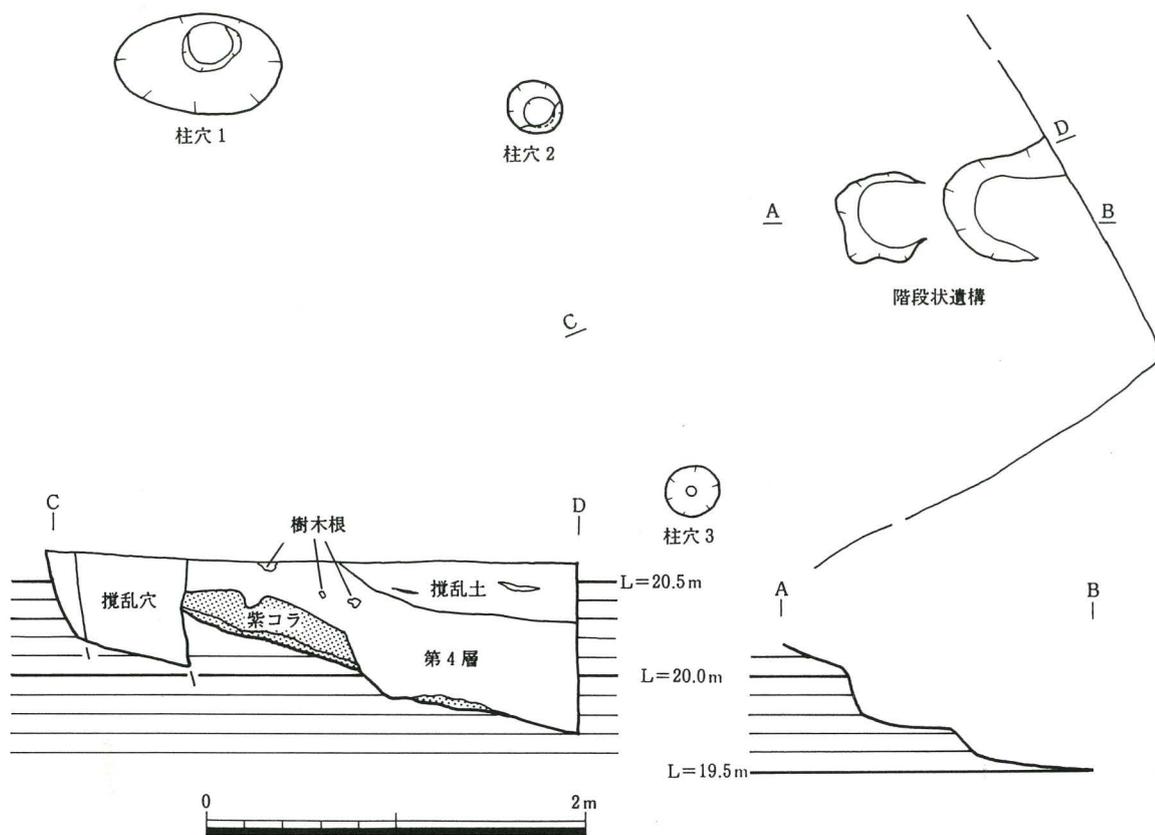
写真図版 7 階段状遺構と柱穴(北側から)



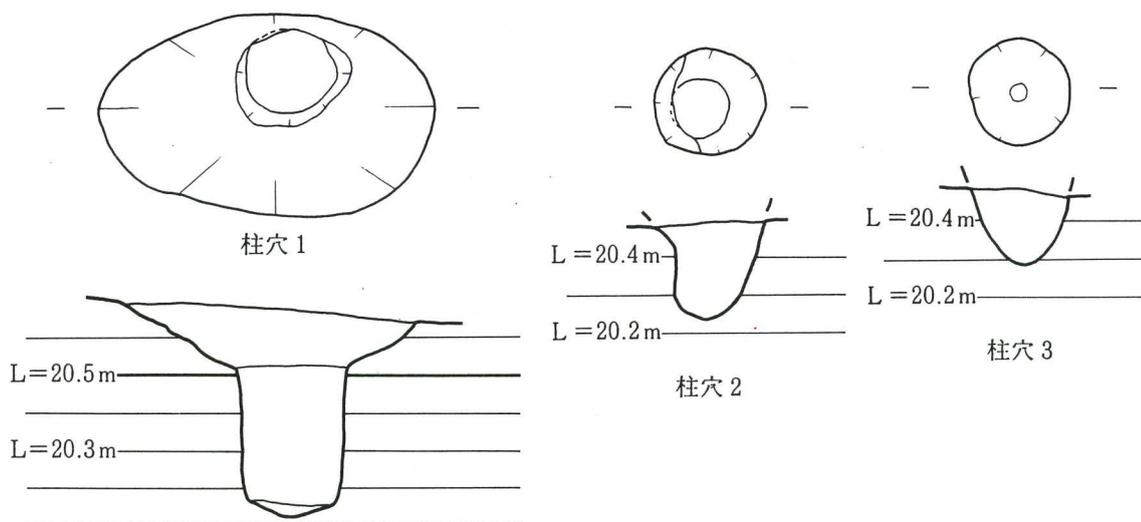
写真図版 8 階段状遺構と柱穴(南側から)



第 9 図 階段状遺構と柱穴① (S = 1 / 50)



第10図 階段状遺構断面図と柱穴② (S = 1/40)



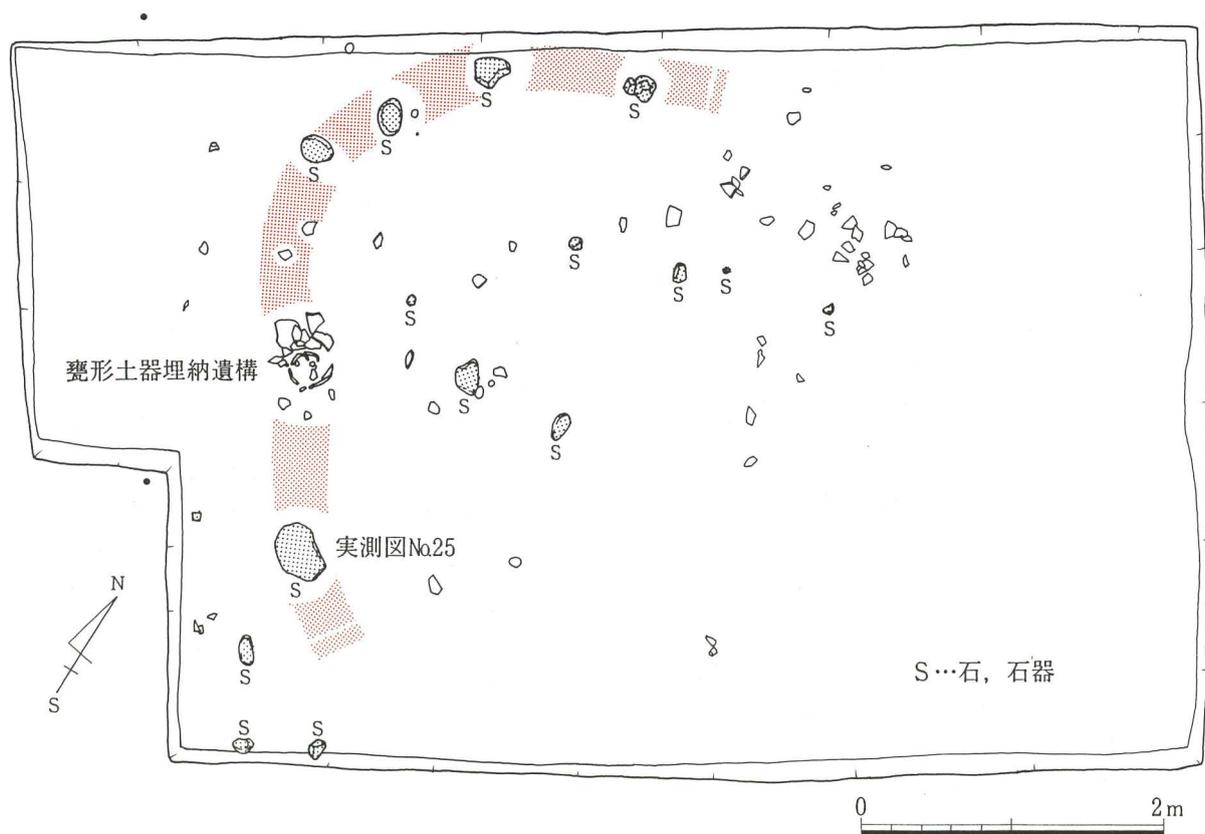
第11図 柱穴平面図及び断面図 (S = 1/20)

B. 祭祀遺構（弥生時代終末～古墳時代）

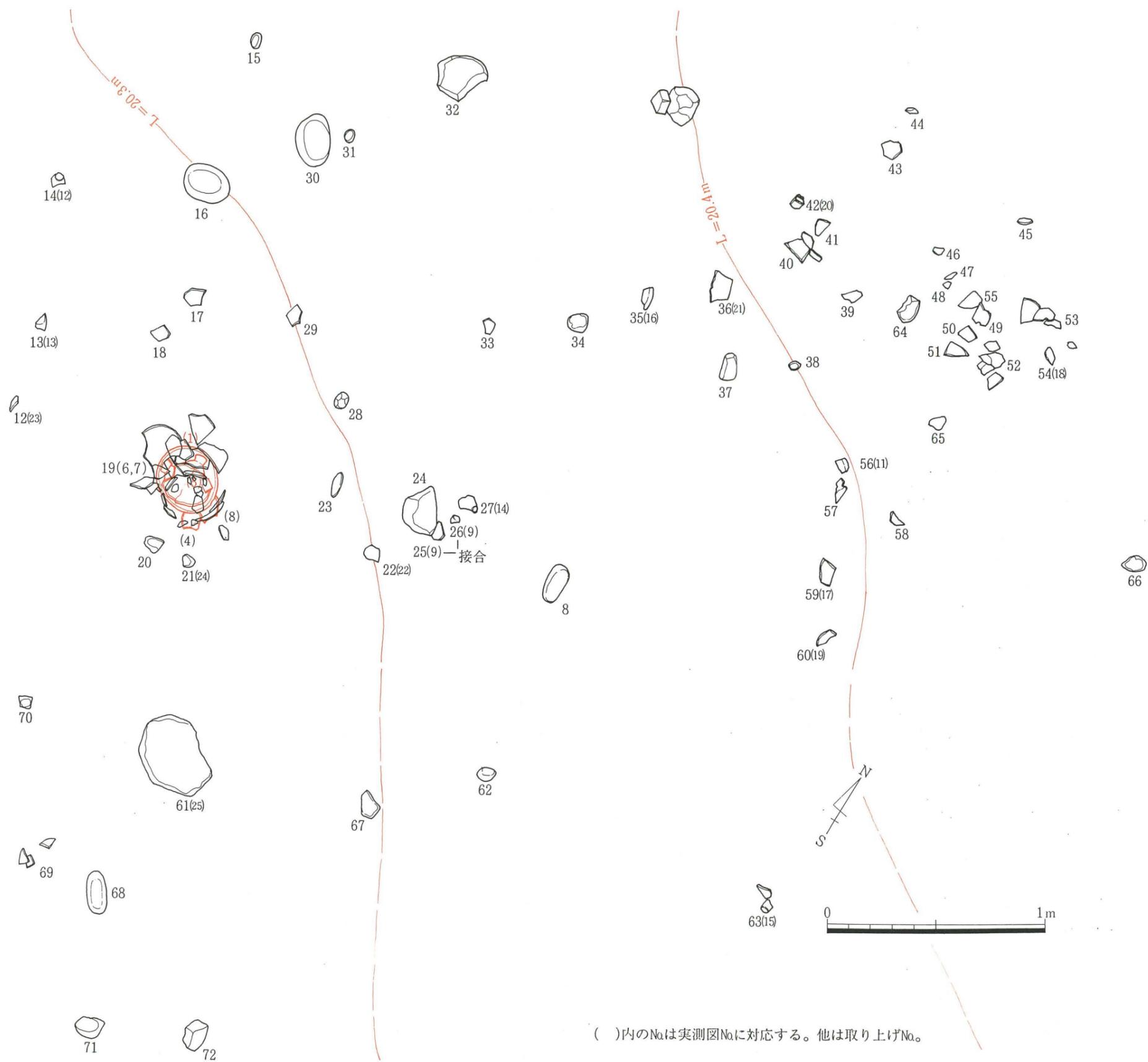
第9層～10層より配石、及び甕形土器等の埋納遺構を検出した。遺構は、東へ急傾斜する斜面の西側にある狭い台地状の平坦面にあった。人頭大、もしくはそれよりやや小さめの自然石や石器が、半径約2mの¼円を描くように配されていた。円弧状にならぶ自然石と石器は、5個が確認され、おおむね40～60cmの間隔をもつ。これらのうちNo.5（第12図）の石については、敲打による凹みがあり、石器と認識できた。他の石については、使用痕や調整痕を認識することはできなかった。円弧状の並びの中に、石ではなく、甕形土器等を埋納した遺構があった。これについては後で詳述したい。

遺物は¼円状にならぶ配石の内部に集中して見られ、その外側には、数点の破片の出土を見るのみであった。遺物は、甕や壺の破片の他、赤色塗彩された高坏の脚部や埴形土器の胴部片などがあつた。いわゆる「成川式土器」から、頭部から肩部にかけて二条突帯をめぐらす弥生土器まで混在しており、立地から考えて流れ込んできた破片も含まれているものと推定された。遺構の時期については、甕形土器等埋納遺構が、第11層を一部掘り抜いて設けられていることから、弥生中期の暗紫コラ火山灰降下後で、かつ埋納された土器型式の特徴から、それらが、成川式土器の中でも、中津野式土器と呼ばれる一群に相当すると思われることから、弥生時代終末以降と位置づけられる。ただし、中津野式土器の存続期間がまだ不確定な状況であり、かつ、橋牟礼川遺跡においては、土器集中廃棄所等の遺構において、中津野式に続く辻堂原式や笹貫式と呼ばれる土器と共存する例もみられることから、本遺構の時期も弥生時代終末から古墳時代までの時間幅の中で把えておきたい。

さて、各々の遺物が出土するレベルで、遺構面の探査を行ったが、火を用いた痕跡や炭化物等は確認できなかった。また獣骨等の出土も見られなかった。

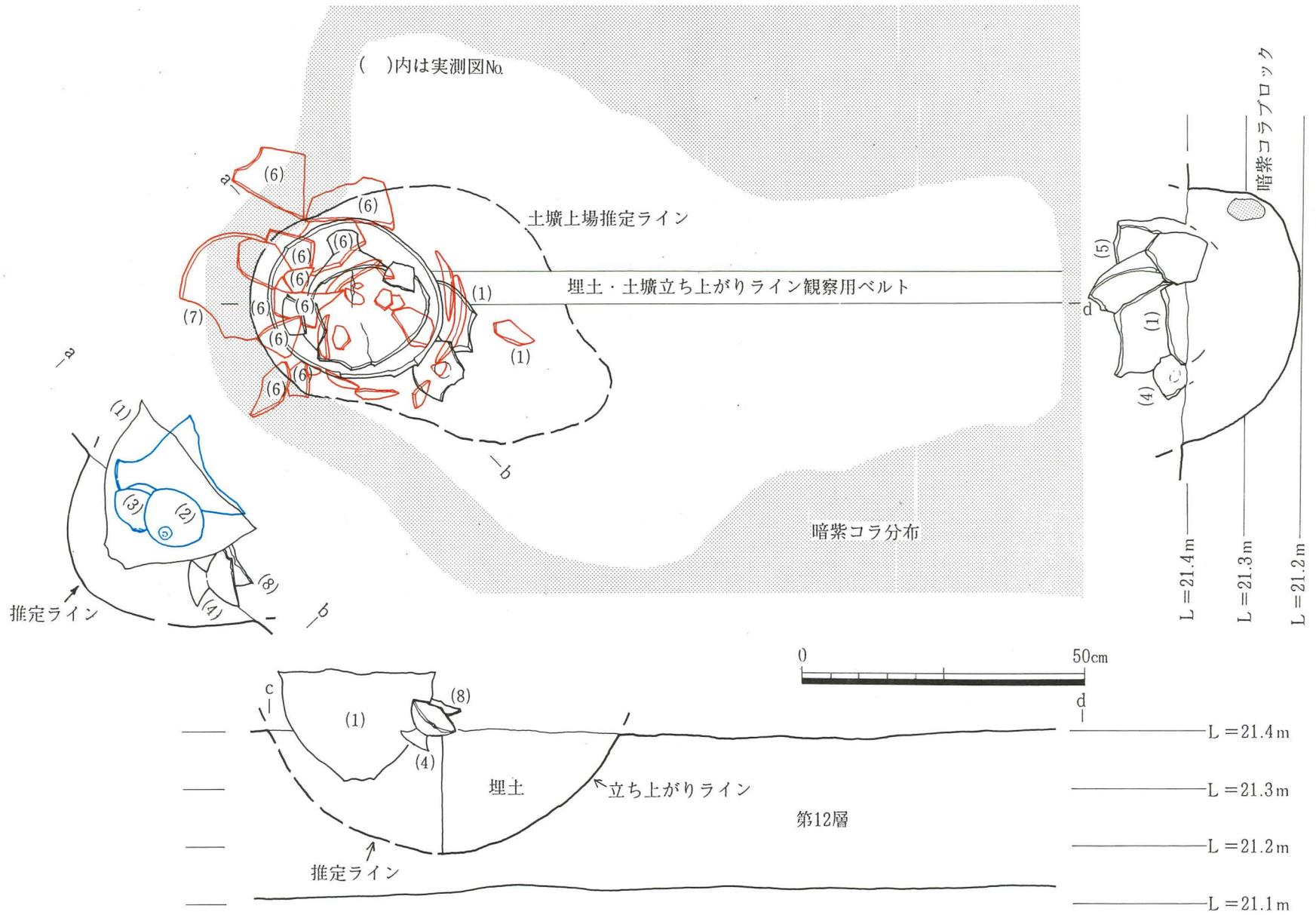


第12図 祭祀遺構検出状況図（S = 1/50）



第13図 配石遺構平面図 (S = 1/20)

第14図 壺形土器等埋納遺構平面図・断面図 (S=1/10)



第14図 壺形土器等埋納遺構平面図・断面図 (S=1/10)

C. 甕形土器等埋納遺構

出土状況について詳述したい。遺構面及びその下位の第11層上面、第12層を探索した結果、不整形な楕円形の土壌を掘り土器を埋納していることがわかった。土壌は長径約60cm、短径約40cm、深さ40cmを計る。一部第11層（暗紫コラ）を掘りぬき、埋土には火山灰のブロックが入り込んでいた。

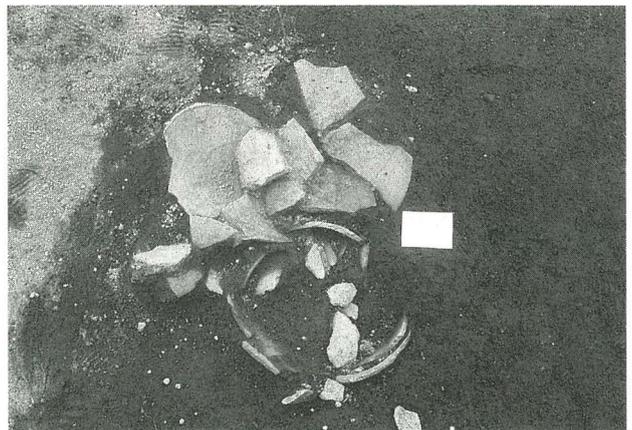
遺物は、土壌形成後、No.4の小ぶりの鉢形土器が口縁部を上正位置に埋められ、その隣に、No.1の甕形土器、及びNo.8の高坏の破片が埋められていた。No.1の甕形土器は口縁部を上正位置で埋められていたが、脚台部は欠損していた。またその中には、No.2の高坏の坏部が横向きに、No.3の高坏の坏部と脚部がそれぞれに、さらにNo.5の甕形土器が横にかさねられた状態で納められていた。これら3点の土器を内包したNo.1の甕形土器の上位のすぐとなりから、No.6の高坏の坏部、No.7の蓋形土器がそれぞれ出土した。いずれも破片の状態であったが、No.6の坏部については口縁部を下にした状態で出土し、No.7の蓋形土器については、逆に口縁部を上に向けた状態で出土した。これら出土状況から遺構形成の過程を整理すると第15図のようなプロセスを想定することができる。

- ① 土壌を掘り、No.1の甕形土器、No.4の高坏、No.8の高坏破片を埋納する。(A)
- ② No.1の甕形土器の中に、No.2の高坏の坏部、坏部と脚部をばらばらにしたNo.3の高坏を入れる(B)
- ③ さらにNo.1の甕形土器の中に、No.5の甕形土器を入れる。(C)
- ④ No.7の蓋形土器、No.8の高坏の坏部をそれぞれ、甕形土器にかぶせるように重ねる。(D)もしくは、No.7の蓋形土器、No.8の高坏の坏部を脇に位置する。(E)

ところで、No.1の甕形土器は底部が欠損しており、No.2の高坏についても同様である。これらについては、その土器のもつ本来の機能を失わせ、祭祀用として転用を図ったものと考えられる。No.3の高坏が坏部と脚部の2つに分けられていたことやNo.7の蓋形土器とNo.8の高坏の坏部が、上下逆かさまの状態に配置されていたことも、同様の意味を持つものではなかろうか。さて、埋納過程の最終段階として、DとEの2つの可能性を示した。検出状況が元位置を保っているものとすれば、Eの状態に埋納されていたものと判断できる。しかし、遺構廃絶後、埋没する途中において、No.7の蓋形土器とNo.8の高坏の坏部が何らかの原因で転げ落ちた可能性も否定できない。土器を重ねて埋納した例は、始良町萩原遺跡でも見つかっているが、ここでは、住居址内にピットを設けその中に上から甕、高坏の脚部、甕の底部さらにもう1つ甕の底部と合計4個の土器を重ねた、「4段重ね」状態であった。状況は異なるもののNo.1



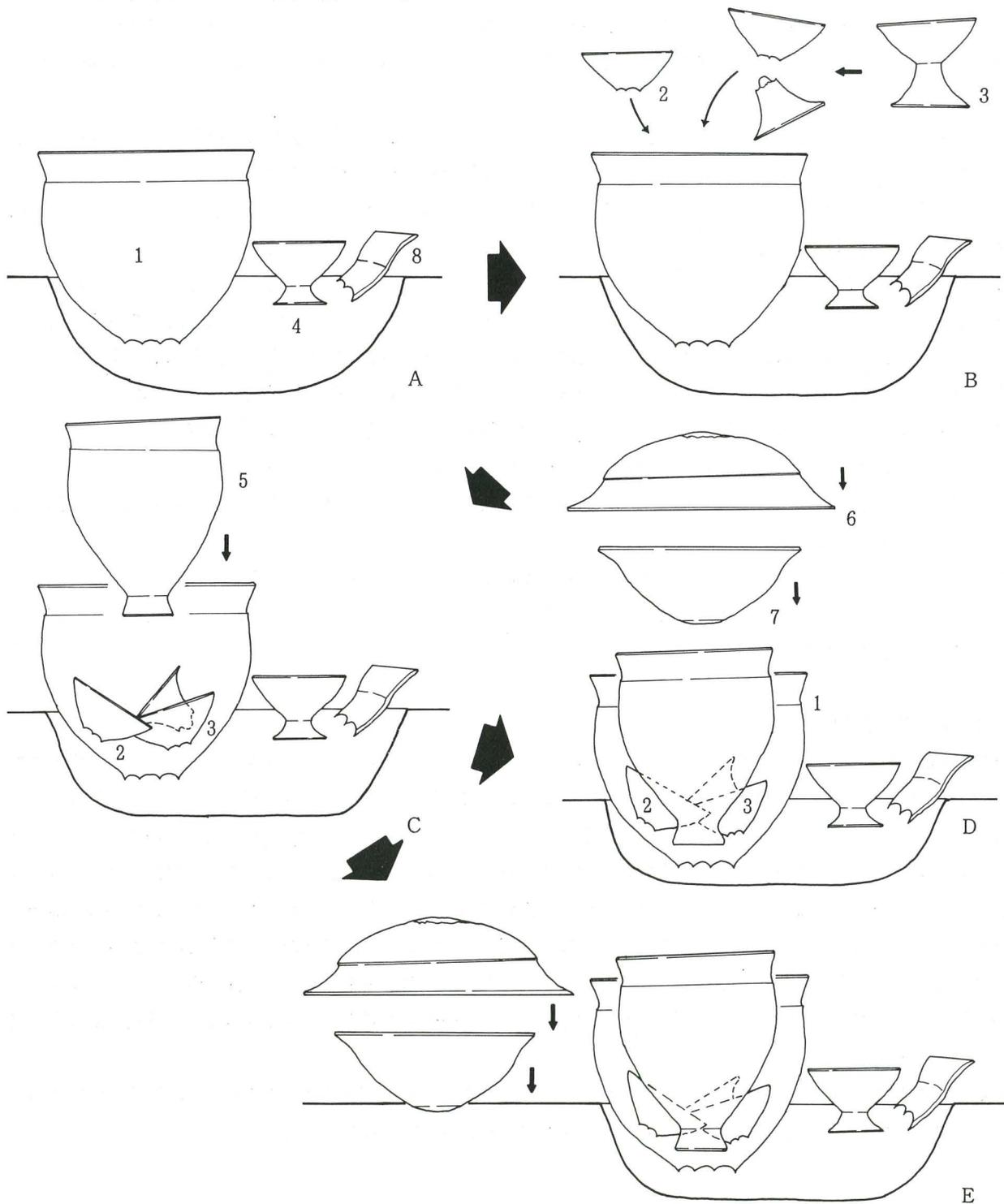
写真図版9 祭祀遺構検出状況



写真図版10 甕形土器等埋納遺構検出状況

の甕形土器にすっぽりと納まる2つの高杯をのぞけば、No.1の甕形土器、No.5の甕形土器、No.7の蓋形土器、No.8の高杯の坏部の4固体が垂直方向に重なる「四段重ね」状態であった可能性も考えられる。

さて、配名と土器埋納遺構とからなる祭祀遺構であるが、弥生時代終末から古墳時代の時期の屋外祭祀例としては、極めて珍しい、鹿児島市桑ノ丸遺跡で、線刻の施された壺形土器が台地の端部に埋納されていた事例があるが、祭祀の性格については不明である。今回検出された祭祀遺構の性格については言及しうる根拠は何もないが、検出地点のごく付近に小河川があり、それを臨む小さな台地上に遺構が形成されていることから、水に関連する祭祀とも想像してみたい。今後の類例の増加を待ちたい。



第15図 埋納過程想定模式図

(4) 遺物

A. 埋納された土器

引き続き、それぞれの遺物について記す。

No. 1 甕形土器の口縁部～胴部である。口縁部の一部と脚台部が欠損していた。脚台部については故意に壊された可能性が高い。器形は口縁部がやや外反し、屈曲部に稜をもつ。外面はハケメによる調整が施され、特に脚台部付近にその痕跡がよく残っている。口径28cm、おそらくは器高もその位になると思われる。「成川式土器」の中でも中津野式と呼ばれる一群の甕に相当するものと思われる。

No. 2 高坏の坏部である。口径12cmを計る。脚部は欠損しており、No. 1と同じく故意に壊された可能性が高い。外面はハケメ調整の後、丁寧にナデ仕上げされているが、脚部付近にハケメ跡を若干残している。赤色塗彩はされていない。

No. 3 高坏の略完形品である。口縁部及び脚部が一部欠損している。No. 2の高坏と極似している。同一の製作者の手によるものと思われる。外面はハケメ調整の痕跡が残る。口径約12cm、高さ約11cmを計る。

No. 4 鉢形土器の略完形品である。口縁部が一部欠損している。器形は高坏と鉢の中間的な形をなす。No. 2, 3の高坏より胎土に砂粒が目立つ。外面はハケメちナデ仕上げをとる。口径12cm、高さ8cmを計る。

No. 5 甕形土器の略完形品である。口縁部が一部欠損している。やや細身の甕で口縁部は若干外反する。屈曲部外面に稜をもつが、内面ははっきりとしない。ハケメによる調整が施されている。口径約20cm、高さ25cmを計る。

No. 6 高坏の坏部である。脚部は見つからなかったが、故意に壊されている可能性もある。口縁部は途中で屈曲し、大きく外反する。内外面ともにハケメによる調整が施されている。口径34.5cmを計る大型の高坏である。

No. 7 蓋形土器と考えられる。口縁部が欠損している。屈曲部内面に稜をもつが、外面は不明瞭である。外面はハケメによる調整が施されている。おそらく口径25～35cm程度の大きさになると推定される。

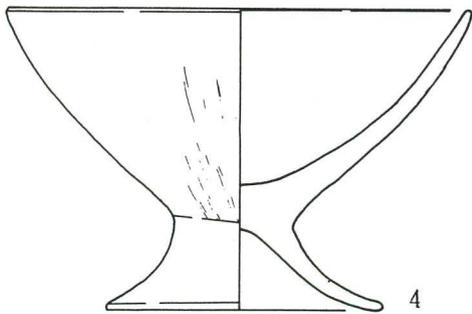
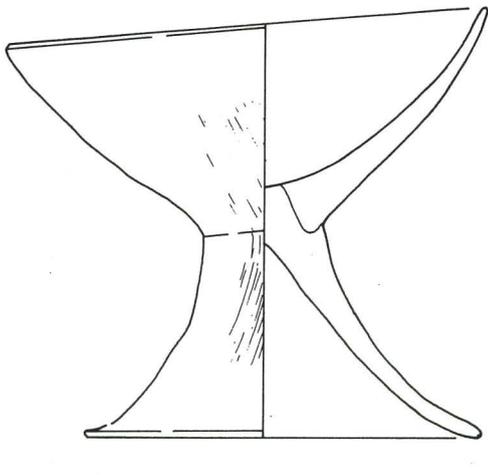
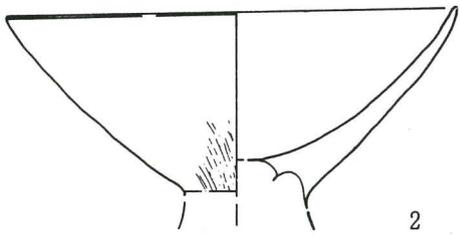
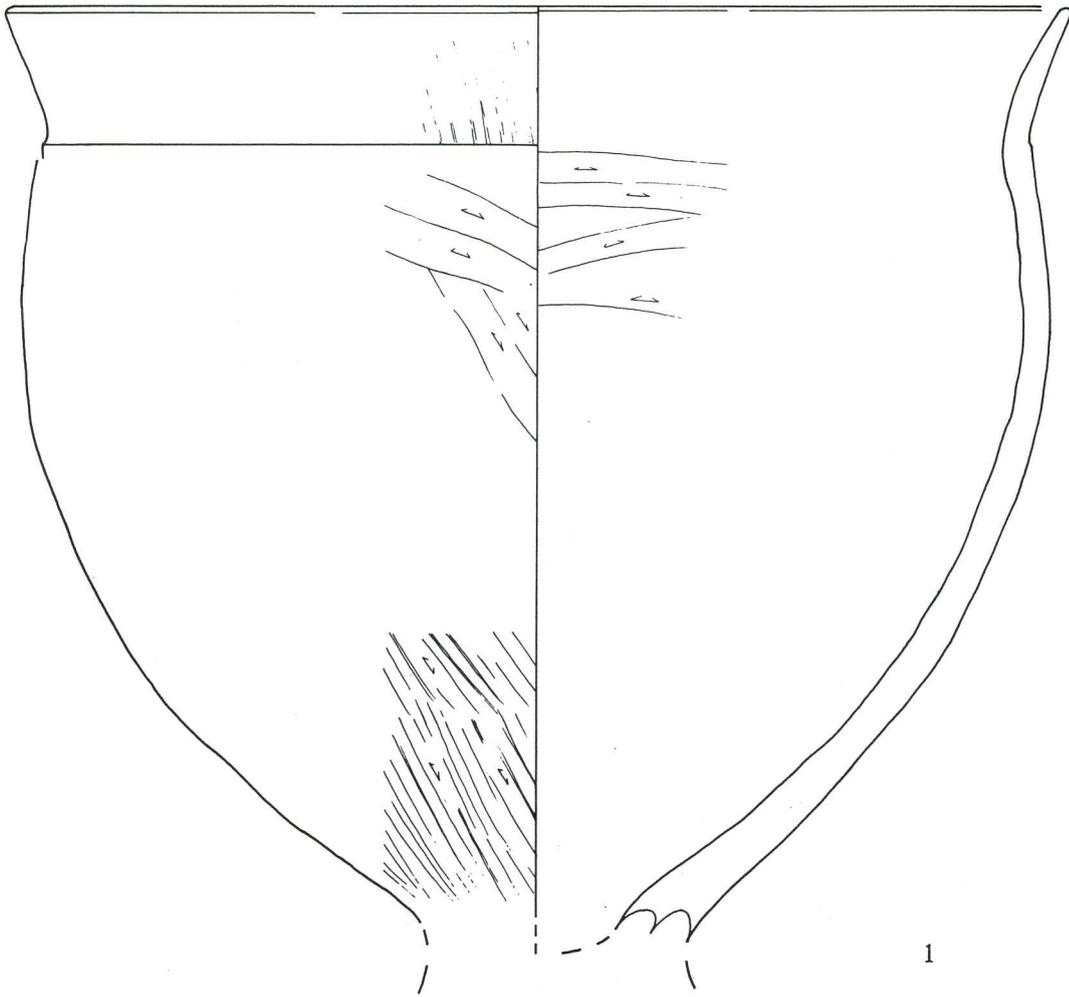
No. 8 高坏の坏部破片である。口縁部は外反し、内面途中に屈曲部をもつ。口唇部はその中央が若干凹む。内外面ともに、ミガキが施されている。

以上、8点が埋納された土器としてセットで把えることができるものである。No. 1, 5の甕形土器、No. 6, 7の高坏、蓋形土器は、いずれも中津野式土器と認識しうるもので、No. 2, 3の高坏についても、辻堂原式土器や笹貫式土器の段階以前の弥生的色彩の濃いものである。

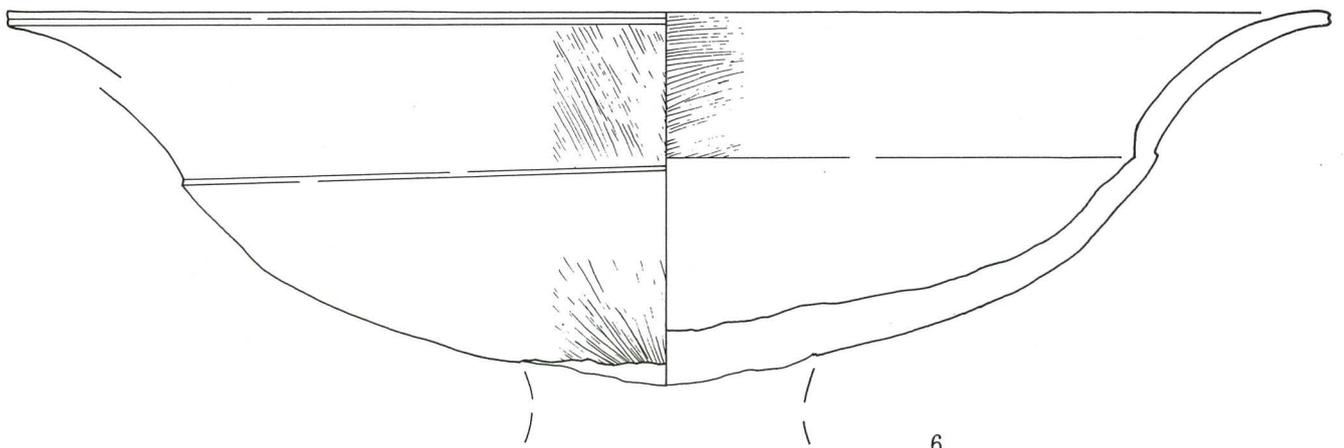
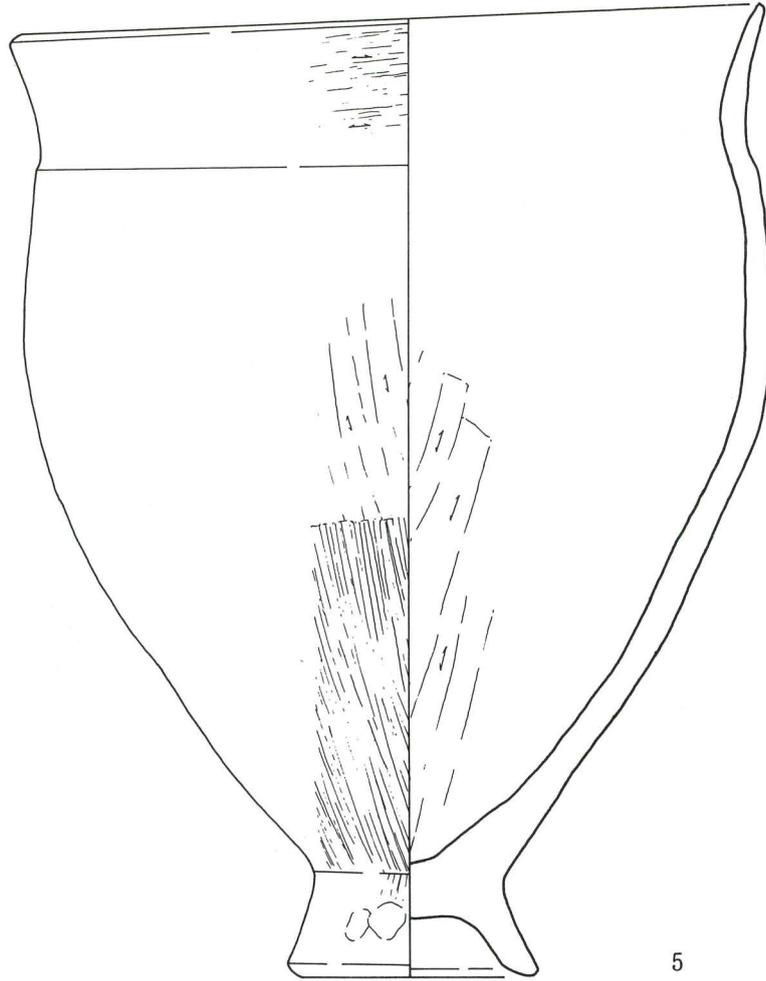
B. その他の出土遺物

No. 9は鉢形土器の口縁～胴部破片である。外面にハケメ痕が残る。No. 10は甕形土器口縁部破片である。外反する器形のものと思われる。外面はハケメ仕上げである。No. 11は甕形土器口縁～突帯部である。幅1.2cm程の突帯を貼りつけた後、キザミを施している。No. 12は、甕または鉢形土器の底部である。外面に工具による調整痕が残る。No. 13は甕または鉢形土器の底部破片である。No. 14は高坏脚部である。外内面ともに工具による調整の後、丁寧にナデ仕上げられている。外面の一部にユビオサエの痕跡が残る。No. 15は高坏脚部の破片である。外面は赤色塗彩されている。No. 16は高坏脚部の破片である。No. 18, No. 19は壺形土器口縁部～頸部の破片である。No. 20は壺形土器突帯部である。2条の突帯をめぐらせキザミを施す。No. 21は壺形土器頸部突帯部である。工字状突帯をめぐらす。弥生中期のものと思われる。No. 22は壺形土器底部破片である。No. 23は甕形土器口縁部破片である。口縁部が若干内湾するもので、笹貫式の甕に多く見られる特徴である。

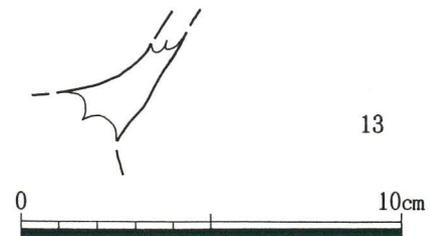
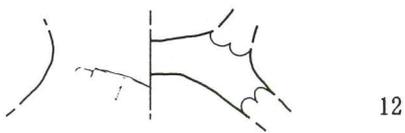
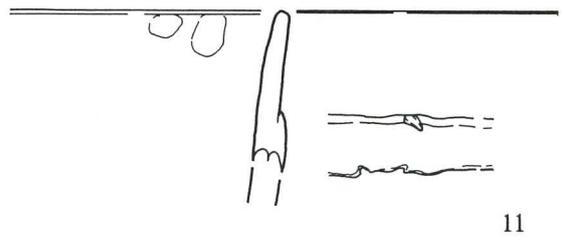
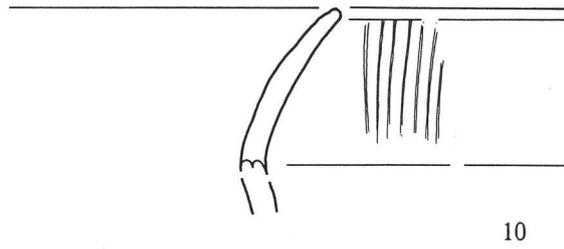
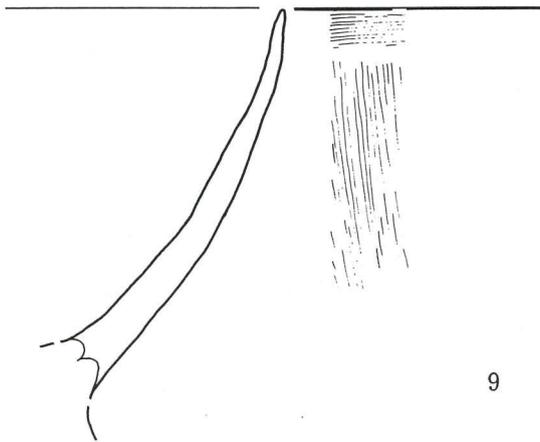
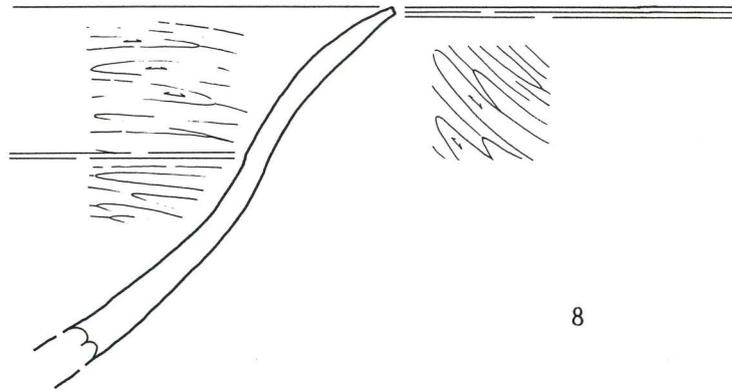
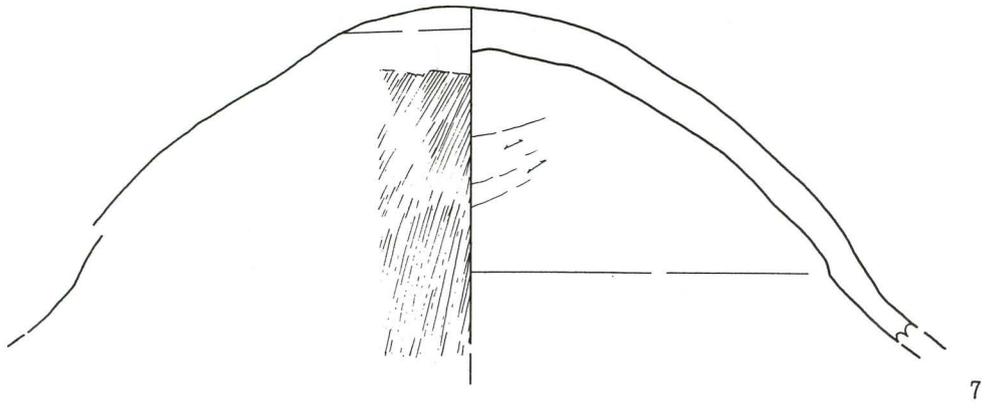
No. 24は、軽石加工品である。一部磨面が見られる。欠損品と考えられるが用途は不明である。No. 25は、台石である。敲打痕が2ヶ所明瞭に残る。配石された石のうち、No. 25のみが石器と認められた。



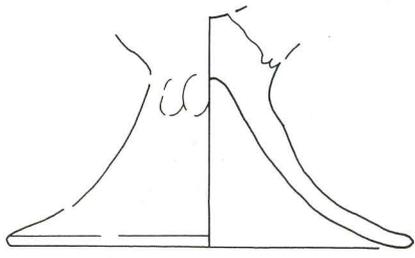
第16図 1 トレンチ遺物実測図① (S=1/2)



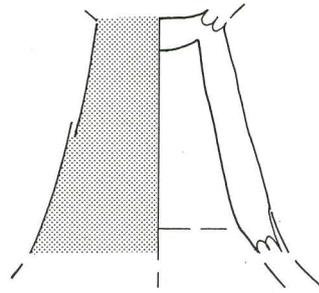
第17図 1トレンチ遺物実測図② (S=1/2)



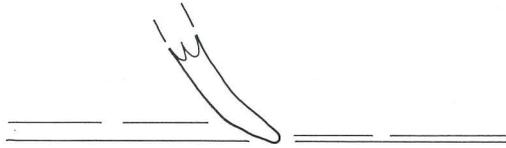
第18図 1 トレンチ遺物実測図③ (S=1/2)



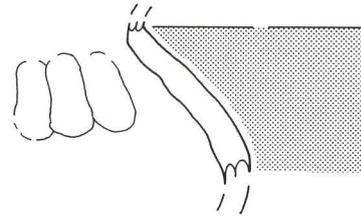
14



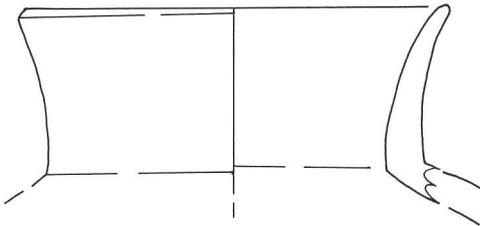
15



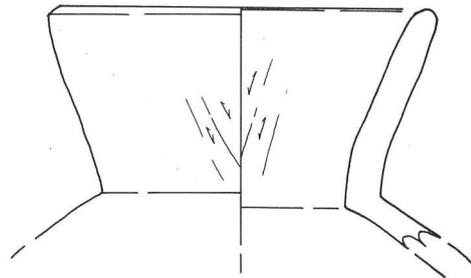
16



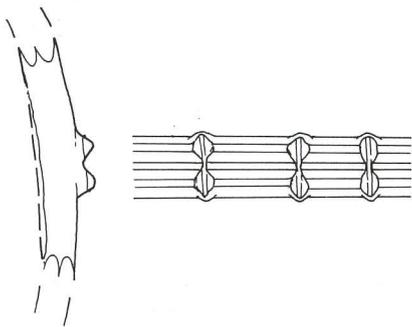
17



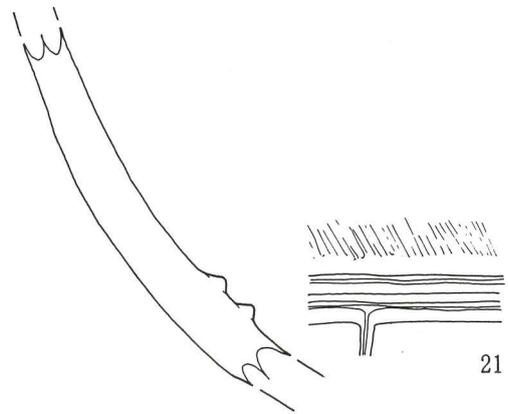
18



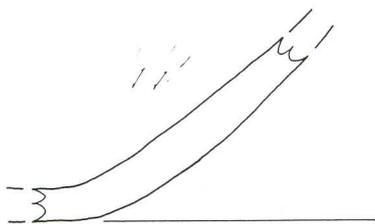
19



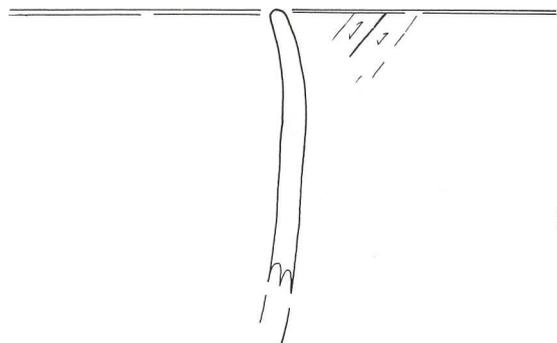
20



21



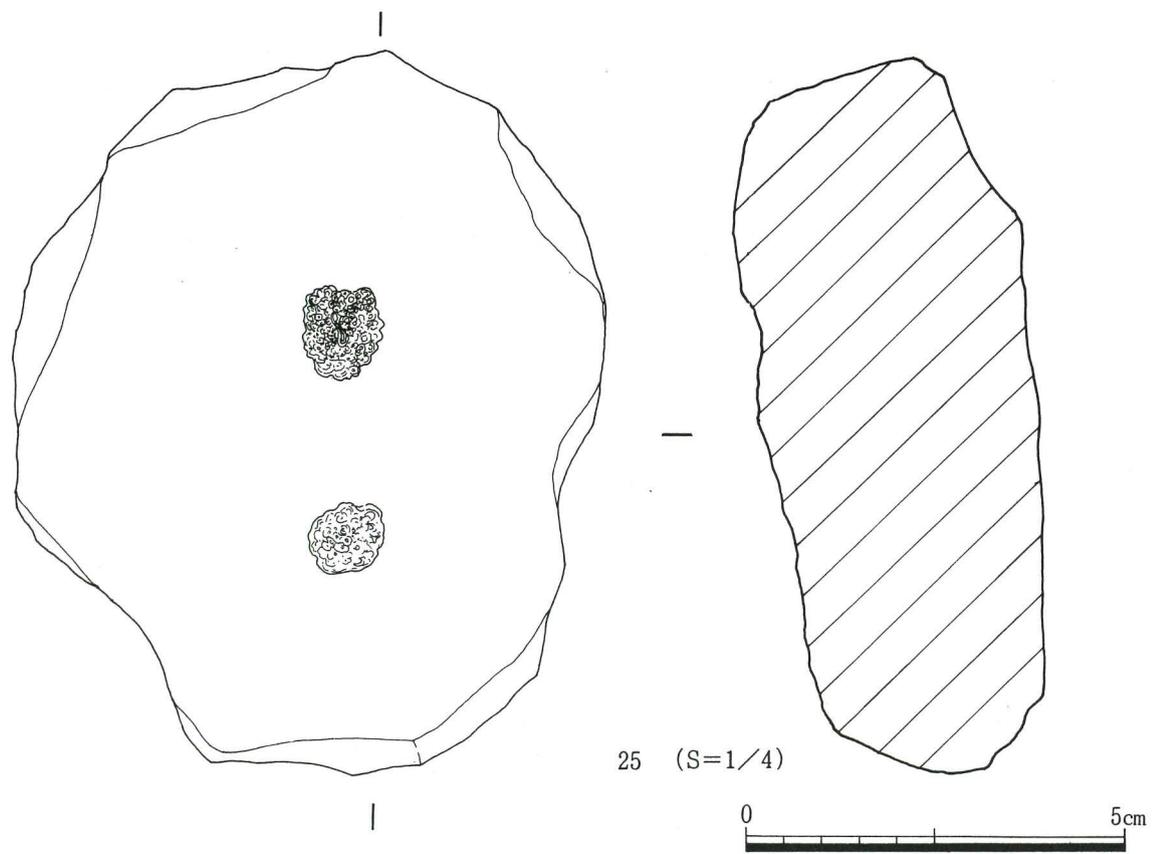
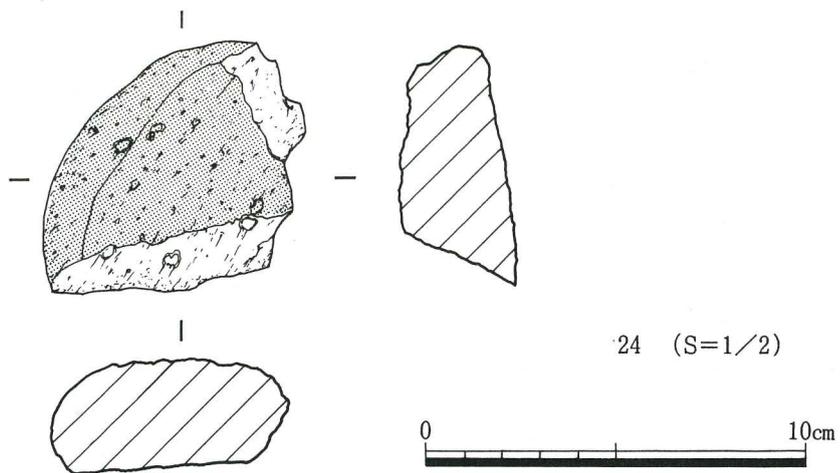
22



23



第19図 1 トレンチ遺物実測図④ (S = 1/2)



第20図 1 トレンチ遺物実測図⑤ (S=1/2)

観察表 1

図番	取上 No	残存法量	器 種	部 位	色 ㉑	色 ㉒	色 ㉓	色 ㉔	胎 土 粒	混和材	調 整	そ の 他	接 合
1	1T 19,78 土坑マイド	略完形 脚台部欠損 口縁部2/3 欠損	甕形土器	胴部～ 口縁部	㉑上 5YR2/1 ㉑下 10R5/4	2.5YR6/3 10YR7/1	2.5Y7/4		微砂粒を含む。細砂粒を含む。砂粒を含む。	㉑㉒	㉑工具によるナデのちナデ ㉒工具によるナデのちナデ、ハケメのちナデ ㉓ヨコナデ	良好 ハケメ5～6本 + α / cm	19
2	1T 77 土坑マイド	坏部1/1 脚部欠損	高 坏	坏部破 片	2.5Y8/4 10Y3/1	10YR7/4 2.5Y4/2	10YR4/1		細砂粒を含む 微砂粒を含む	㉑㉒	㉑ナデ ㉒工具によるナデのちナデ、ハケメのちナデ ㉓ヨコナデ	良好 ハケメ5～6本/cm	
3	1T 76,77 土坑マイド	略完形 口縁部及び底 部一部欠損 口径12.5cm 高さ12.5cm 底部9.8cm+2	高坏形土器	—	10YR8/4 N5/0	10YR8/4 N5/0	N3/0 10YR8/4	㉑内 10YR7/4 10YR4/1	細砂粒を含む 微砂粒を含む	㉑㉒	㉑工具によるナデのちナデ ㉒ハケメのちナデ ㉓ヨコナデ ㉔ヨコナデ ㉕工具によるナデのちナデ ㉖ハケメのちナデ ㉗ヨコナデ	良好 ハケメ5～6本/cm	77
4	1T 75,73 土坑マイド	略完形 口縁部1/3 欠損	鉢形土器	—	2.5YR7/1 2.5Y7/4 7.5YR5/1	N4/0 5YR8/1	5YR8/2 5PB7/1	㉑内 7.5R7/1	細砂粒を含む	㉑㉒	㉑工具によるナデのちナデ ㉒ハケメのちナデ ㉓ヨコナデ ㉔ヨコナデ ㉕工具によるナデのちナデ ㉖ナデ ㉗ハケメのちナデ ㉘ヨコナデ	良好 ハケメ2～3本 + α / cm	73
5	1T 78 土坑マイド	略完形 口縁部3/5 欠損	甕形土器	—	10R6/4 10YR6/4	5YR7/4 7.5YR2/1	5YR	㉑内 5YR5/1 10YR7/4	微砂粒を含む 細粒を含む	㉑㉒	㉑ヘラズリ ㉒ハケメによるナデのちナデ、ハケメのちナデ ㉓ナデ ㉔ユビオサエのちナデ ㉕ヨコナデ	良好 ハケメ8～9本/cm	土抺マイ ド74 9層 19
6	1T 19,74 9層	破片 坏部1/3欠 損	高坏形土器	胴部～ 口縁部	2.5YR7/6 2.5YR7/1	2.5YR7/6 N6/0 2.5Y7/4	5Y5/1 5YR7/4		微砂粒を含む 細砂粒を含む	㉑㉒	㉑ナデ、ハケメ ㉒ハケメのちナデ ㉓ヨコナデ	良好 ハケメ9～10本 + α / cm	土抺マイ ド74 9層 17,18
7	1T 19 9層	破片	蓋形土器	口縁部 欠損	7.5YR7/4	7.5YR6/2 7.5YR7/4	7.5YR7/4	㉑ 7.5YR1.7/1	微砂粒を含む 細砂粒を含む	㉑㉒ ㉓	㉑工具によるナデのち ナデ ㉒ハケメのちナデ	良好 ハケメ×10本 + α / cm	
8	1T 79 土坑マイド	破片 1/5～2/5	高 坏	口縁部	10YR7/4 2.5YR6/2	2.5YR5/2 7.5YR4/1	7.5YR4/1		細砂粒を含む 微砂粒を含む	㉑㉒	㉑ミガキ ㉒ミガキ ㉓ヨコナデ	良好	
9	1T 25,26 9層	破片1/5	鉢形土器	口縁部 ～胴部	2.5YR7/3 7.5YR4/1	2.5YR7/3	7.5YR7/4		微砂粒を 若干含む 細砂粒を 若干含む	㉑㉒	㉑工具によるナデのち ナデ ㉒ハケメのちナデ	良好 ハケメ8～9本/cm	26
10	1T 71 9層	破片	甕形土器	口縁部	10R5/4	2.5YR4/4 5YR4/1	7.5YR6/4		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒	㉑ナデ ㉒ハケメ ㉓ヨコナデ	良好 ハケメ3本/cm	
11	1T 56 9層	破片	甕形土器	口縁～ 突帯部	10YR2/1	5YR7/3 10YR8/2	5YR7/3		細砂粒を 若干含む 微砂粒を 若干含む	㉑㉒	㉑ユビオサエのちナデ ㉒ナデ、ナデのちキザ ミ ㉓ナデ	良好 傾きギモン	
12	1T 14 9層	破片	甕or鉢形土 器	底部	7.5YR4/2 5YR6/3	7.5YR3/1	5YR4/2 2.5YR5/4	㉑内 2.5Y4/1	微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒	㉑ナデ ㉒工具によるナデのち ナデ ㉓ナデ	良好	
13	1T 13 9層	破片	鉢or甕形土 器	底部	10YR7/3	—	5YR8/4	㉑内 10YR7/3	微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒	㉑ナデ ㉒ナデ	良好	
14	1T 27 9層	破片 脚部3/5	高坏形土器	脚部	2.5YR7/3 N6/0	2.5YR6/3	2.5YR7/3 5YR7/2	㉑内 2.5YR7/2 10YR5/1	微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒	㉑ユビオサエのちナデ、 ハケメのちナデ ㉒工具によるナデの ちナデ ㉓ヨコナデ	良好	
15	1T 63 9層	破片 脚部1/3	高坏形土器	脚部	10R4/8	2.5YR6/3	10R6/4 10R5/2	㉑内 10YR7/4	微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ナデ ㉒赤色塗彩 ㉓ナデ	良好 外面赤色塗彩	
16	1T 35 9層	破片	高坏形土器	脚部	7.5YR7/4	—	10YR6/3		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒	㉑工具によるナデのち ナデ ㉒ナデ ㉓ヨコナデ	良好	
17	1T 59 9層	破片	罍形土器	胴部	10R5/6	2.5YR6/8	2.5YR6/8		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ユビオサエのちナデ ㉒赤色塗彩	良好	
18	1T 53,54 9層	破片1/1	壺形土器	口縁部	10R6/4 10YR7/4	10R6/4 10YR7/4	10R6/4 10YR7/4		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑工具によるナデのち ナデ ㉒具によるナデのち ナデ	良好	54
19	1T 60 9層	破片 2/5～2/3	壺形土器	口縁部 ～頸部	10R5/6 10YR6/4	10R5/6	10R6/6		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒	㉑具によるナデのち ナデ ㉒具によるナデのち ナデ ㉓ナデ	良好	

㉑ 白色粒、㉒ 黒色粒、㉓ カクセン石、㉔ セキエイ、良好…焼成良好

図番	取上 No	残存法量	器 種	部 位	色 ㉑	色 ㉒	色 ㉓	色 ㉔	胎 土 粒	混和材	調 整	そ の 他	接 合
20	1T 42 9層	破片	壺形土器	突帯部	2.5YR4/2 10YR6/3	10YR6/4	5YR6/6		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒	㉑ハクラク ㉒工具によるナデのち ナデ ㉓ヨコナデのちキザミ	良好	42
21	1T 36 9層	破片	壺形土器	頸 部 突帯部	10YR7/4	7.5YR6/4	7.5YR6/4 5Y3/1		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ナデ, ユビオサエ ㉒ハケメのちナデ, ナ デ ㉓ヨコナデ	良好	
22	1T 22 9層	破片	壺形土器	底部	2.5YR6/6	2.5YR7/6	10YR6/4	㉔ 5YR6/4	微砂粒を 含む 砂粒を含 む	㉑㉒ ㉓	㉑工具によるナデのち ナデ ㉒工具によるナデのち ナデ ㉓ナデ	良好	
23	1T 12 9層	破片	甕形土器	口縁部	10R4/2	10R4/2 2.5YR6/4	10YR6/3 2.5YR5/3		微砂粒を 含む 細砂粒を 含む	㉑㉒	㉑工具によるナデのち ナデ ㉒工具によるナデのち ナデ ㉓ヨコナデ	良好 傾きギモン	
24	21 9層	短 6.4cm 長 6.5cm 厚さ 3cm	軽石加工品									製品か未製品か, はっきりしない。 自然石の可能性 有?	

第3節 2トレンチの調査

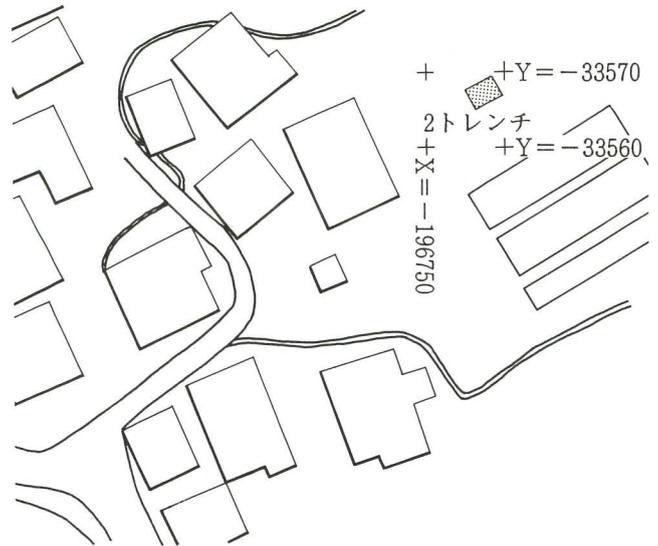
(1) 概要

国指定地より南へ約50m、1トレンチから北西へ約100mの地点に2トレンチを設けた。トレンチは4×3mの大きさで、地表下約3mの縄文時代晩期の包含層上面までを確認した。第7層上面において、奈良～平安時代の杭列痕を検出した他、第9層からは、古墳時代の土器片10数点の出土を見た。古墳時代の遺構は確認されなかった。

(2) 層位

第1層、第4層～9層までを確認した。

現地地表下約1.3mで、第5層を確認したが、中世時期の掘削により一部削平を受けていた。南壁断面に見られるように、第5層はもともと約30cm堆積していたと考えられるが、削平をうけ、平均10cm前後の堆積となっている。第4層には、遺構・遺物を確認できなかったが、何らかの理由で一部火山灰を掘削したものであると思われる。第7層の青コラ火山灰は20～25cm前後の厚さで、下層にはスコリアがルーズに堆積している。さらに、その下層には土石流堆積物である第8層が20～30cm前後積もり、第9層を覆っている。



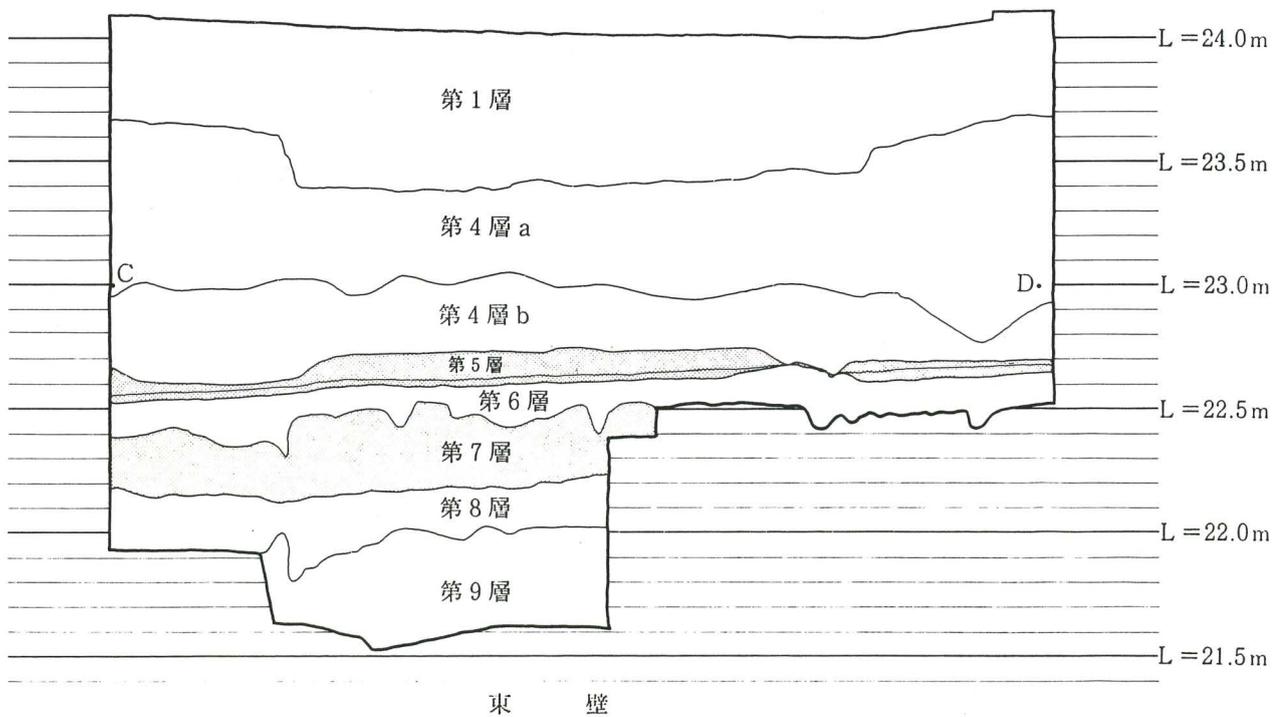
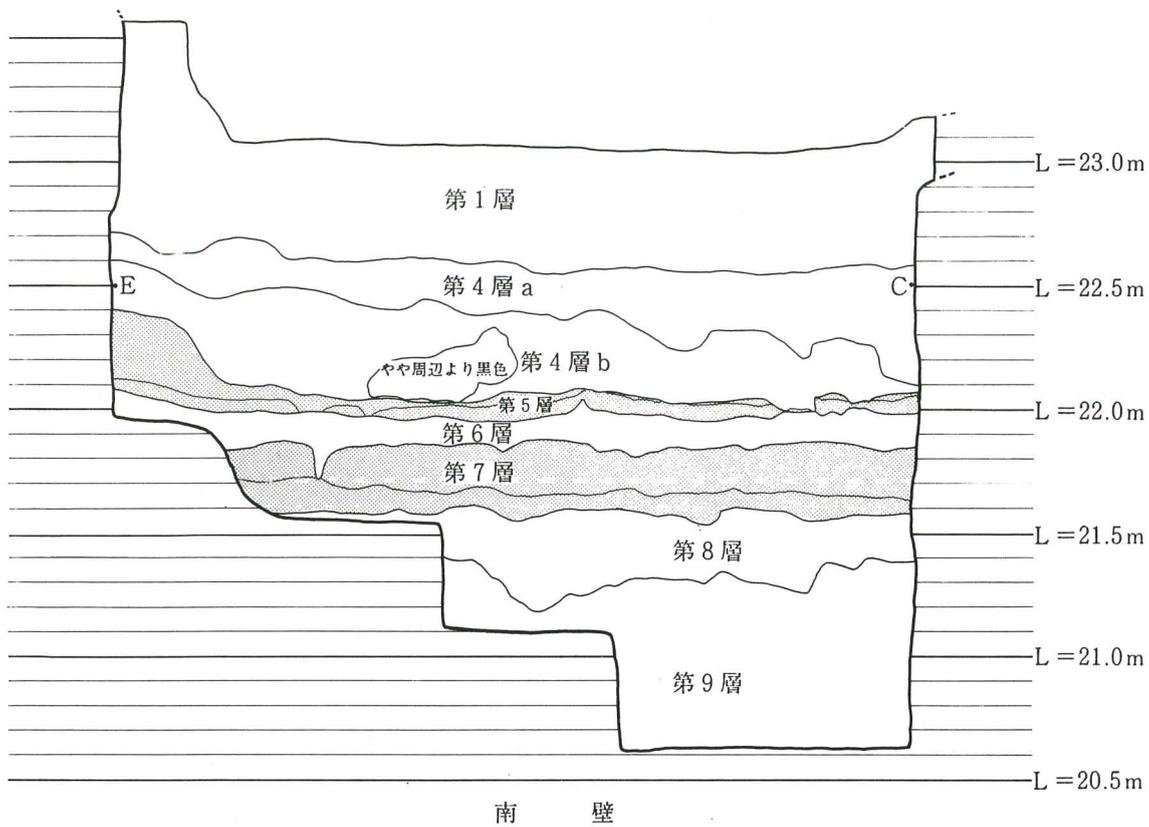
第21図 2トレンチ位置図 (S = 1/1,000)



写真図版11 2トレンチ調査完掘状況



写真図版12 2トレンチ調査東壁断面状況

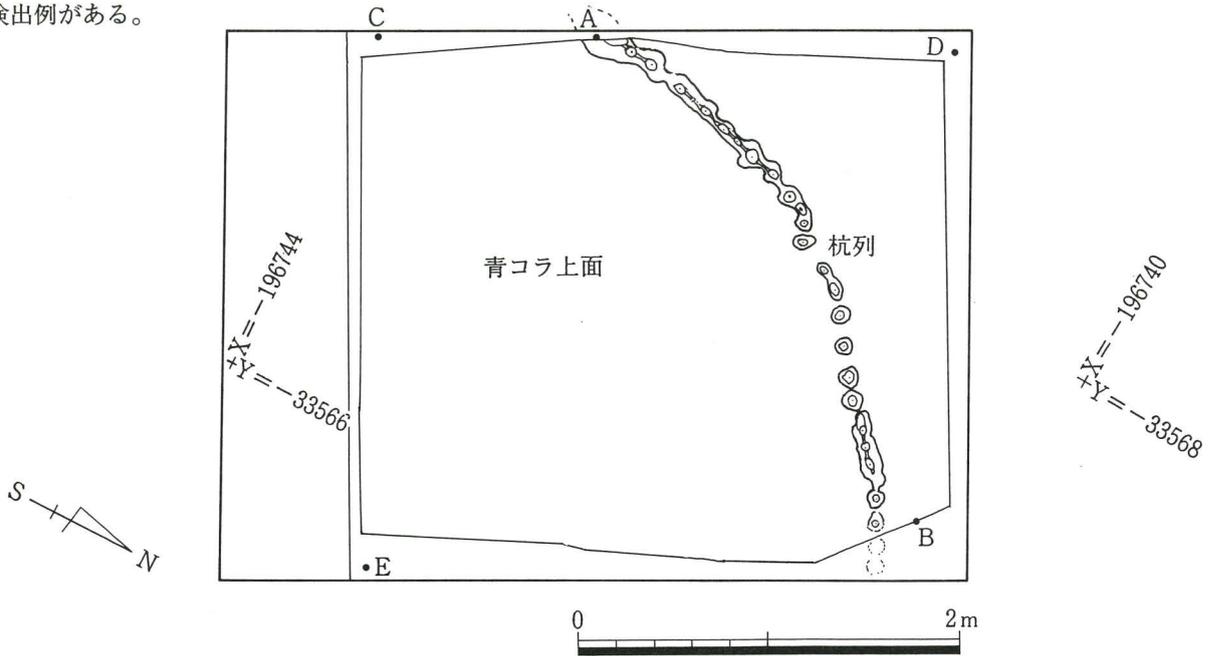


第22図 2トレンチ層位断面図 (S = 1/30)

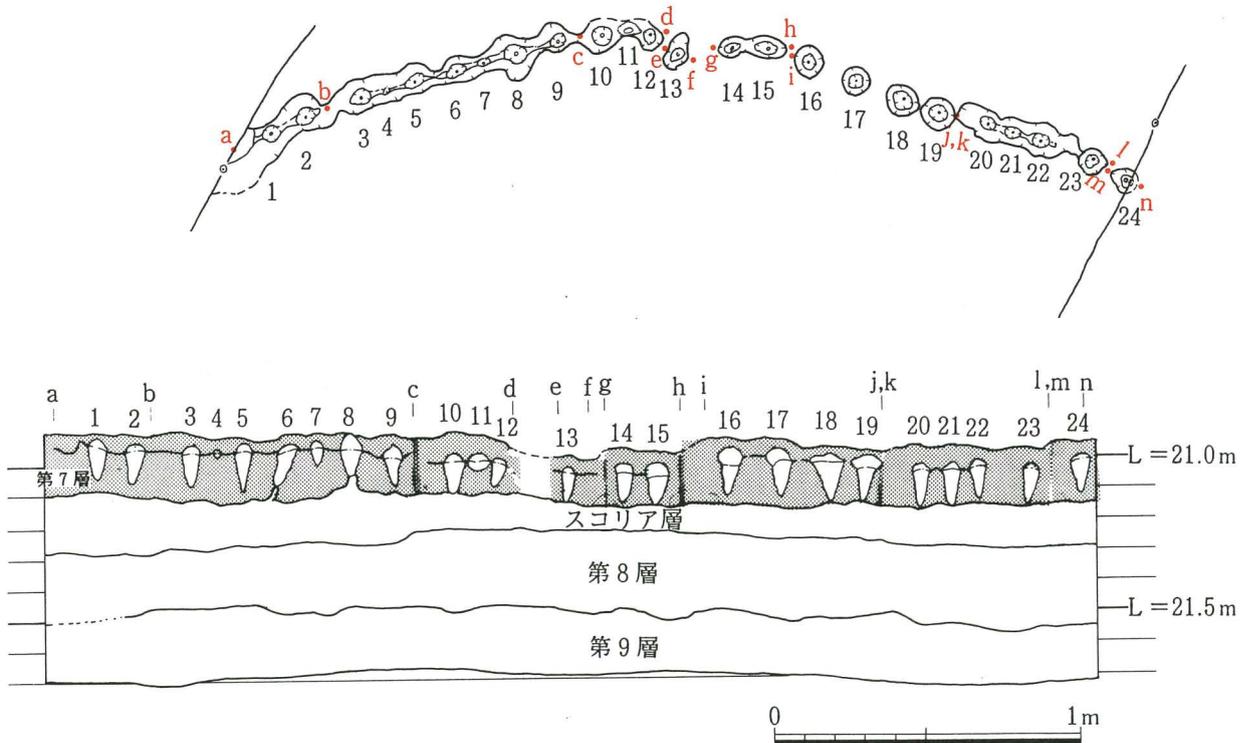
(3) 遺 構

A. 杭列跡 (奈良~平安時代)

第7層上面で、第6層中より打ち込まれたと考えられる杭列跡が確認された。杭は直径5cm程度で、5~10cmの間隔で、北東-南西方向にやや弧を描くようにカーブしながら続いていた。第7層の青コラ火山灰中には10~15cmの深さで打ち込まれており、貫通はしていない。第6層の上面から打ち込んだとしても、最大30cm程度打ち込まれたものとなるが、この杭列の性格については今のところ不明である。なお、同様の杭列は、橋牟礼川遺跡においてこれまでも検出例がある。



第23図 杭列跡検出状況図 (S = 1/40)



第24図 杭列跡平面図・断面図 (S = 1/25)



写真図版13 杭列検出状況



写真図版14 杭列断面状況

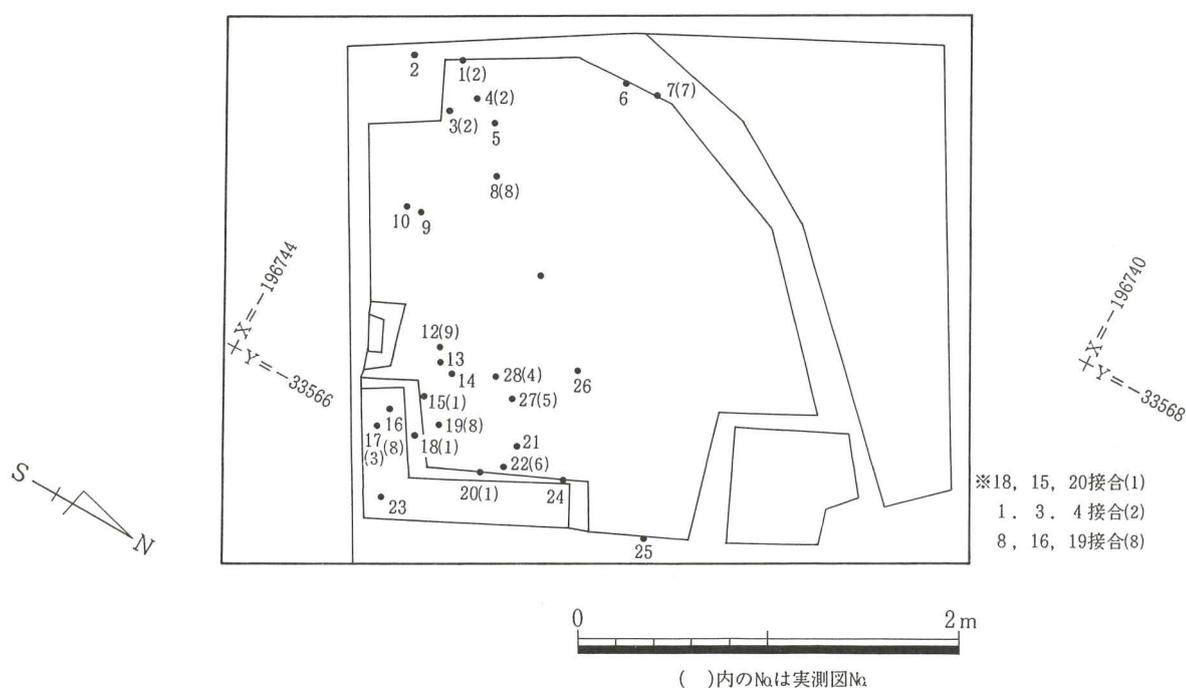
(4) 遺物

A. 第9層出土遺物（古墳時代包含層）

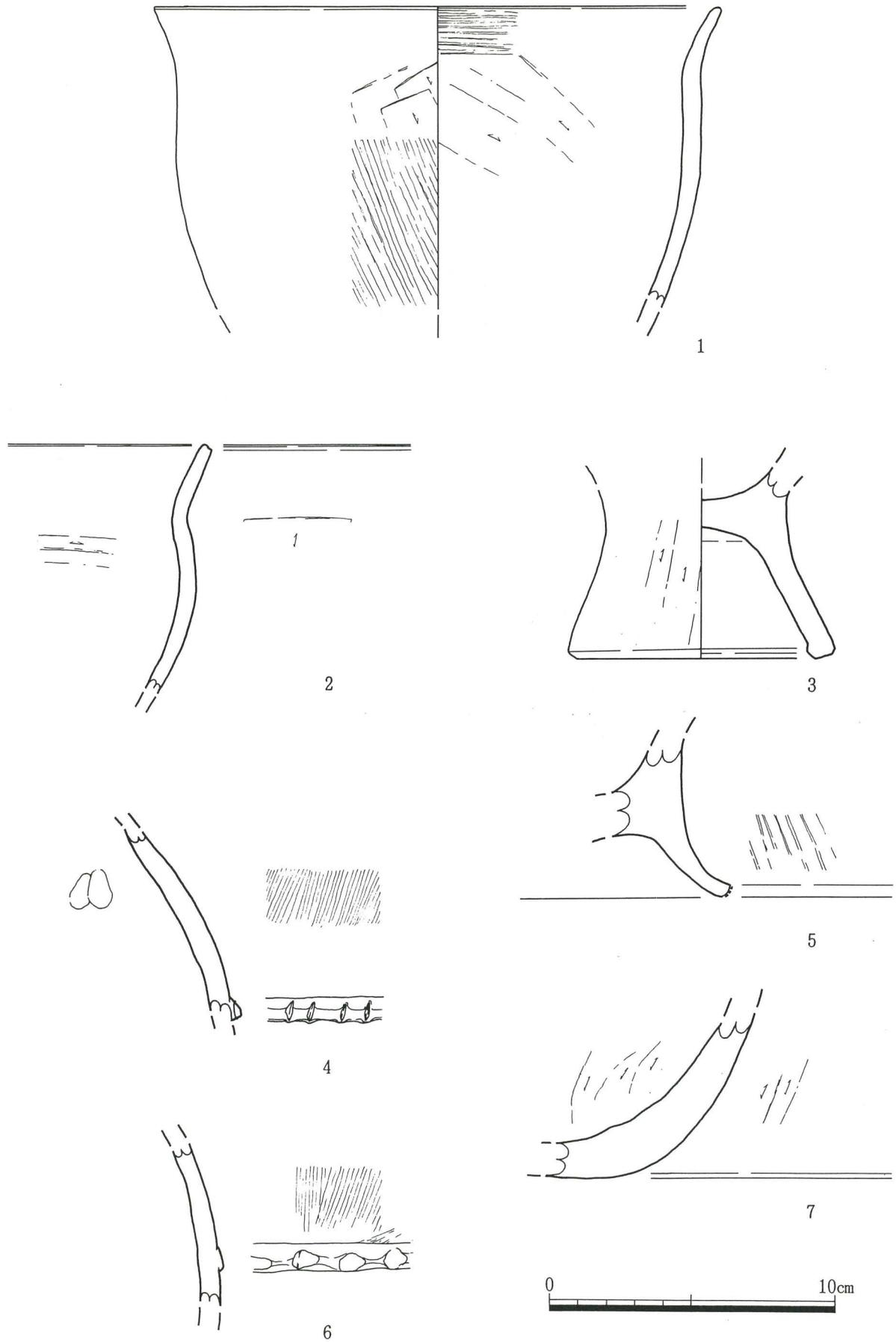
No. 1 は甕形土器口縁～胴部片である。口縁部はゆるやかに外反するが、内外面に稜はみられない。外面はハケメによる調整が施されている。口径は約20cmを計る。成川式土器の中でも東原～辻堂原式にかけての時期のものに相当すると思われる。No. 2 は甕形土器口縁部である。ゆるやかに外反し、口唇部が若干凹む。No. 1 と同様の時期のものと思われる。

No. 3 は甕形土器底部である。底部見込み部はやや丸みをおびる。

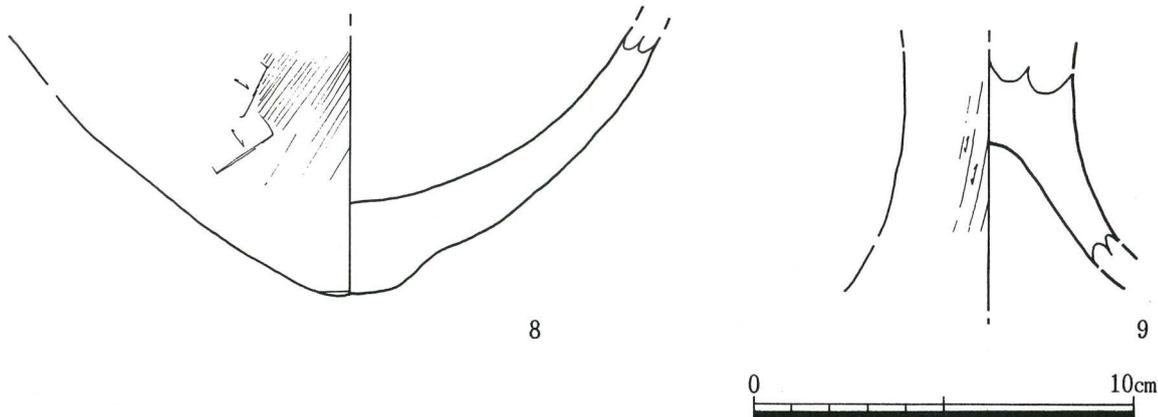
No. 4 は壺形土器突帯部である。突帯にはキザミを施す。No. 5 は甕形土器底部の破片である。外面にハケメ調整が施されている。No. 6 は壺形土器突帯部である。突帯はユビオサエによる装飾が施されている。No. 7 は壺形土器底部である。平底である。外面に工具による器面調整の痕跡がみられる。No. 8 は底形土器底部である。丸底である。外面にハケメ調整が施されている。No. 9 は高坏の脚部である。器面調整の工具痕が若干みられる。



第25図 2 トレンチ遺物出土状況図 (S = 1 / 40)



第26図 2トレンチ遺物実測図① (S=1/2)



第27図 2 トレンチ遺物実測図② (S=1/2)

観察表 2

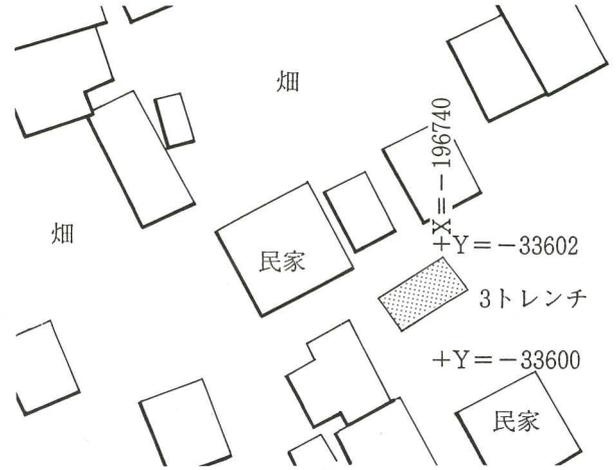
図番	取上 No.	残存法量	器種	部位	色 ㉑	色 ㉒	色 ㉓	色 ㉔	胎土粒	混和材	調整	その他	接合
1	15,18,20 9層	破片1/3	甕形土器	口縁~ 胴部	2.5YR6/4 5YR4/6	2.5YR6/4 5YR4/6	2.5YR5/6		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉑㉒	㉑ 工具によるナデ ㉒ ハケメのちナデ、一部カー ボン付着 ㉓ ハケメのち ナデ ㉔ 工具によるナデ のちナデ	良好 ハケメ5~6本/cm	18,20,21, 13
2	1,3,4 9層	破片 1/5~1/4	鉢の甕形土 器	口縁部	2.5YR6/4 10R4/2	7.5YR7/6	7.5YR8/4		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ 工具によるナデのち ナデ ㉒ 工具によるナデのち ナデ ㉓ ヨコナデ	良好	3,4
3	17 9層	破片1/1	甕形土器	底部	5YR5/6 5GY6/1	5YR5/6 5GY6/1	5YR5/6 5GY6/1	㉑㉒ 5YR5/6 5GY6/1	細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉑㉒	㉑ ナデ ㉒ 工具によ るナデのちナデ ㉓ 工具によるナデのちナ デ ㉔ ヨコナデ	良好	
4	28 9層	破片	壺形土器	突帯部	5YR6/6	5YR7/4 2.5YR7/3	5YR7/4		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ ユビオサエのちナデ、 ナデ ㉒ ハケメのちナデ ㉓ ヨコナデのちキザミ	良好 傾きギモン	
5	27 9層	破片 1/5~2/5	甕形土器	底部	5YR7/4	2.5YR6/6 10R4/1	5YR7/4 2.5YR6/4	㉑ 7.5YR7/4	細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉑㉒	㉑ ナデ ㉒ ハケメによ るナデのちナデ ㉓ ヨコナデ ㉔ マメツ	良好	
6	22 9層	破片	壺形土器	突帯部	7.5YR7/6 2.5GY2/1	7.5YR4/1 5YR5/1	7.5YR8/4 10YR8/4		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ ナデ一部ハクラク ㉒ ハケメのちナデ、ナ デ ㉓ ヨコナデのちキザミ	良好 傾きギモン	
7	7 9層	破片	壺形土器	底部	7.5YR8/4	5YR6/6 10YR4/1	5YR6/6	㉑ 7.5YR7/6	細砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ 工具によるナデ ㉒ 工具によるナデのち ナデ	良好	
8	8,16,19 9層	破片2/3	壺形土器	底部	10YR6/4 7.5YR6/6	5YR5/4 5Y4/1	7.5YR6/6	㉑ 5YR6/6	細砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ 工具によるナデのち ナデ ㉒ ハケメのちナ デ、工具によるナデ ㉓ ナデ	良好	8,16
9	12 9層	破片	高坏形土器	脚部	10R6/6 2.5YR2/1	-	10R6/6	㉑㉒ 10YR5/4	微砂粒を 含む	㉑㉒ ㉓	㉑ 工具によるナデのち ナデ ㉒ ナデ	良好	

第4節 3トレンチの調査

(1) 概要

2トレンチの西側約40mの所に4×8mの3トレンチを設けた。現代～近世にかけての柱穴群，古墳時代の柱穴群を確認した。遺物は，第9層～第10層中より古墳時代・弥生時代の土器が出土した。

2，3トレンチは，国指定地の南西近接地にあたるが，基本層序も国指定地と同様で，検出遺構，出土遺物からも国指定地と同質の遺跡が広がっているものと考えられる。



第28図 3トレンチ位置図 (S=1/1,000)

(2) 層位

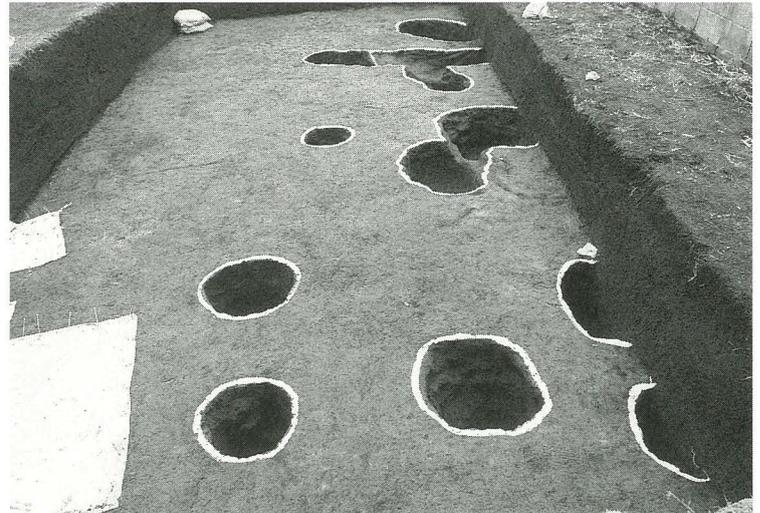
第1層，第5層～9層，第10層上面までを確認した。

第5層の紫コラ，第7層の青コラ火山灰は，ともに20～30cm前後の厚さで堆積していた。第7層下には，土石流堆積物が10cm前後の厚さで積もり，下層の9層と不整合を示していた。遺物は第9層及び第10層上面より土器片数点が出土した。

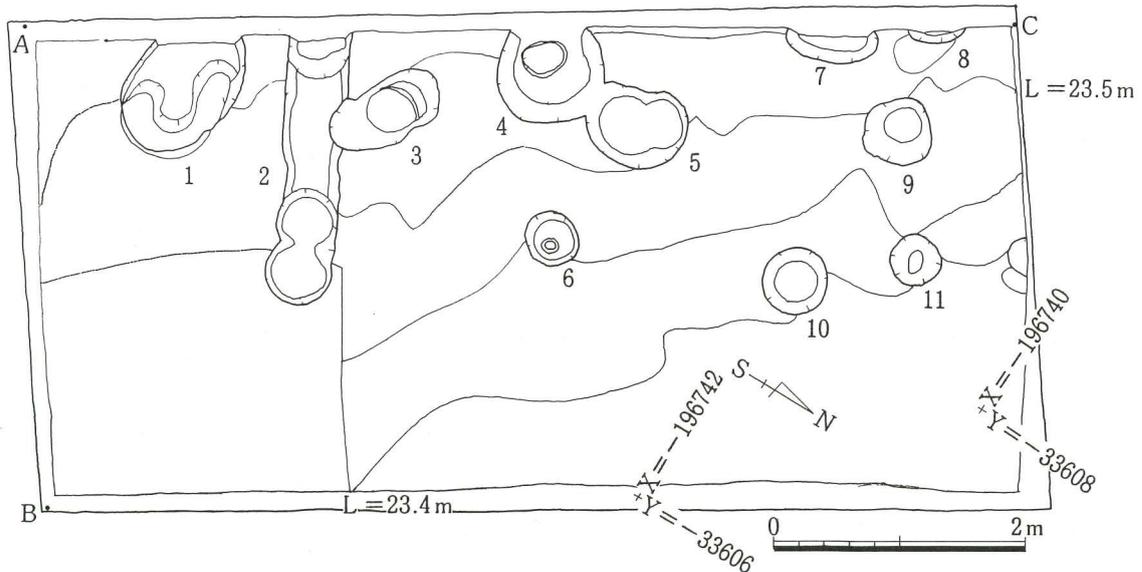
(3) 遺構

A. 柱穴 (近世～現代)

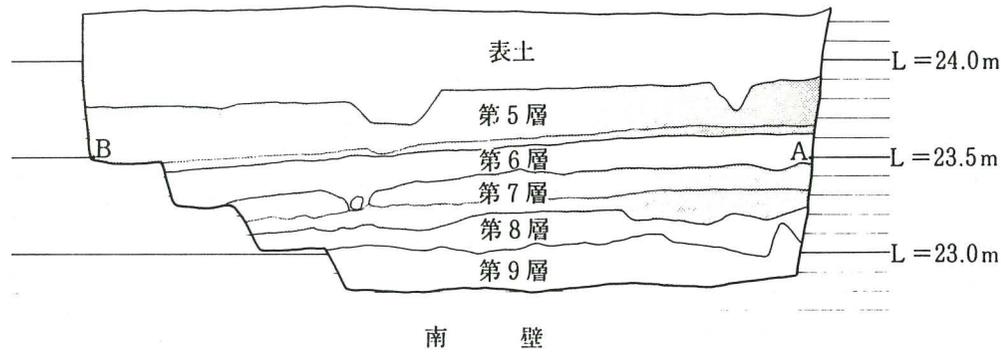
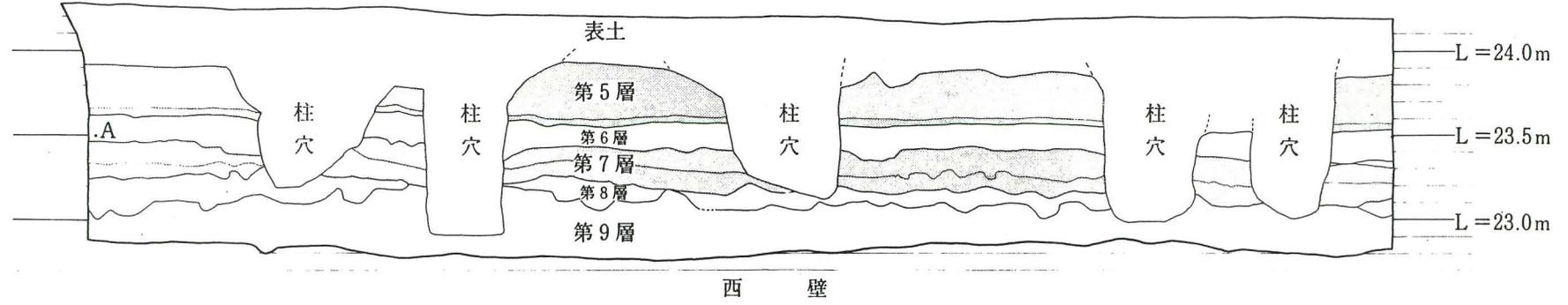
第5層上面において，第1層を埋土する柱穴11基を確認した。第1層には，近世陶磁片～現代の陶磁器までが包含されているため，遺構の時期を特定することはできなかった。柱穴はいずれも直径20cmをこえ，第7層の青コラ火山灰を掘り抜き，第9層にまで達していた。



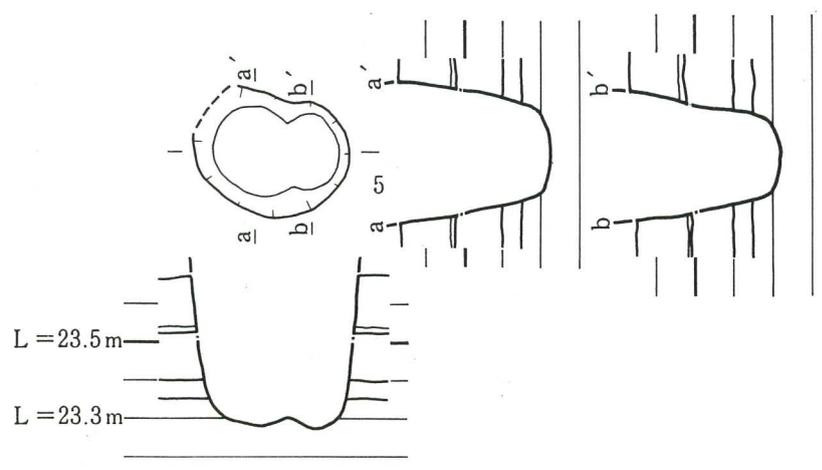
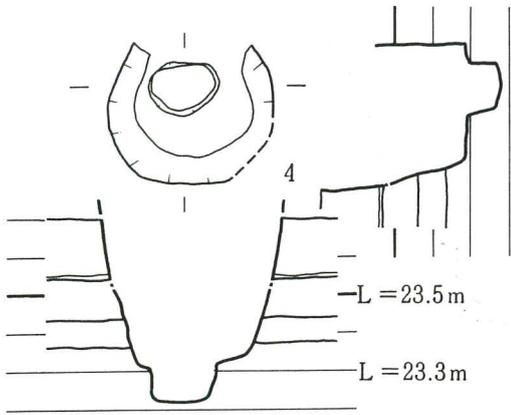
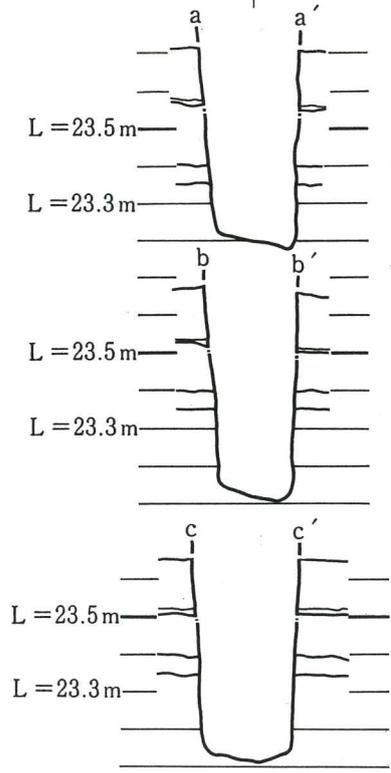
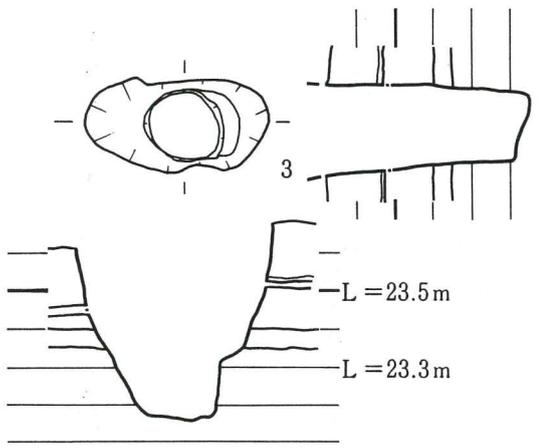
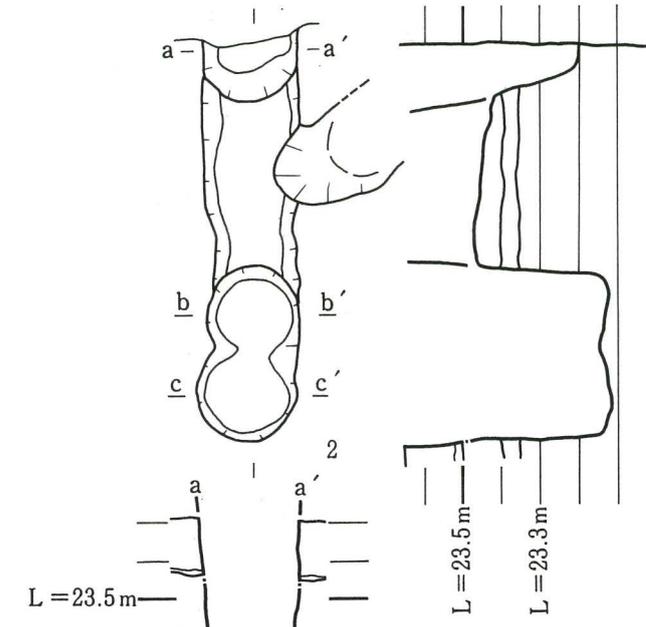
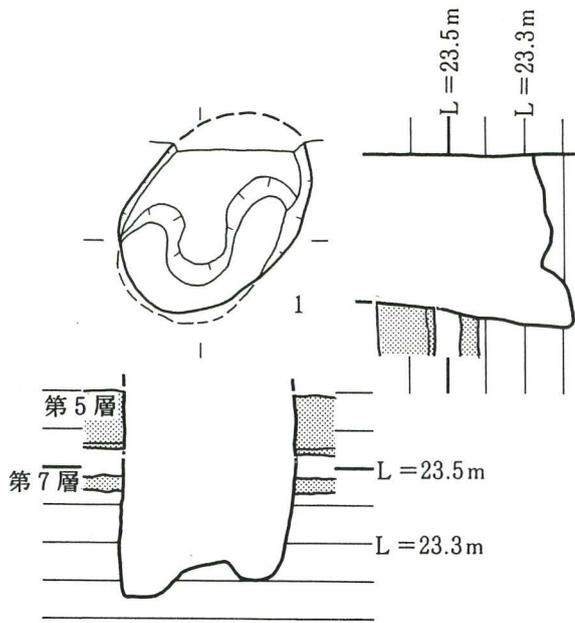
写真図版15 柱穴検出状況



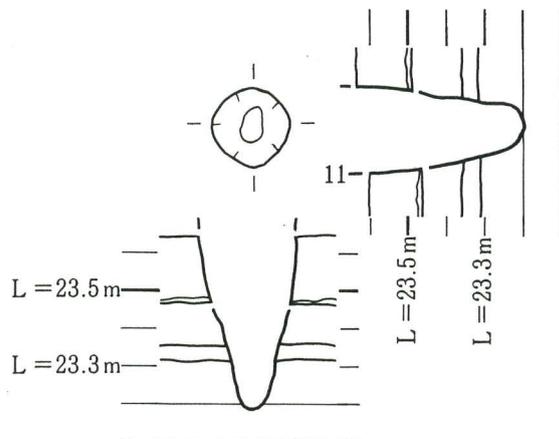
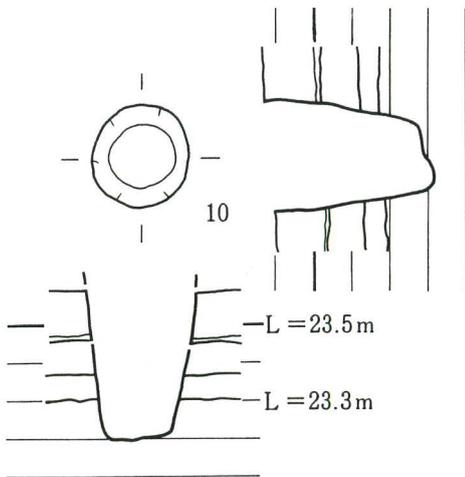
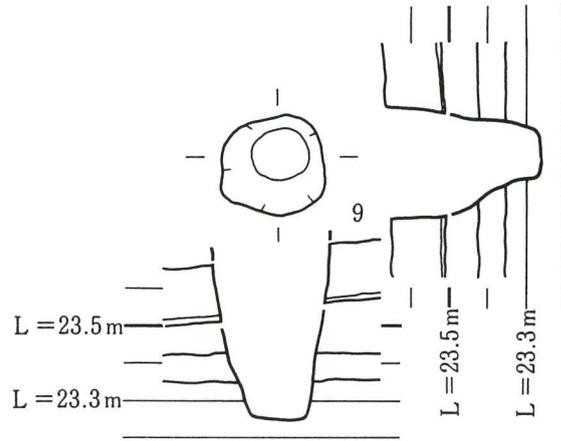
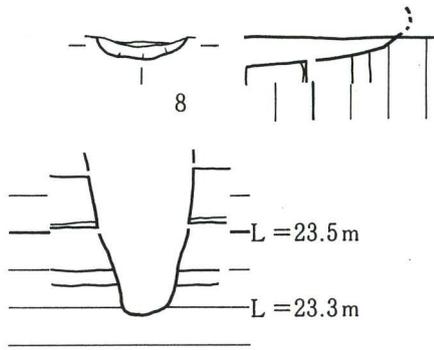
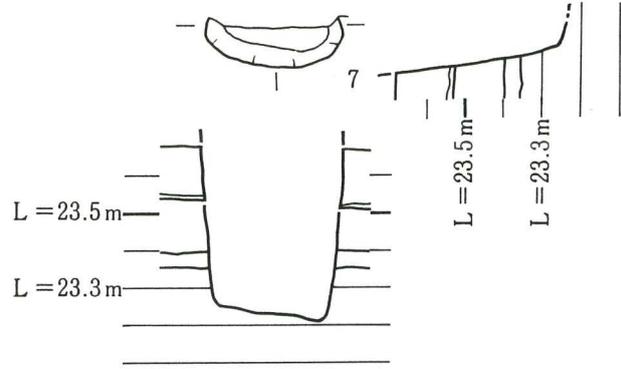
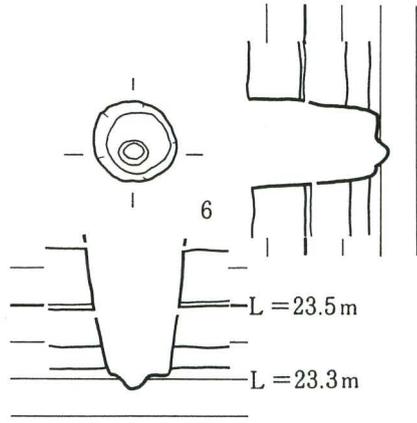
第29図 柱穴群検出状況図 (S=1/30)



第30図 3 トレンチ層位断面図(S=1/40)



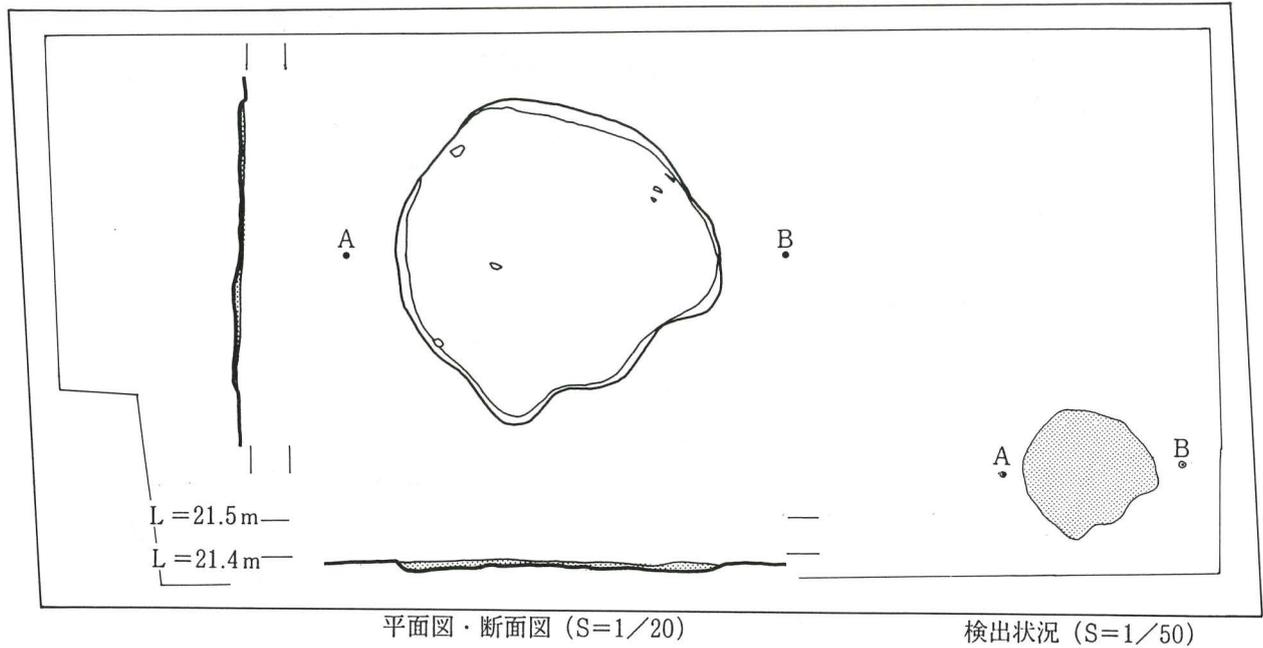
第31图 柱穴平面图·断面图① (S=1/20)



第32图 柱穴平面图·断面图② (S = 1/20)

B. 焼土跡（平安時代）

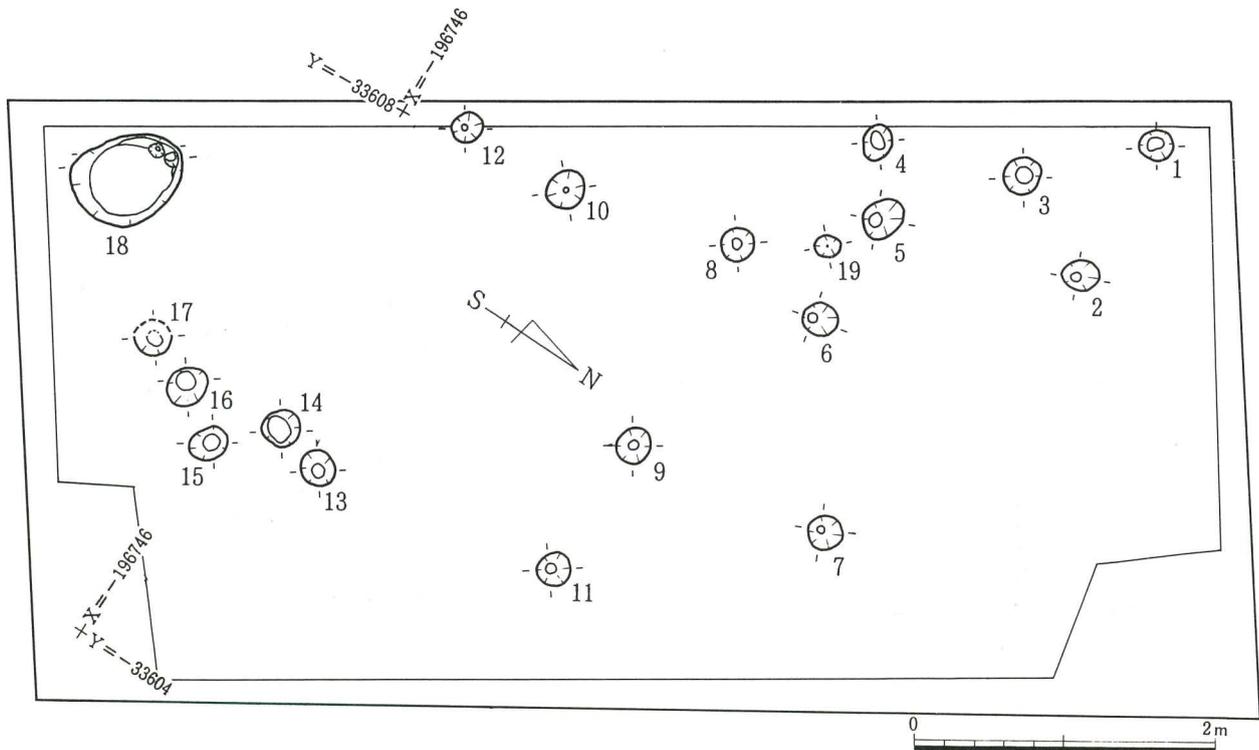
第5層直下から、直径90cm程のカーボンの集中する範囲が検出された。カーボンは厚さ1cm～2cm程あり、数点の土器片も混在していた。詳細は不明であるが、火を焚いた跡と推定される。これまでに同時期の畠から、下草を焼いたと考えられる焚火跡も検出されているが、本遺構も同様の痕跡の可能性はある。

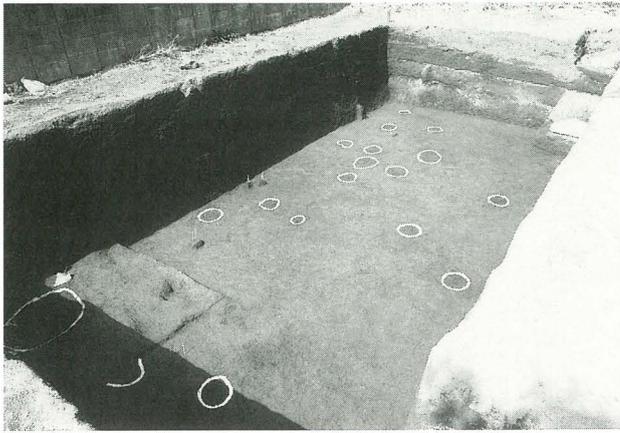


第33図 焼土跡検出状況図

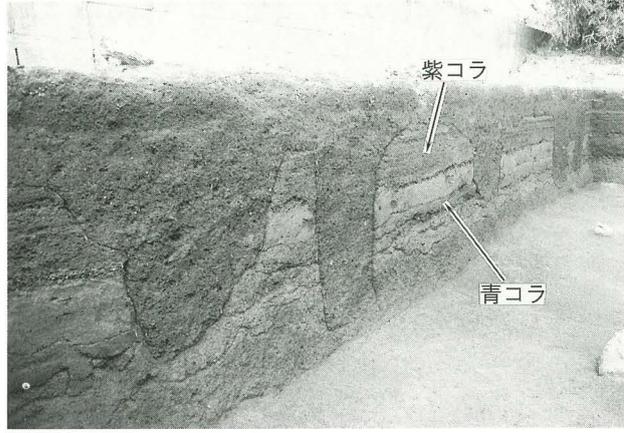
C. 柱穴群（古墳時代）

第10層上面で、第9層を埋土とする柱穴18基を確認した。柱穴については、明確にプランを形成するものが見られなかったが、古墳時代集落の存在を裏づけるものと考えられる。

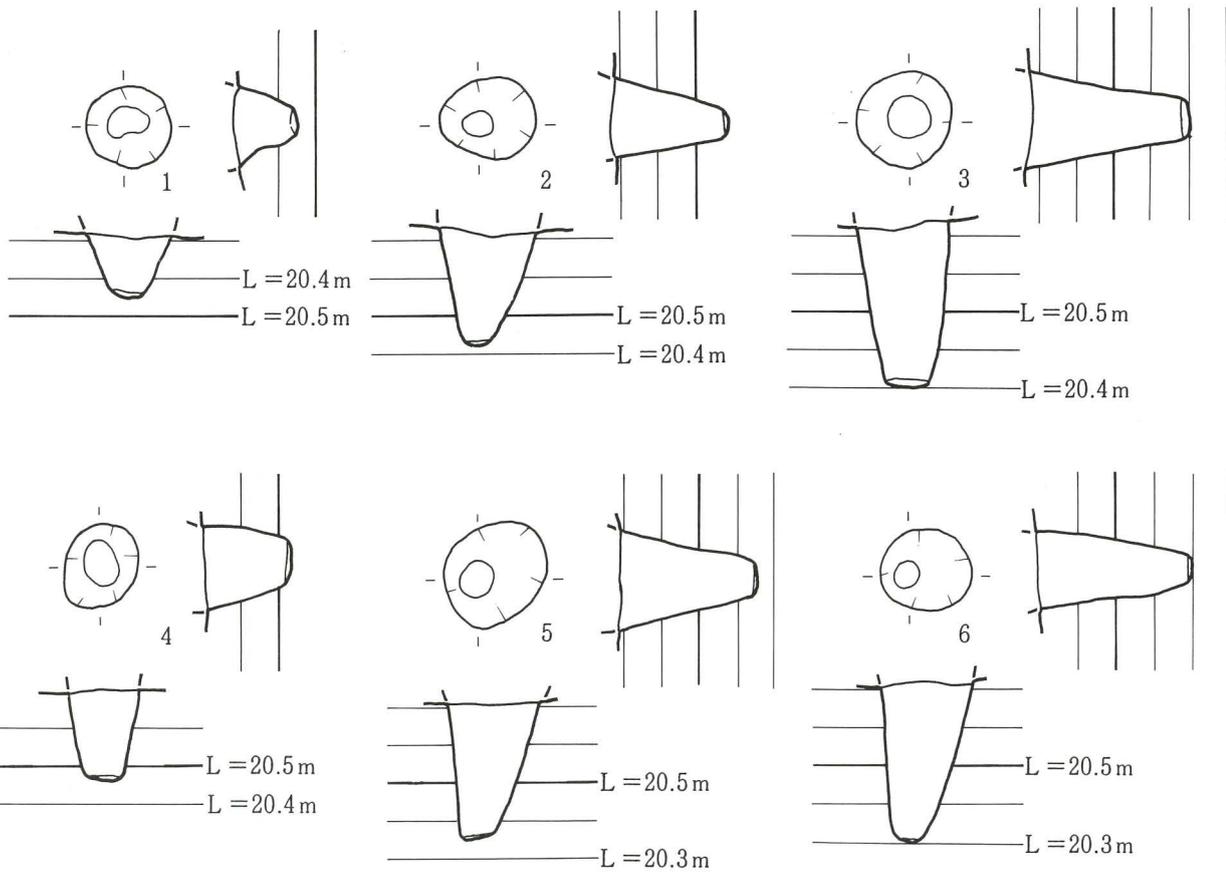




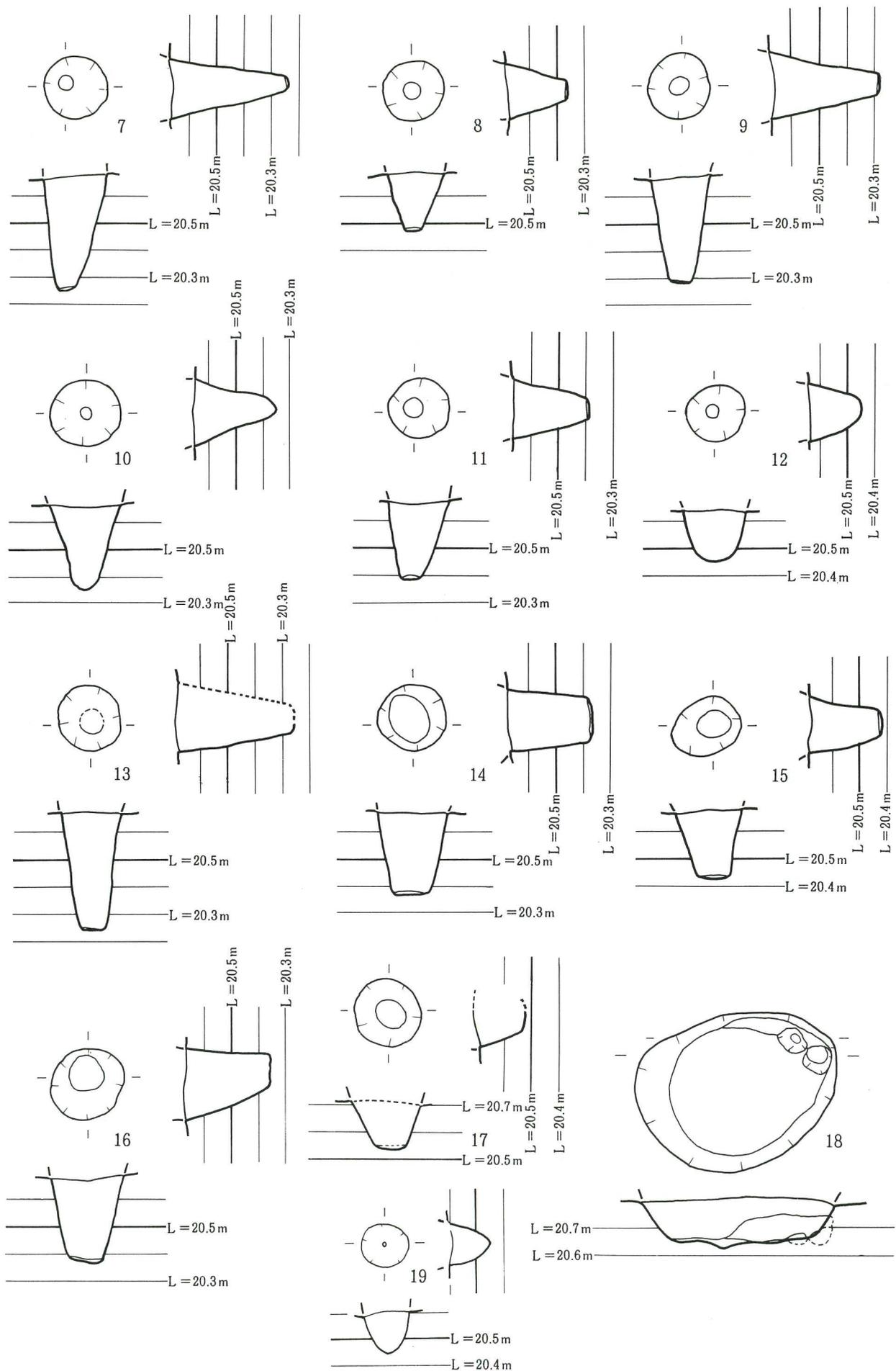
写真図版16 古墳時代柱穴検出状況



写真図版17 3トレンチ西壁断面状況



第35図 古墳時代柱穴平面図・断面図① (S = 1/20)



第36图 古墳時代柱穴平面図・断面図② (S = 1/20)

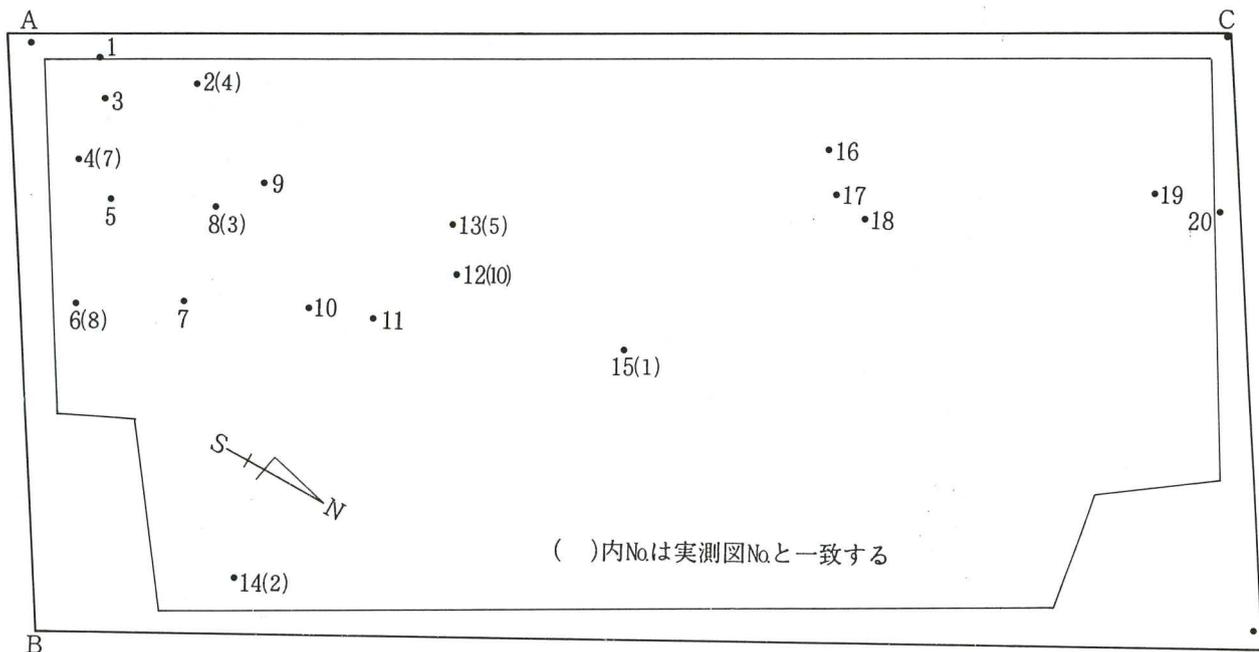
(4) 遺物

20点の遺物の出土があり、うち残存状況の比較的良好な12点を図化した。

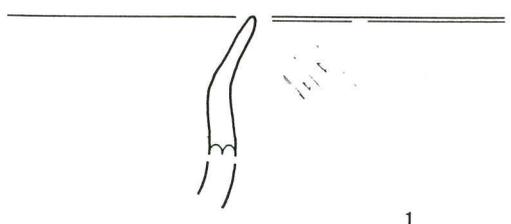
No. 1は甕または鉢形土器の口縁部である。ゆるやかに外反する。

No. 2は甕形土器の突帯部である。キザミが施される。

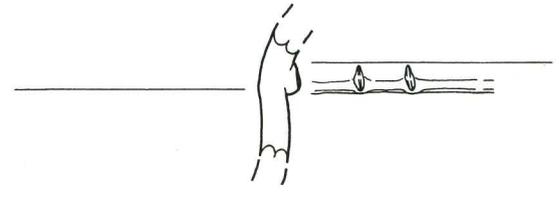
No. 3～6は弥生時代甕形土器の口縁部である。No. 3は弥生時代終末頃、No. 4, 5, 6は中期頃に相当するものと思われる。No. 3は外反し内面に稜をもつ。No. 4は口縁部断面が「T字」状となる。No. 5, 6は断面が三角形を呈し、No. 5には補修孔と思われる穿孔が施されている。No. 7は弥生時代甕形土器突帯部である。3条の突帯が施されている。No. 8は埴形土器のミニチュアである。No. 9もミニチュア土器である。甕形土器を模したものと思われる。No. 10は甕形土器の底部である。外面にユビオサエの跡が残る。No. 11, 12は第10層出土の弥生土器である。No. 11は突帯部、No. 12は底部である。弥生中期～後期の土器に見られるいわゆる「充実した脚台」と呼ばれるものである。



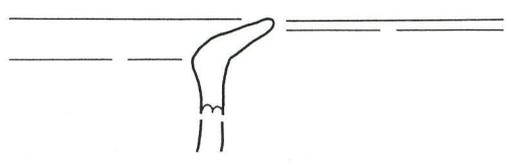
第37図 3 トレンチ遺物出土状況図 (S = 1/50)



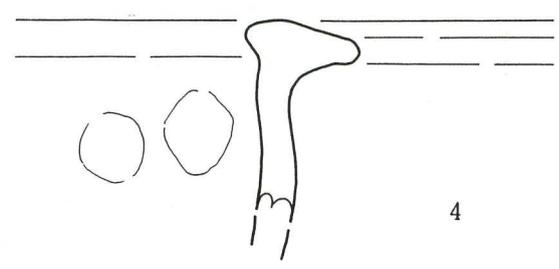
1



2



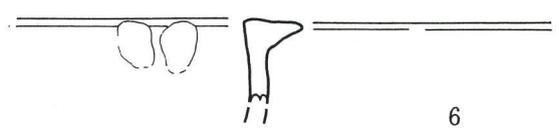
3



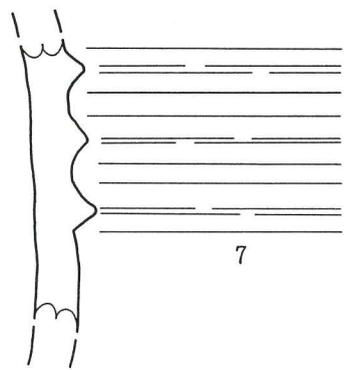
4



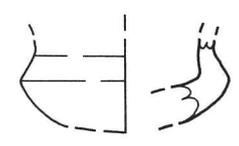
5



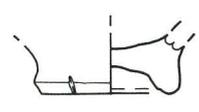
6



7



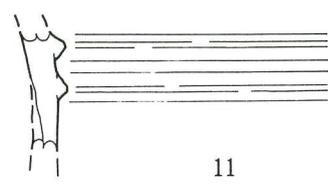
8



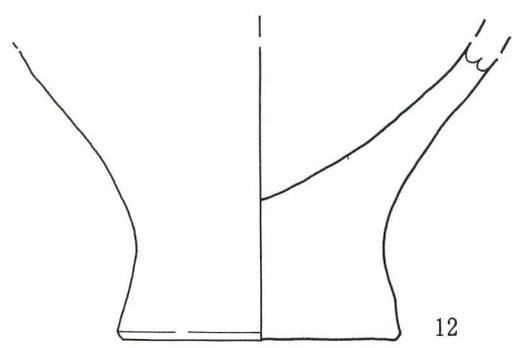
9



10



11



12



第38図 3 トレンチ遺物実測図 (S = 1/2)

観察表 3

図番	取上 No.	残存法量	器種	部位	色 ㉔	色 ㉕	色 ㉖	色 ㉗	胎土粒	混和材	調整	その他	接合
1	15 9層	破片	甕 or 鉢形 土器	口縁部	2.5Y4/1 7.5YR7/4	10YR8/6	5Y6/1		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕ ㉗	㉔工具によるナデのち ナデ ㉕工具によるナ デのちナデ ㉗工具 によるナデのちナデ	良好 傾きギモン	
2	14 9層	破片	甕形土器	突帯部	5YR4/2 2.5YR5/4	7.5YR6/6	7.5YR6/6		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕ ㉗	㉔工具によるナデのち ナデ ㉕ナデ ㉗ヨコナデのちキザミ	良好 傾きギモン	
3	8 9層	破片	甕形土器 (弥生時代)	突帯部	5Y7/6	7.5YR7/6 7.5Y5/1	7.5YR7/6 7.5Y5/1		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕	㉔工具によるナデのち ナデ ㉕工具によるナ デのちナデ ㉗ヨコナデ	良好 傾きギモン	
4	2 9層	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	10YR5/2	2.5Y8/6	10YR5/2		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕ ㉗	㉔ユビオサエのちナデ ㉕工具によるナデのち ナデ ㉗ヨコナデ	良好 傾きギモン	
5	13 9層	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	5YR6/4 7.5YR6/6	5YR6/4	5YR6/6		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕	㉔ナデ ㉕ハケメのちナデ ㉗ヨコナデ	傾きギモン ハケメ5~6本/cm 良好	
6	22 9層	破片	甕形土器 (弥生時代)	口縁部	7.5YR4/2	2.5YR5/4	10YR6/4		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕ ㉗	㉔ユビオサエのちナデ ㉕ハケメのちナデ ㉗ヨコナデ	良好	
7	4 9層	破片	甕形土器 (弥生時代)	突帯部	10YR8/3	10YR5/1	2.5Y7/4		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕ ㉗	㉔工具によるナデのち ナデ ㉕工具によるナデのち ナデ ㉗ヨコナデ	良好 傾きギモン	
8	6 9層	破片1/5 反転復元	埴形土器 (ミニチュア)	胴部	2.5YR7/4	2.5Y7/6	5Y6/1 2.5YR7/4		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕ ㉗	㉔ナデ ㉕ナデ	良好	
9	21 9層	破片1/1	甕形土器 (ミニチュア)	底部	7.5YR4/2	7.5YR4/2	2.5Y7/6	㉔㉕ 5YR5/2 7.5YR5/1	細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕	㉔ナデ ㉕ナデ ㉗ナデ ㉘ヨコナデ	良好 底部に刻み有	
10	12 9層	破片1/5	甕形土器 (ミニチュア)	底部	5YR6/6	5YR6/6	5YR6/6	㉔ 5YR6/6	細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕	㉔ユビオサエ ㉕ナデ ㉗ヨコナデ	良好	
11	25 10層	破片	甕形土器 (弥生時代)	突帯部	10YR4/2 7.5YR5/4	5YR5/4	10YR6/3		細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕ ㉗	㉔ナデ、ハクラク ㉕ナデ ㉗ヨコナデ	良好 傾きギモン	
12	26 10層	破片1/2 反転復元	甕形土器 (弥生時代)	底部	5YR5/2 N7/10	5Y3/1 7.5YR6/4	5YR3/2 7.5YR6/4	㉔ N5/0	細砂粒を 含む 微砂粒を 含む	㉔㉕ ㉗	㉔ナデ ㉕工具によ るナデのちナデ ㉗ヨ コナデ ㉘ハケメの ちナデ 一部ユビオサ エ ㉙ヨコナデ	良好	

第Ⅳ章 考察 ～まとめにかえて～

今回の調査で得られた成果を振り返るとともに、新たに提出された課題も併記し、まとめにかえたい。

A トレンチ

現地表下約2.5mで、紫コラ火山灰、その直下の第6層を確認した。調査面積もせまく遺構・遺物の検出はなかったが、博物館建設事前調査で確認した畠跡のあった第6層と土質、色調ともに極似していることから、同様の畠が広がっている可能性を示唆しているものと思われる。今後さらに北側への遺跡の広がりを調査する必要があるだろう。

1 トレンチ

中世の階段状遺構と柱穴、弥生時代終末～古墳時代にかけての祭祀遺構を検出した。特に祭祀遺構は、「成川式土器」の時期のものとしては、南薩地方で初例である。これまで、始良町萩原遺跡や鹿児島市桑ノ丸遺跡で確認されているのみで、極めて貴重な事例と言える。萩原遺跡では、住居址内にピットを設け、その中に上から礎、高坏の脚部、甕の底部、さらに甕の底部と合計4個の土器を層状にセットした「四段重ね」状態の土器埋納遺構が検出されている。また最上位の土器が礎にかわり埴形土器のものも見つかっている。時期的には5～6世紀頃と位置づけられており、本遺構の時期より若干新しい可能性がある。桑ノ丸遺跡では、舌状台地の端部から、ヘラ状工具による6条の沈線が施された壺形土器が径40cm、深さ25cmの円形の土壇に埋納された形で見つかっている。周辺からも壺、甕、丹塗土器などが集中して発見され、共伴する甕形土器の形態から中津野式土器の時期に比定されている。類例に乏しいため、これら3例の祭祀遺構がどのような関連をもつのか判然としないが、桑ノ丸遺跡、本地点は、ともに付近に河川が流れる台地の先端部に設けられている遺構であることから、水に関係する祭祀の場とも想像される。橋牟礼川遺跡からは、初期須恵器や子持勾玉、石製品等、5世紀後半頃から祭祀遺物の種類や出土量が増える感がある。こうした遺物はいずれも他地域から指宿地方に入ってきたものであり、それら祭祀遺物の存在は、全国的な様相とも連動していると思われるが、今回検出された遺構は、使用されている遺物の組み合わせから見ても在地の伝統的な祭祀の形態を示す事例ととらえられるのではなかろうか。時期は異なるが、大根占町山ノ口遺跡で見つかっている弥生中期の祭祀遺構も、軽石や土器を環状に配置した形態をとる。そうした類似点にも在地色を見出すことができるのではなかろうか。類例の増加を期待しつつ、本遺構の位置付けをより明確に行う必要があると思われるが、詳細な検討は別稿に譲りたい。

2 トレンチ

奈良～平安時代の杭列跡が検出され、その役割について手がかりが得られるのではと期待されたが、調査範囲が狭く、検出面積も少なかったことから全容を解明するには至らなかった。太さ5cm前後の丸太材で、先端を鋭くとがらせた杭を5～10cm間隔に密に打ち込む形態をとる。ちなみに、第6層上面から約25cm程、第7層を貫通しない形で、4.5cm角の杉の角材を打ち込み、その強度を体感してみたが、人ひとりよりかかっても若干しなる程度であった。検出された杭列跡も何らかの上部構造があったとも想像されるが、密に打ち込んだ杭同志を横に連結しておけば、かなりの強度をもった施設となる。

いずれにしてもその性格の把握には、付帯遺構の探査も含め、杭列の続く状況をできるだけ広範囲において確認することが先決であろう。

3 トレンチ

古墳時代の柱穴群が検出され、付近に集落があることが確認された。2トレンチでは祭祀遺構が、3トレンチでもまとまった遺物の出土が見られたが、向吉遺跡地点一帯の古墳時代集落の様相はよくわかっていない。現在、住宅が建ち並び調査可能なエリアも少なくなってきたが、国指定史跡と同質の遺跡が広がる一帯として、その遺構の密集度をできるだけつかめるよう留意すべき地域であると言える。

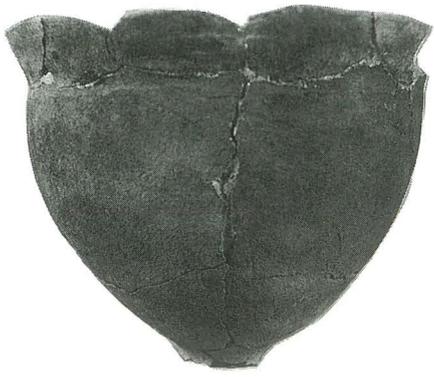
(文責 渡部)

SUMMARY

Hashimuregawa-archeological site is located on the southern most tip of Kyushu in Ibusuki City. The primary purpose of excavating this site was to be able to distinguish its boundaries. We were also interested in attaining some new knowledge about the ancient lifestyles of the people from this period. In order to do so we set up four trenches around the Hashimuregawa archeological site.

The results of this excavation led to the discovery of a “ritual ground” that had been used during the end of the Yayoi period through the Kofun period. This “ritual ground” was discovered in the first trench. This ritual ground consisted of five rocks the size of a human’s head and of pottery. These were found in the formation of a quarter circle($1/4$) on the ground. The pottery found were all Narikawa style containing traditional characteristics of the pottery from the Yayoi period found in southern Kyushu. Few “Ritual grounds” have been discovered from Yayoi period and the Kofun period in Southern Kyushu. Therefore, we don’t have facts or details of the “ritual grounds” found in southern Kyushu. The new finding will assist in the understanding and study of ritual grounds from this period.

(written by Tetsuya WATANABE proof-reading, Tammy L. SCHMIDT)



1T-1



1T-2



1T-2(裏面)



1T-3



1T-4



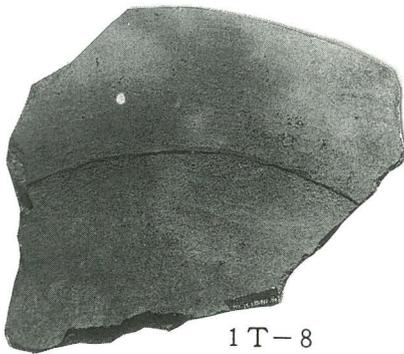
1T-5



1T-6



1T-7



1T-8

写真図版18 遺物写真



1 T-9



1 T-11



1 T-14



1 T-15



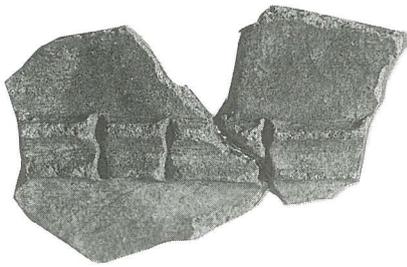
1 T-17



1 T-18



1 T-19



1 T-20



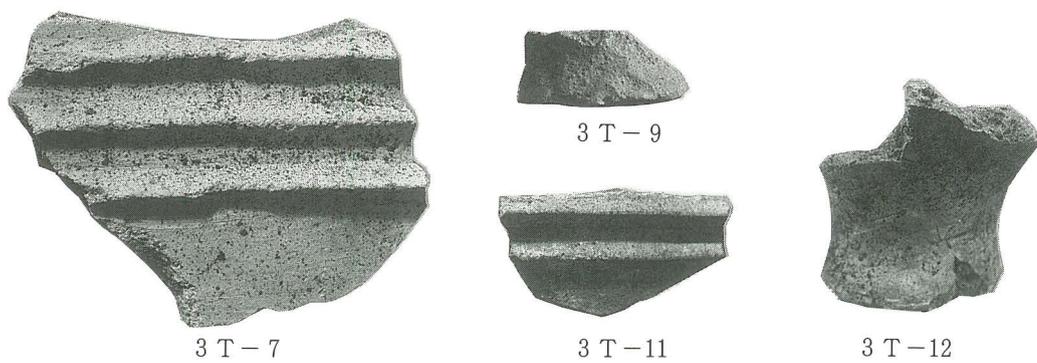
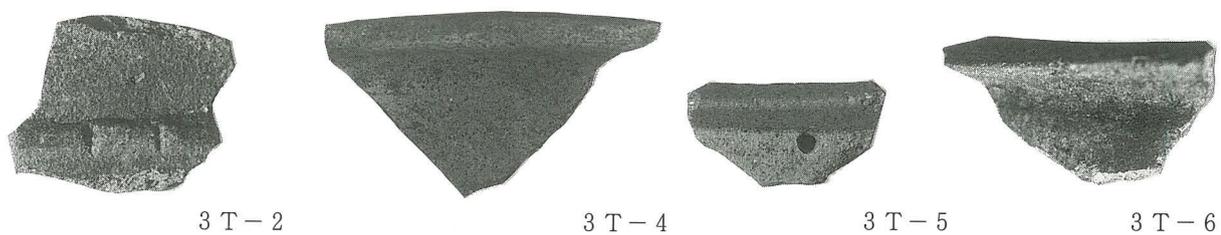
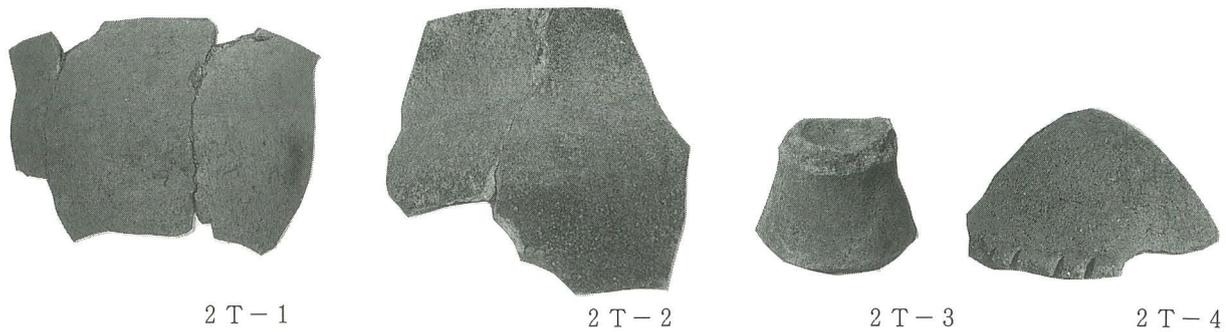
1 T-21



1 T-24



1 T-25





1 T 8層出土遺物

敷 領 遺 跡 編

第 I 章 遺跡の立地と環境

敷領遺跡は指宿市十町小字敷領周辺に位置しており、遺跡の範囲としては小字敷領・敷領前・敷領下原・赤塚・中原等が含まれる。⁽¹⁾

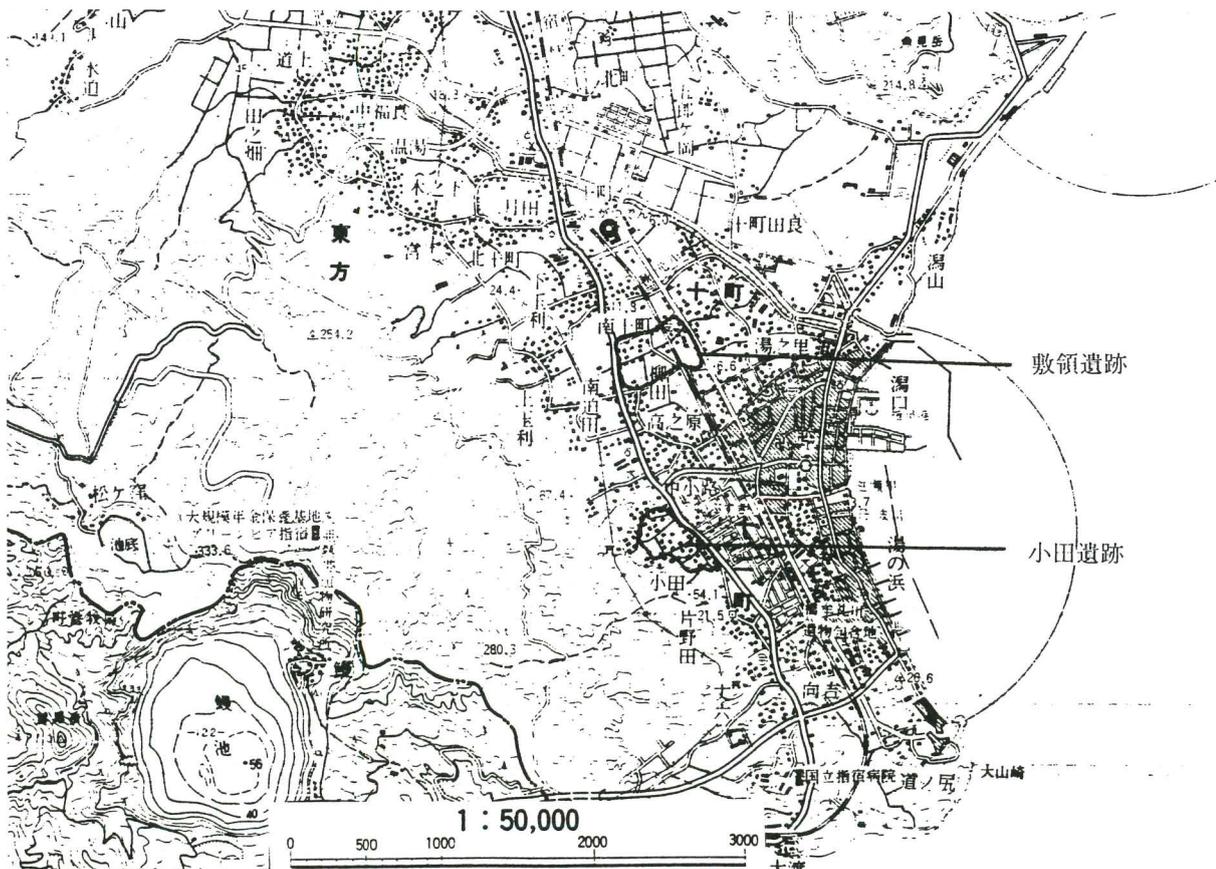
敷領遺跡が所在する地形は火山性の沖積平野上にある。西側には池田湖、それと同じカルデラ・マールである松ヶ窪や池底の外輪山がそびえ立っており、その山裾に位置する火砕流台地が北側の小牧・新西方から南側に延びている。池田湖等の外輪山（新期成層火山）と火砕流台地が海岸に土砂等を供給し、敷領遺跡が位置する沖積平野を形成している。⁽²⁾

沖積平野は、指宿市内南東部のごく限られた場所のみで確認出来る。沖積平野は発達が悪く、指宿市街地北部の濁口から国指定史跡橋牟礼川遺跡のある摺ヶ浜にかけて存在する。平野部にはいくつかの川が東流しているが、特に敷領遺跡が位置する平野中央部には二反田川が流れている。平野の標高は5 m前後で表層部は小字名が示すように湿地帯となっている。また、直下には砂礫層が発達していることなどから、約6,000年前に起こった縄文海進の際に海が広がったことが分かる。⁽³⁾

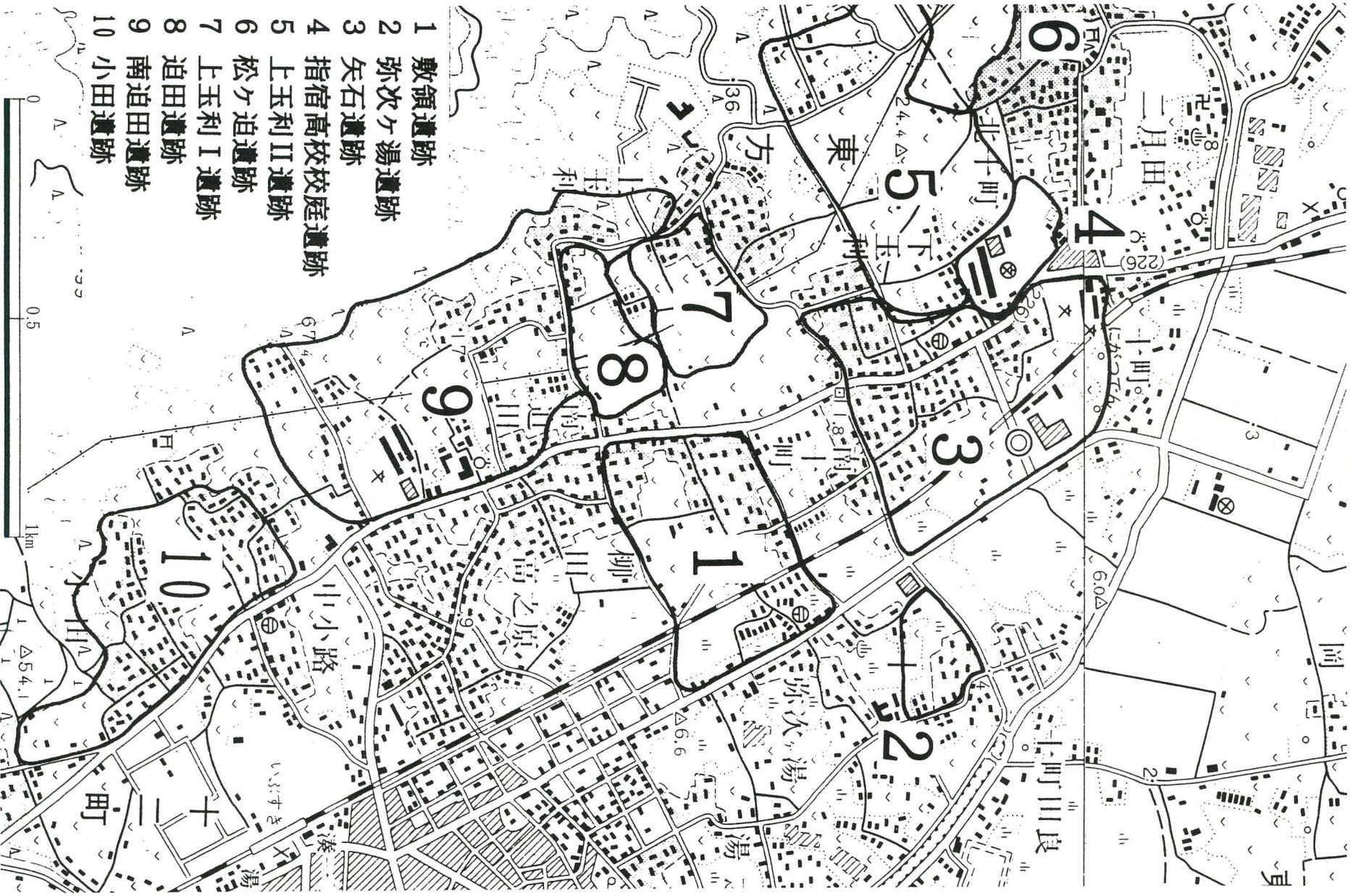
敷領遺跡の位置する火山性の沖積平野は、北側に二反田川の支流と、外輪山山裾から流れ南迫田地区を横切り東流する柳田川に囲まれている。現在においては住宅化が進んでいるが戦後までは水田が広がり雨期には水田が埋水するほど水はけが悪いところであった。かつての水田風景は姿を消して水田から畑地に転用しているが、湿地帯のなごりを残すかのように柳の木が点在している。

敷領遺跡の範囲は国道226号を西端とし、東端は指宿市役所前を南北に走る県道までが遺跡の周知の範囲として認識されている。

敷領遺跡の現在の範囲は指宿市誌で公開された敷領遺跡と中敷領遺跡、下敷領遺跡の3遺跡が含まれており、3遺跡の出土遺物や地形状況から敷領遺跡と1遺跡名でまとめている。



第 1 図 敷領遺跡位置図 (S = 1 / 50,000)



第2図 敷領遺跡周辺図(S=1/125,000)

敷領遺跡の発見は比較的早く、大正13年に弥生土器や成川式土器、打製石斧等が表面採集されている。また、明治34年には高さ30cmほどの完成品を含めた甕形土器等が採集され、東清次氏も遺跡地内から土器等を採集している。かつて、それらの採集資料は鹿児島県立指宿高等学校内の郷土資料館に保管してあると市誌には記載してある。⁽⁴⁾

敷領遺跡の周辺には下記の遺跡が広がっている。(第2図)

東側には成川式土器等が採集されている弥次ヶ湯遺跡がある。

西側には、南迫田遺跡(5)や迫田遺跡、上玉利Ⅰ遺跡があり、中世から古墳時代の土器が採集されている。特に南迫田遺跡においては、平成5年度にふるさと農道整備事業に伴う埋蔵文化財の確認調査が行われ、その成果により、平成7年度に一部本調査が実施され中世・平安時代・古墳時代・弥生時代(山之口式土器)・縄文時代後期(指宿式)の遺物や遺構が多く出土・検出されている。

北側には、指宿高校校庭遺跡、矢石遺跡、上玉利Ⅱ遺跡、松ヶ迫遺跡が確認されている。

東・西・北側の遺跡群はその採集品・発掘調査の内容から敷領遺跡の内容と類似している部分もあり、同時代・同時期における空間的地形利用においては、有機的な結びつきがあったろうと推測出来る。

注 (1) 指宿市誌編さん室 指宿地区字図(別図)『指宿市誌』 1985

(2) 指宿市誌編さん室 「第1編第2章 指宿地方の自然環境」『指宿市誌』 1985

(3) (2)に同じ

(4) 指宿市誌編さん室 「第2編第1章 先史時代」『指宿市誌』 1985

(5) 指宿市教育委員会 『南迫田遺跡』 1994



写真図版1 敷領遺跡周辺写真

第Ⅱ章 調査に至る経緯

敷領遺跡の所在する指宿市十町内においては、第2図にあるとおり数多くの遺跡が確認されている。遺跡が確認される背景には、畑地等で耕作している際に地下の遺物包含層中の土器等を耕作面上に掘り上げる例や、民間もしくは公的施設の土地開発に先立つ調査等による例や、その工事中に確認される例等があり様々である。

今回埋蔵文化財の確認調査を実施した敷領遺跡は、大正13年以降昭和の始め頃の間、畑地から土器等の採集が行われたり、住宅建築によって遺跡があることが確認されている。採集された土器や石器等から、遺跡の時代や性格等も弥生時代から古墳時代・中世の集落遺跡であると判ってきていた。

近年、敷領遺跡内において採集された土器があると指宿市教育委員会が連絡を受け、文化財パトロールにより表面採集を実施したところ、成川式土器を含む土器や土師器等を採集することが出来た。

また、将来的に敷領遺跡内もしくはその周辺において開発が行われることも予想されることから、埋蔵文化財確認調査を実施する次第となった。

第Ⅲ章 確認調査

第Ⅱ章で記した経緯をふまえて、開発が行われるであろう地点にトレンチを設定した。(第3図)

敷領遺跡地内のJR指宿・枕崎線より東側で、かつ、県道より西側の範囲を、地形と現状を十分に踏まえた上で2つの地点に分けて、その地点内に状況に応じてトレンチを設定した。

第1地点：今回確認調査を行ったなかで北側に位置する。この地点では1トレンチ・2トレンチ・6トレンチをそれぞれ設定し、確認調査を実施した。

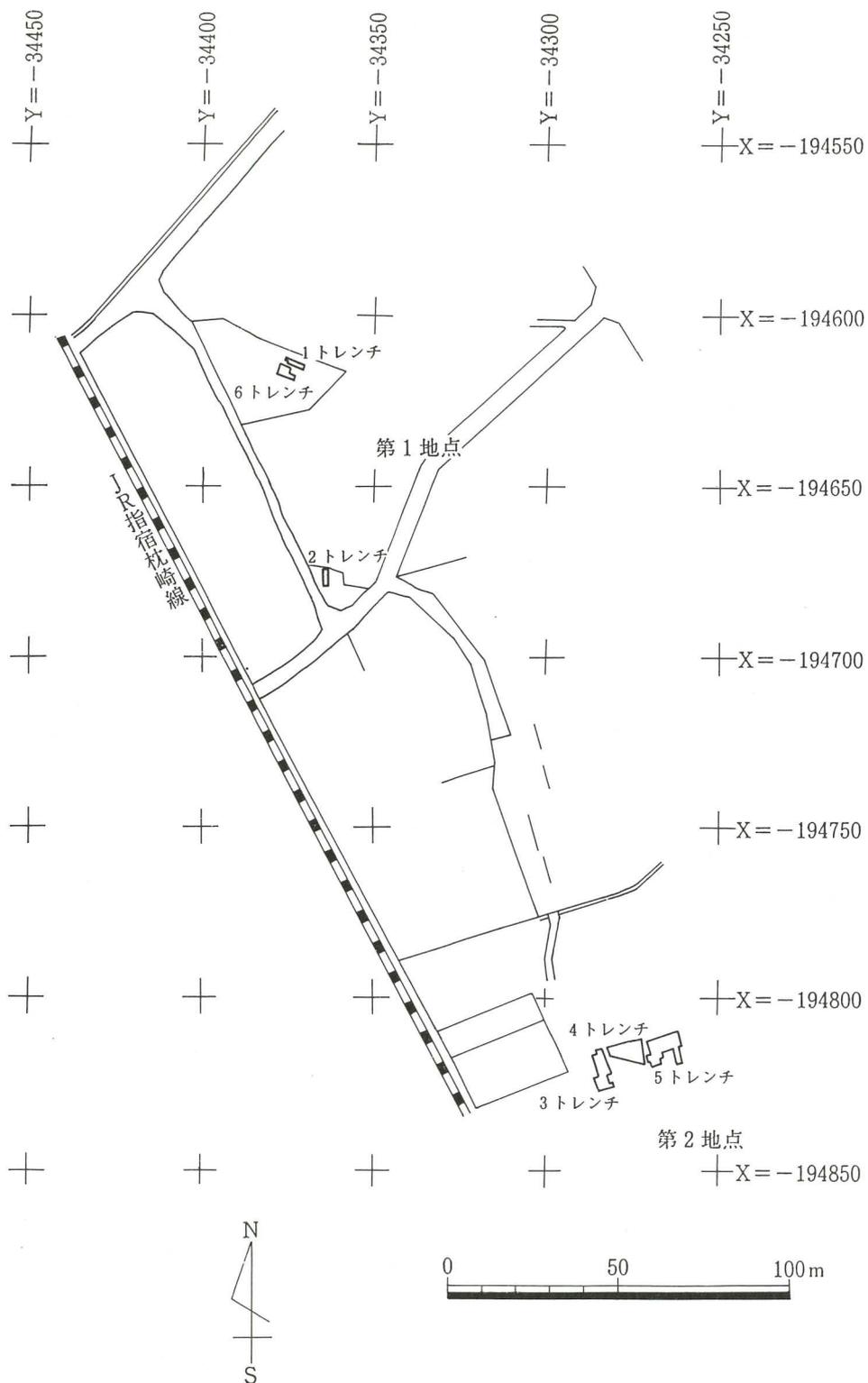
第3図のとおり1トレンチと6トレンチは隣接するように設定している。2トレンチは、1・6トレンチより南側に100mほど南側に位置している。

第2地点：確認調査を行った範囲において南側に位置しており、3トレンチ・4トレンチ・5トレンチを設定し、調査を実施した。

当初3トレンチのみであったが、検出された遺構の内容から東側に4トレンチ・5トレンチを新たに設定し、その遺構内容の確認に努めた。

第1地点、第2地点にそれぞれ設定したトレンチにおいては、確認調査期間の短縮と発掘調査作業員の作業軽減化のために、表土層や非常に固結し無遺物層である火山灰層の除去はユンボ等の重機を用いた。

以下、地点・トレンチ毎に確認調査の内容を述べていく。



第3図 確認調査地点位置図 (S = 1/2,000)

第Ⅳ章 第1地点の調査

第1節 1トレンチの調査

(1) 概要

第1地点と設定した敷領遺跡の北側は、指宿市営住宅が並んでおり重機等を用いた確認調査を実施する空間は限られており、唯一面積的に広い空地の場所に1トレンチと6トレンチを設定した。(第4図)

主に、1トレンチは地層の堆積状況と遺物包含層の確認に努めるため1m×5mの南北に細長いトレンチとした。

(2) 層序(第5図)

1m×5mのトレンチにおいて、深さ1m50cmほどまで掘り下げを行った。地層の堆積は以下のとおりである。

第1層：表土層である。かつて土地が宅地として利用されていたためか、瓦や水道管等が埋めてあった。
7.5YR4/2

第2層：南迫田遺跡や橋牟礼川遺跡等で確認されている、いわゆる中世遺物を包含している黒色帯層に比定出来るものと考えられる。無遺物層である。7.5YR2/1・1/1

第3層：小礫を含み、やや軟質である無遺物層である。10YR4/3・4/2

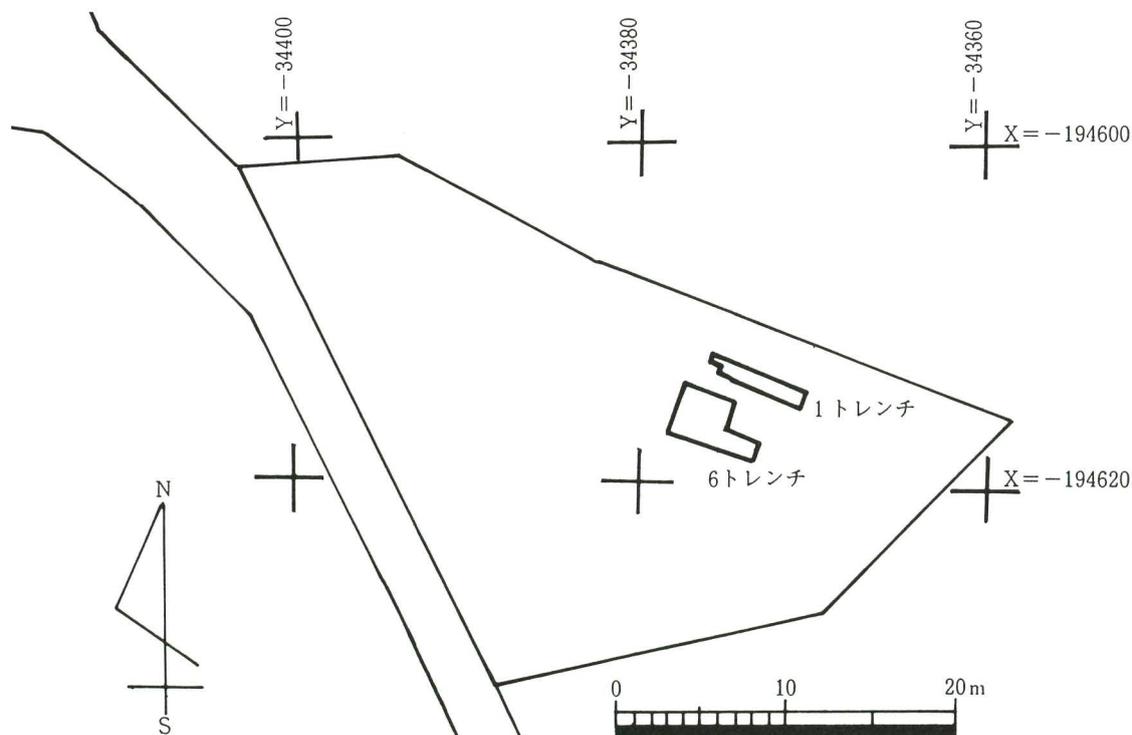
第4層：堆積層として平面的に広く確認出来ていないが、第3層下部で第7層に凹状で確認している。

第5層：いわゆる「紫コラ」であり、西暦874年3月25日に開聞岳より噴出した火山灰である。1トレンチにおいては1次堆積は流出しており2次堆積が水を媒介として堆積しているようである。a層が紫コラ2次堆積層。5PB2/1、b層は1次堆積の際に堆積した火山礫である。

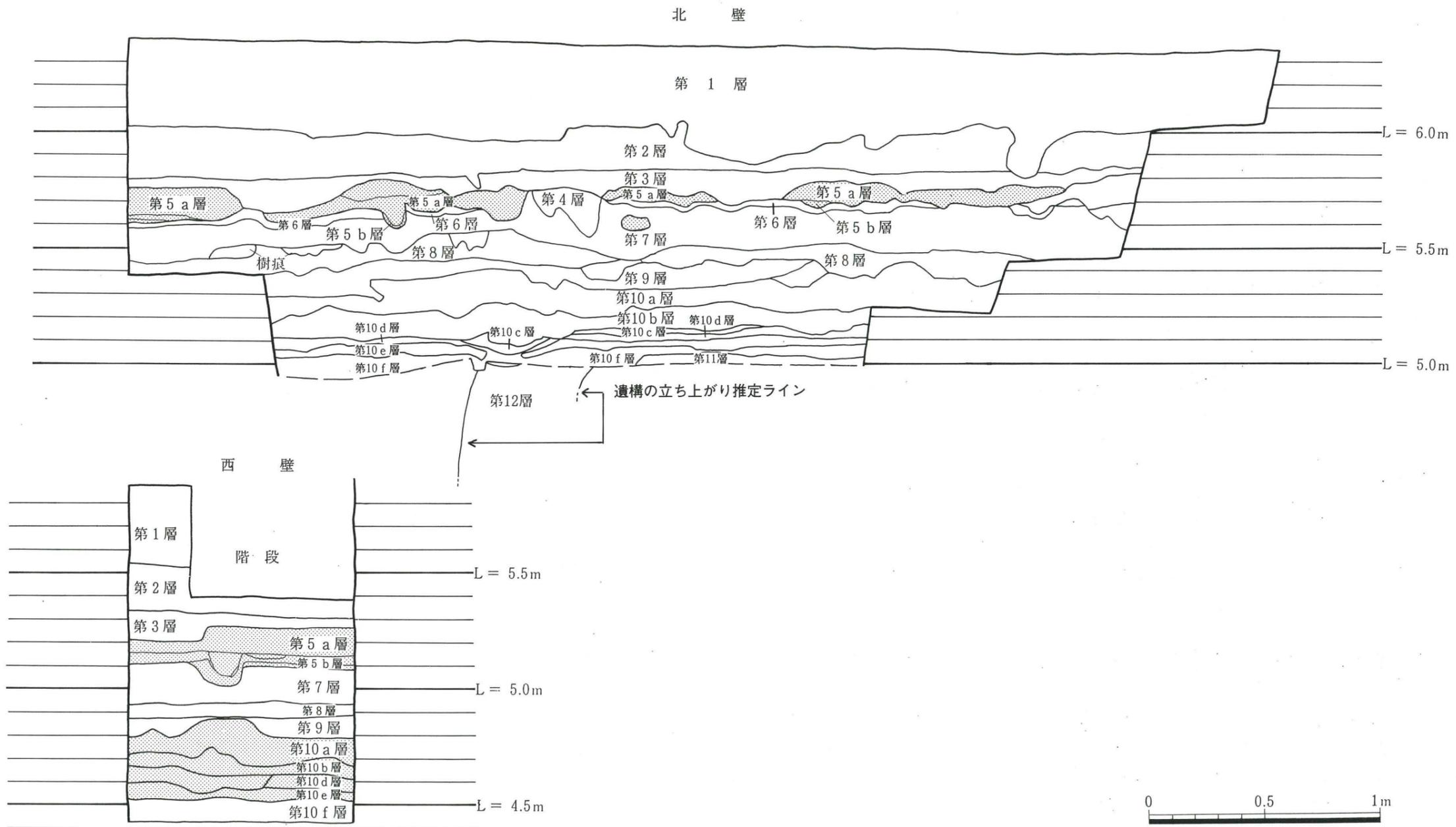
第6層：非常に粘質が強く、第5層直下で確認できる。第6層上面は凹があり、その部分には第5層bの火山礫が充塊している。10YR8/8。

第7層：粘質土壌でやや引き締まっている。6層の土壌が樹痕状に無数に入り込んでいる。水田もしくは湿地帯特有のグライド土壌の可能性はある。10YR8/1

第8層：第7層より若干黒味を帯びている。非常に粘質があり引き締まっている。10YR7/2



第4図 1・6トレンチ位置図(S=1/400)



第 5 図 1 トレンチ北壁・西壁土層断面実測図(S=1/20)

第9層：第8層よりさらに黒味を帯びた粘質土壌である。10YR5/1

第10層：「青コラ」の2次堆積層に比定出来るものである。間層や色調等からaからf層の5層に細分出来た。ラミナが発達している。

第10 a層：細粒砂層である。やや引き締まっておりラミナが確認できる。10BG1.7/1

第10 b層：上層の第10 a層より色調的にうすい。10BG4/1

第10 c層：やや引き締まったシルト質の土壌である。10BG3/1

第10 d層：シルト質である。10BG1.7/1

第10 e層：非常に細粒な砂層である。

第10 f層：シルト質であり、第10 d層と同質同色である。10BG1.7/1

第11層：粒子が荒く、礫まじりの砂質層である。10YR7/6・10R3/6

第12層：砂利層である。最下層になるが、この層中より水が湧いてきたため、これより下層の掘り下げは行えなかった。第12層中に「暗紫コラ」と考えられるブロックが確認出来た。

(3) 遺構 (第6図)

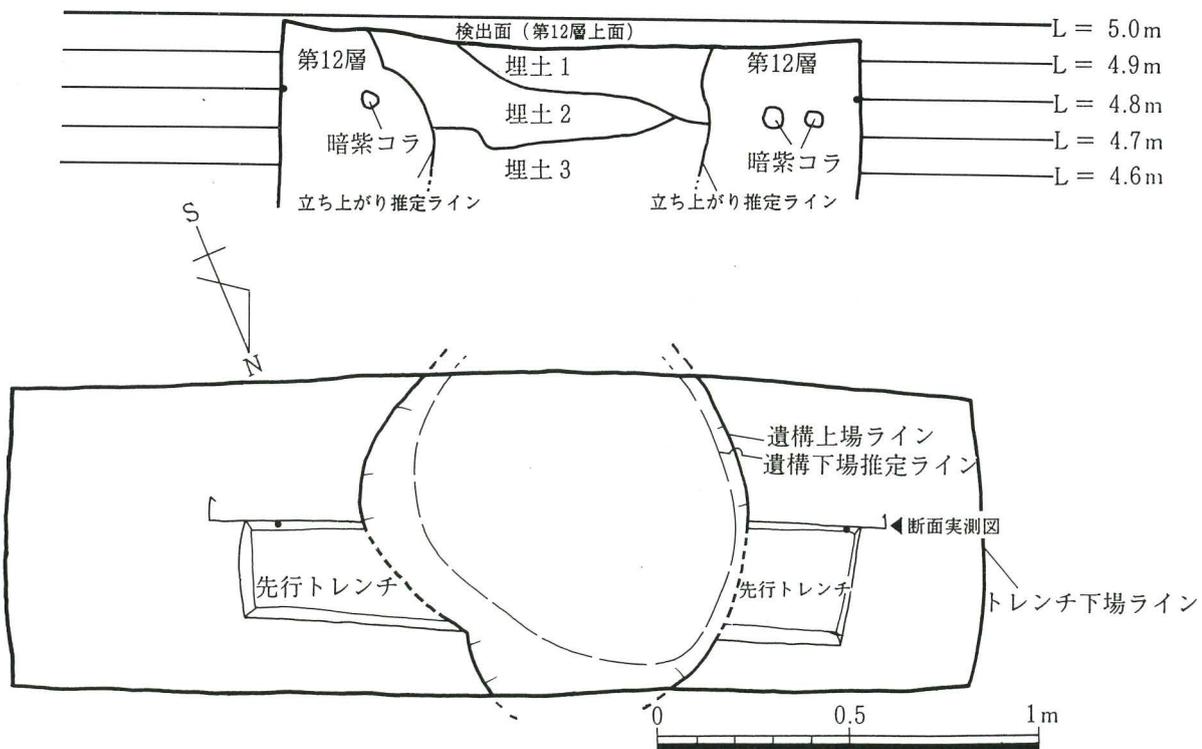
トレンチ中央部において第11層を除去後、第12層上面で平面的にとらえた段階で、楕円形を呈した掘り込み状の遺構を検出した。この遺構は、第10層の青コラ2次が供給され堆積する時には完全に埋土が入り込んでいたと考えられる。その堆積後、遺構に入り込んだ埋土が引き締まったためか、第10層c・f層が凹状に落ち込んでいる。(第5図北壁土層断面実測図参照)

埋土は色調より埋土1から埋土3に分層出来たが、層質は全体的に砂利質である。

遺構の平面形態は不整形な楕円形を呈し、掘り方も統一性が見い出せない。埋土1より土器片が出土したが、非常にもろく、破損が著しく実測も不可能であった。

埋土3を除去中に層下位より水が湧き出し、それから下は掘り下げが出来ず、明確な遺構の下場は検出出来なかった。

遺構の性格等は不明だが、今後1トレンチ周辺の調査により平面的な位置づけを確認し、検討していきたい。



第6図 1トレンチ第11層上面検出遺構実測図 (S=1/20)

第2節 6トレンチの調査

(1) 概要

6トレンチは、1トレンチの西側で2m×2mの大きさで設定している。(第4図)

1トレンチの確認調査では、第5層の「紫コラ」層(1次・2次堆積層)の除去まで、重機を用いて掘り下げを行い、第5層除去後、1トレンチ中央部で数ヶ所のピット状のものを確認した。(第5図の第5層直下を参照)

6トレンチにおいては、1トレンチで十分に確認出来なかったピットを平面的に広い範囲で検出し、その性格を確認することに努めることを目的に、1トレンチ隣接地に設定した。

(2) 層序(第7図)

6トレンチの層序は1トレンチのものに従う。

第1層：表土層である。7.5YR4/2

第2層：いわゆる中世黒色帯であり、このトレンチにおいては無遺物である。7.5YR2/1。

第3層：小礫を含み、やや軟質である。無遺物層である。10YR4/3・4/2

第4層：6トレンチにおいては検出出来なかった。

第5層：いわゆる「紫コラ」層である。

第5a層：「紫コラ」の2次堆積層であり、その下部にあるべき1次堆積の火山灰層は流出しており確認出来なかった。この層は、水を媒介として堆積しているため、下層の第6層(黄褐色粘質土壌〔10YR8/8〕)がブロックの状態で無数に入り込んでいる。このことから、おそらく、遺跡の西側の土壌を攪乱させながら紫コラの2次堆積が6トレンチが設定している地点に堆積したものと考えられる。

第5b層：火山礫である。今回検出したピットにおいては総てこの第5a層が埋土として入り込んでいた。

第6層：非常に粘質が強く、遺構の検出面である。10YR8/8

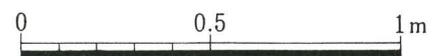
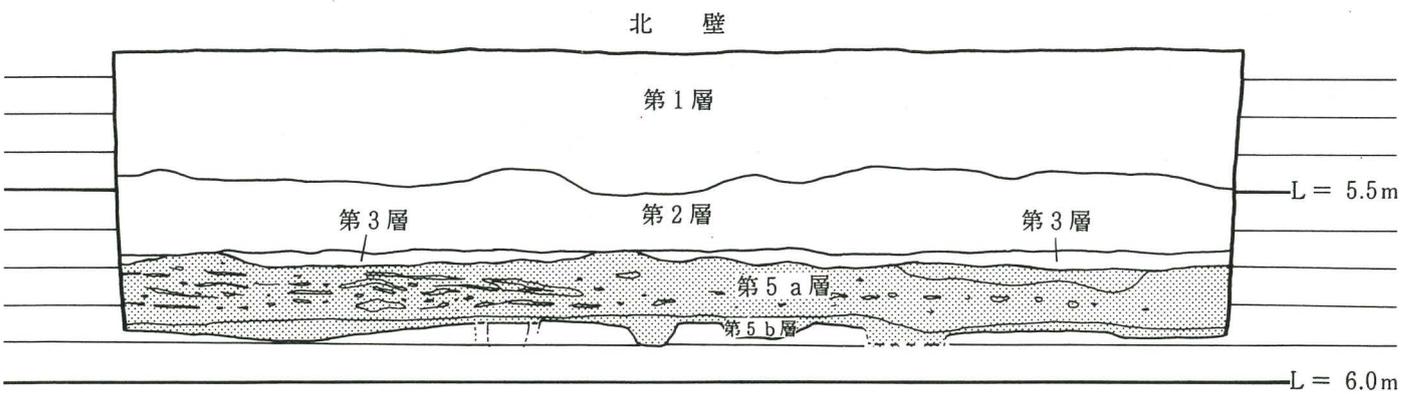
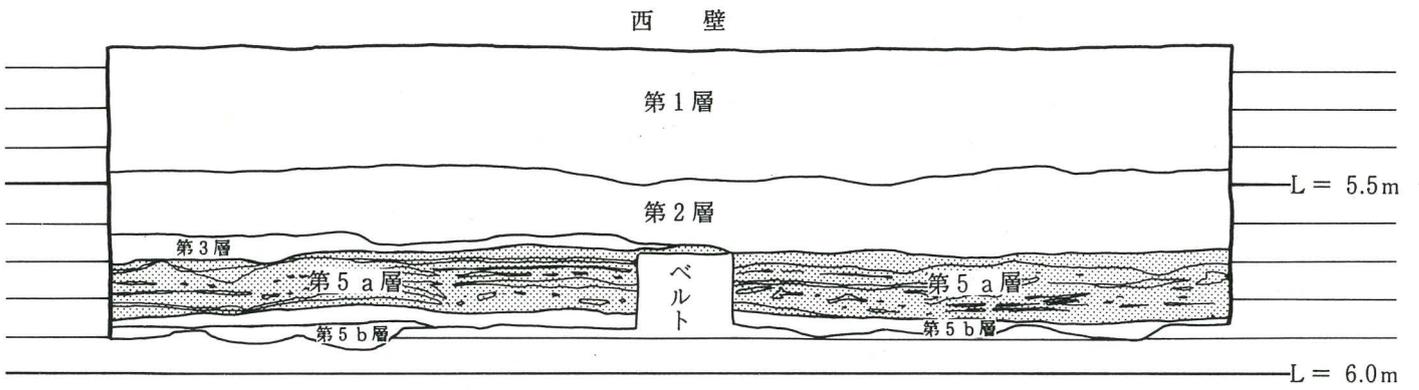
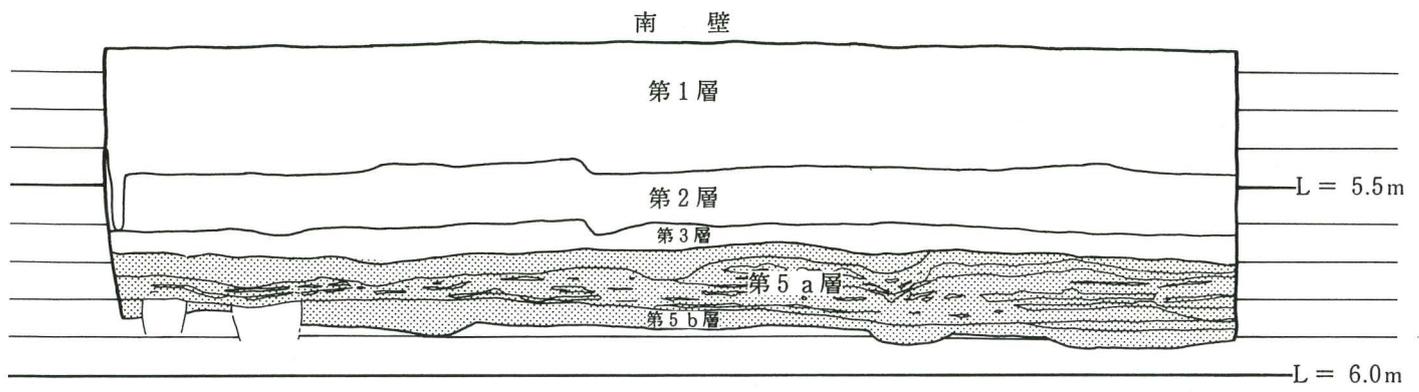
第7層：第6層より黒味を帯びており、環元土壌と考えられる。

(3) 遺構(第8・9・10図)

6トレンチにおいて、紫コラ2次堆積層の第5a層を除去し、第5b層の火山礫を面的に検出した。さらに、第5b層を除去しながら第6層を検出していく過程で、円形もしくは楕円形状のピットを検出することが出来た。(第8・9図)

1トレンチでは、西壁・北壁で検出したピットを十分に検討出来ずに下の方へ掘り下げを行ったこともあり、6トレンチでは、そのピットを平面的に広く検出し、その性格やプラン等を検出することに努めた。その目的を達成するために、第5層を検出した段階(第6層上面を面的に検出し、ピットのみ埋土が入っている状況)で、コンタ図の作成を行った。(第8図を参照)コンタ図より第6層上面の傾斜は南から北方向にゆるやかな傾斜面であることが判った。コンタ図作成時には、あきらかにピットではない自然の地形や不整形のものについては火山礫を取り除いている。ピット以外の凹地が面的に広く確認出来ている、北壁から南壁にかけての面では、幅10ほどの溝状のものが4列確認出来、そのうちの3本は南側方に平行に伸びている。(第9図を参照)このような第6層上面におけるピット以外の凹地や溝状のものが検出出来ることから、西暦874年3月25日の開聞岳噴出直前、もしくはそれ以前には何らかの人為的な土地に対するはたらきかけがあったと推測出来る。

凹面や溝状の確認出来る第6層上面は、粘質が非常に富んでおり軟質である。しかし、第5b層の火山礫との接面には、鉄板のように固く引き締まっており、火山礫で埋没された西暦874年の生活面の検出は比較的安易であった。そのため、上記した凹面や溝状の面的なインボリューションは、作業員による掘り違いなどは全く考えられず、本来の地形におおよそ近いそのままの状況を検出したものといえよう。

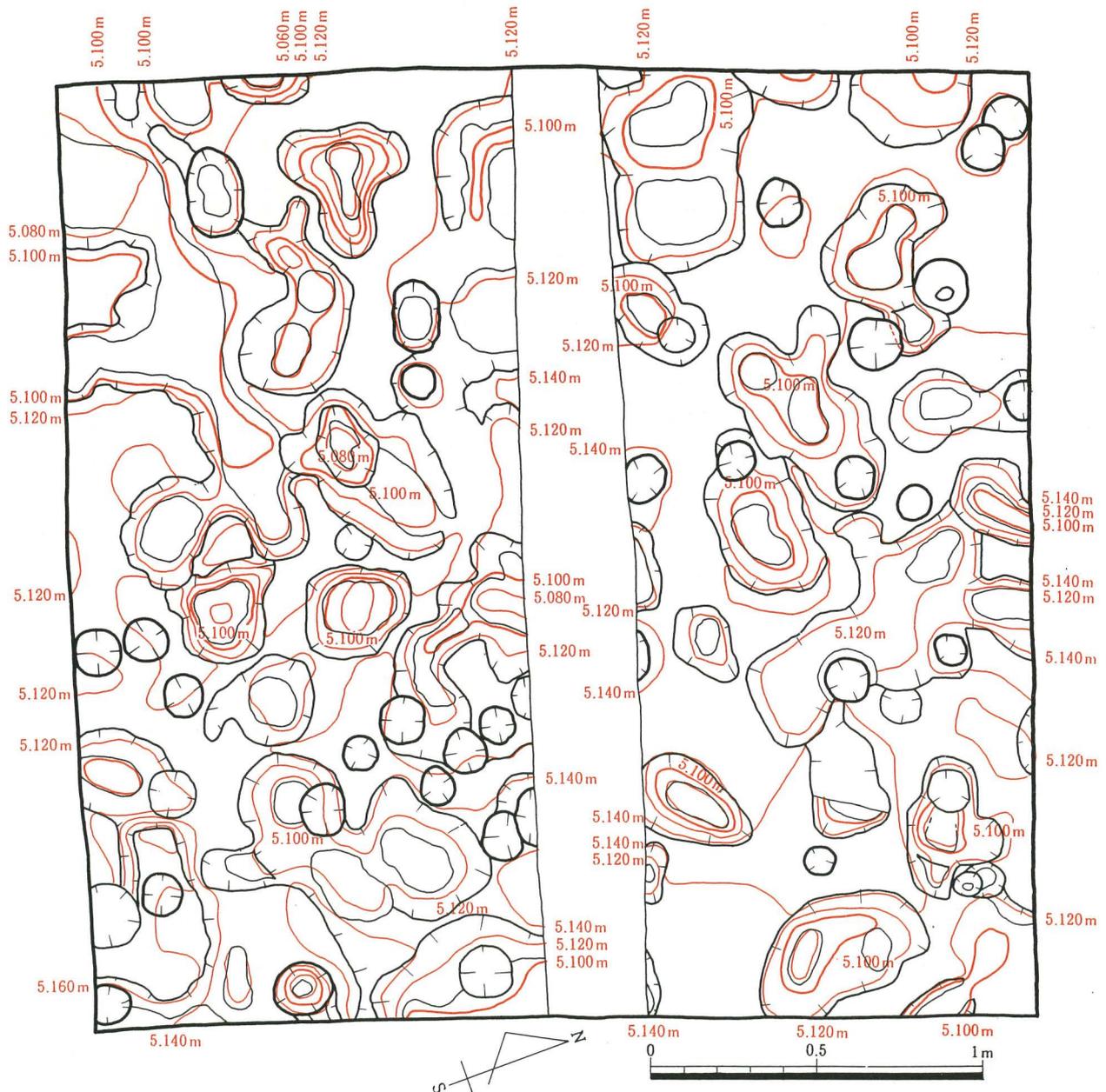


第7図 6トレンチ南壁・西壁・北壁土層断面実測図 (S = 1/20)

ピットの検出状況は第9図で確認出来るとおり、検出の状況に地点的な偏りがあるようだ。検出状況の観察からよるとピットは南西側に特に集中して検出しているが、プランを構成するような企画性を確認することは出来なかった。ピットを半載し埋土や掘り方の確認を行ったが、第5b層(火山礫)を除去し凹状のピットが検出された段階のものがピットの下場を掘り方の立ち上がりであることが分かった。よって、ピットは西暦874年3月25日の開聞岳の火山性噴出物が降灰していく際はピットに埋土が入り込み埋まりきらない状況ではなく、埋土が全く入らず埋まりはじまる直前の状況と推測できる。

ピット実測図(第10図)から、掘り方は10cm前後と大変浅く、壁はゆるやかなカーブを描いて立ち上がっている。

ピットの平面的観察によると、直径10cmから15cm内外の円形もしくは楕円形のものほとんどを占めており、飛び抜けて大きなものや深いものはないようである。ピットの種類や意図性は抜きにして、ピットの平面形態や深さ等は何かの企画性が導き出せそうである。

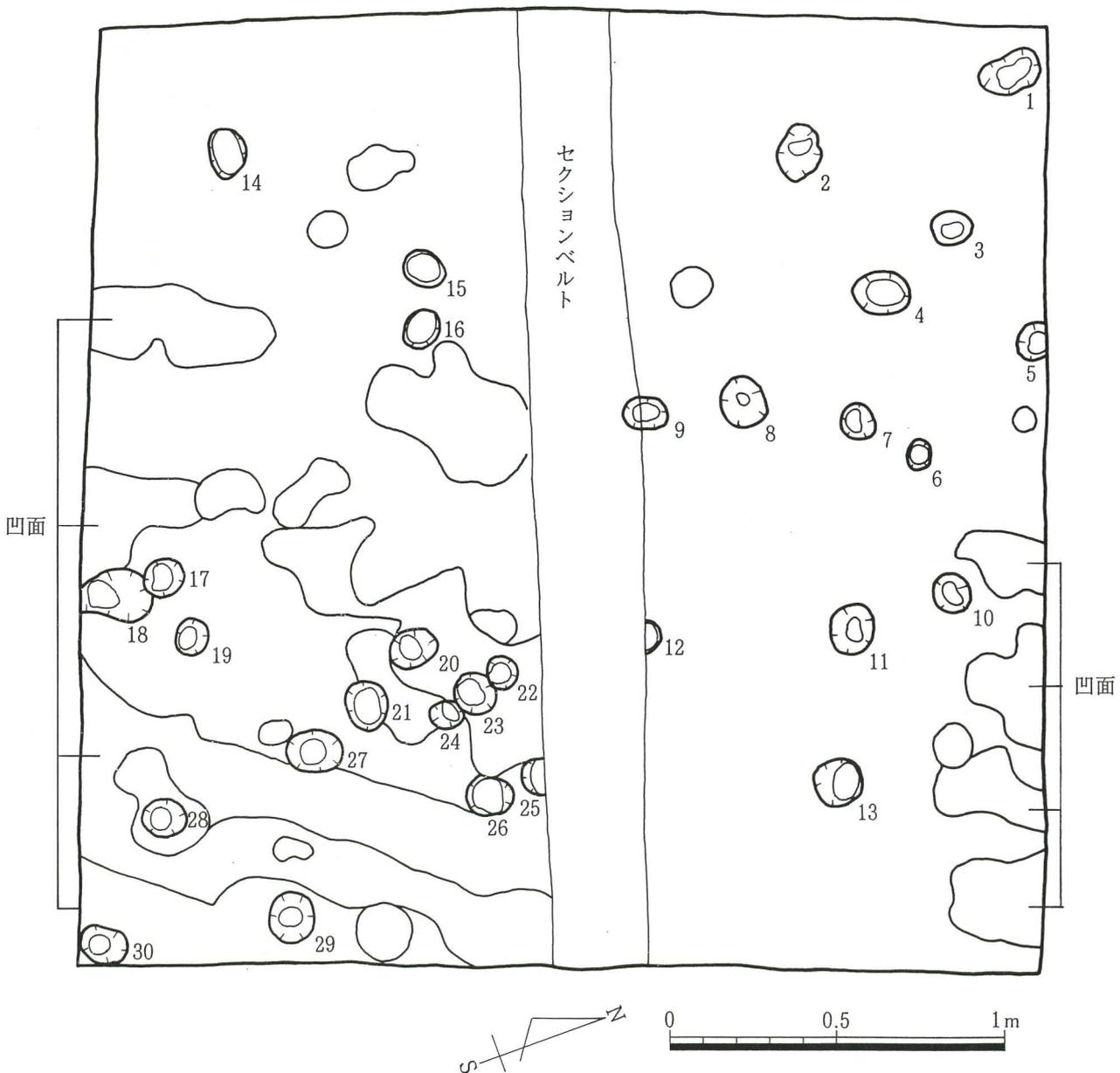


第8図 6トレンチ第6層上面検出状況・コンタ図 (S=1/20)

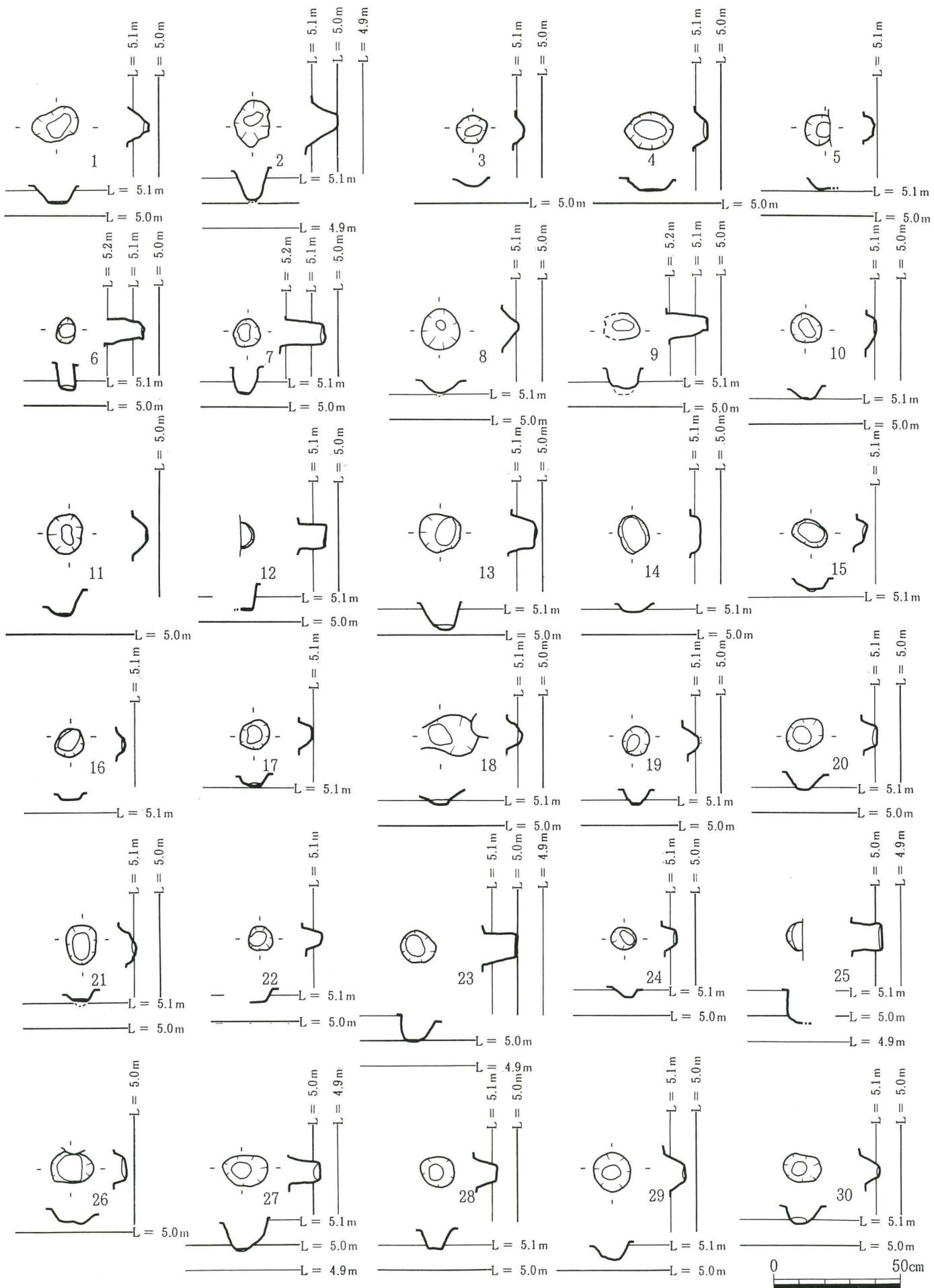
ピットを検出した面（第6層上面）と、ピットが掘り込んでいる層（第7層）は粘質性が強く、第7層については環元土壌である。このピットの性格を考えていくなかで粘質性の土壌に対して働きかけていることにも注意を払う必要がある。

第6層と第7層は、湿地帯及び水田土壌に良く発達する特有な土壌⁽¹⁾であり、前述した第6層上面で検出出来た溝状の遺構やピットは、どのような目的があったか検討するためには、プラントオパール等科学的分析を行い周辺の事例を踏まえた上で行っていく必要がある。

(1) 鹿児島県立博物館の成尾英仁氏より御教示を頂いた。



第9図 6トレンチ遺構検出状況図 (S = 1 / 20)



第10図 6 トレンチ第6層上面検出ピット実測図 (S = 1/20)

第3節 2 トレンチの調査

(1) 概要

2 トレンチは第1地点の南側に位置し、地層の堆積状況と遺物包含層の確認のために設置した。(第11図) 1 m×2 mの広さで約1.6 mの深さまで掘り下げを行い、その目的を十分に把握するように努めた。2 トレンチの設置した場所は、指宿市営住宅地の隣接地(住宅の前庭)であったが、市営住宅建築時はほとんど造成を行っていないことから、さほど地下の地層も攪乱を受けずに建築以前のままの状況であろうと考えられた。

(2) 地層(第12図)

深さ約1.6 mまで掘り下げを行い、第18層まで分層が出来た。

第1層：表土層である。造成にともなう填圧が行われたため、非常に硬く引き締まっている。7.5YR4/4

第2層：いわゆる「紫コラ」層であり、火山灰層と火山礫層に分層出来る。

第2 a層：火山灰層で、非常に硬く団結しており1次堆積のみで2次堆積層は確認出来なかった。5 R6/1・6/3

第2 b層：火山礫である。上部に樹木葉が圧縮をうけた状況で確認出来た。

第3層：1 cm内外の軽石が混入した軟質粘土層である。5YR6/6・7.5R4/8

第4層：第3層より砂利質が増えているようである。7.5R4/8・2.5YR4/8

第5層：赤褐色粒子が混入した粘質土層である。2.5YR4/8・7.5R4/8

第6層：粒子の細かい砂利層である。7.5R4/8・2.5YR4/8

第7層：第6層より若干黒味を帯びている粘質土層である。2.5YR7/2

第8層：上層より赤味が強くなった砂利層である。5YR6/4・7.5R4/8

第9層：やや引き締まった粘質土層である。5YR6/1・4/6

第10層：第9層よりやや黒味を帯びた粘質土層である。5YR6/1

第11層：第10層より白味が強くなった粘質土層である。5YR7/1

第12層：ラミナが発達しているのが確認出来る砂利層である。

第13層：1 cm内外の軽石が混入している砂利層である。10YR3/4・3/6

第14層：非常に粘質性に富んで、硬く引き締まっている粘質土層である。N7/0

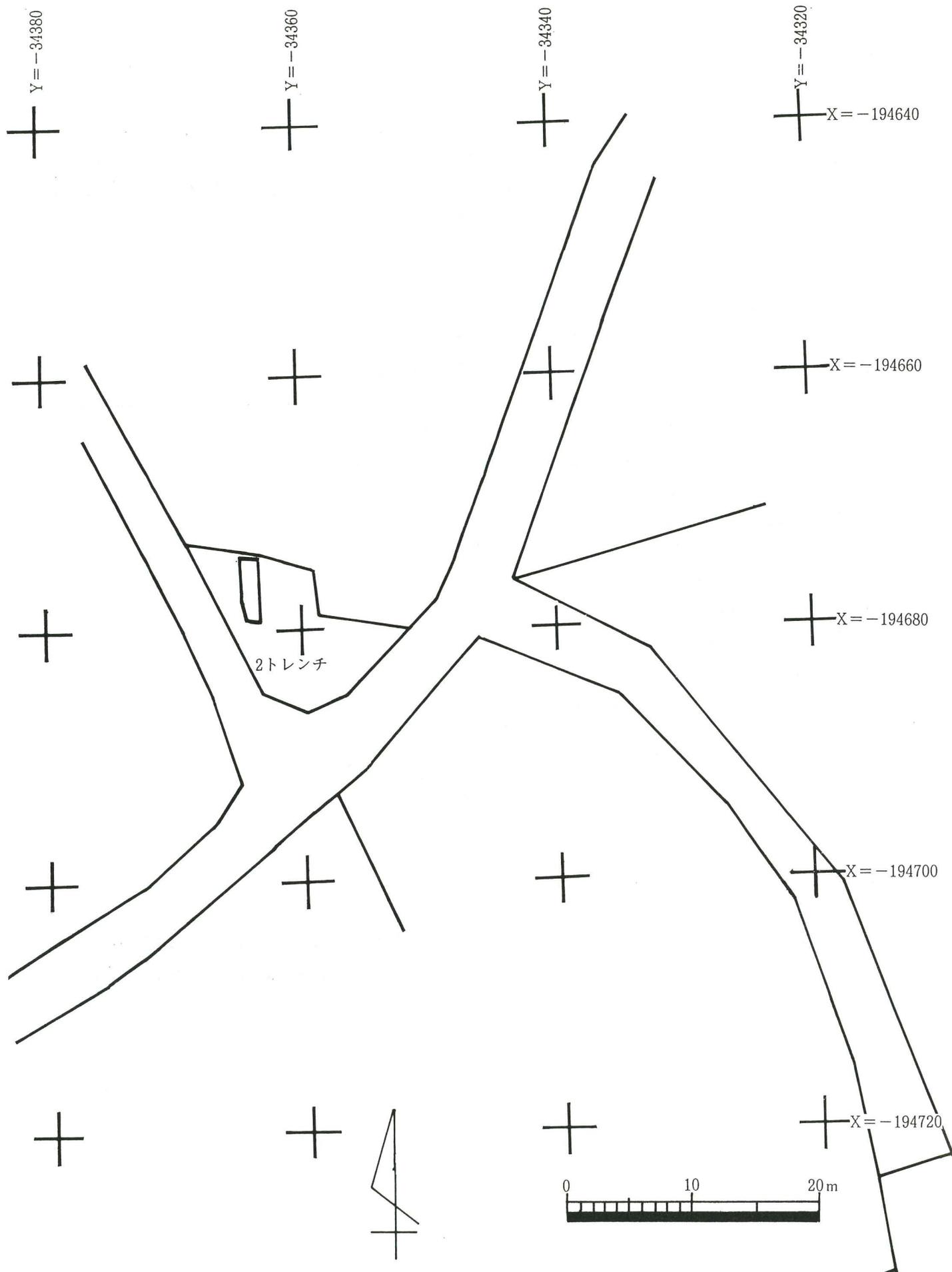
第15層：非常に細粒な砂を含む赤褐色砂質土層である。7.5YR5/4

第16層：第14層より若干引き締まっている。色調的には同色である。N7/0

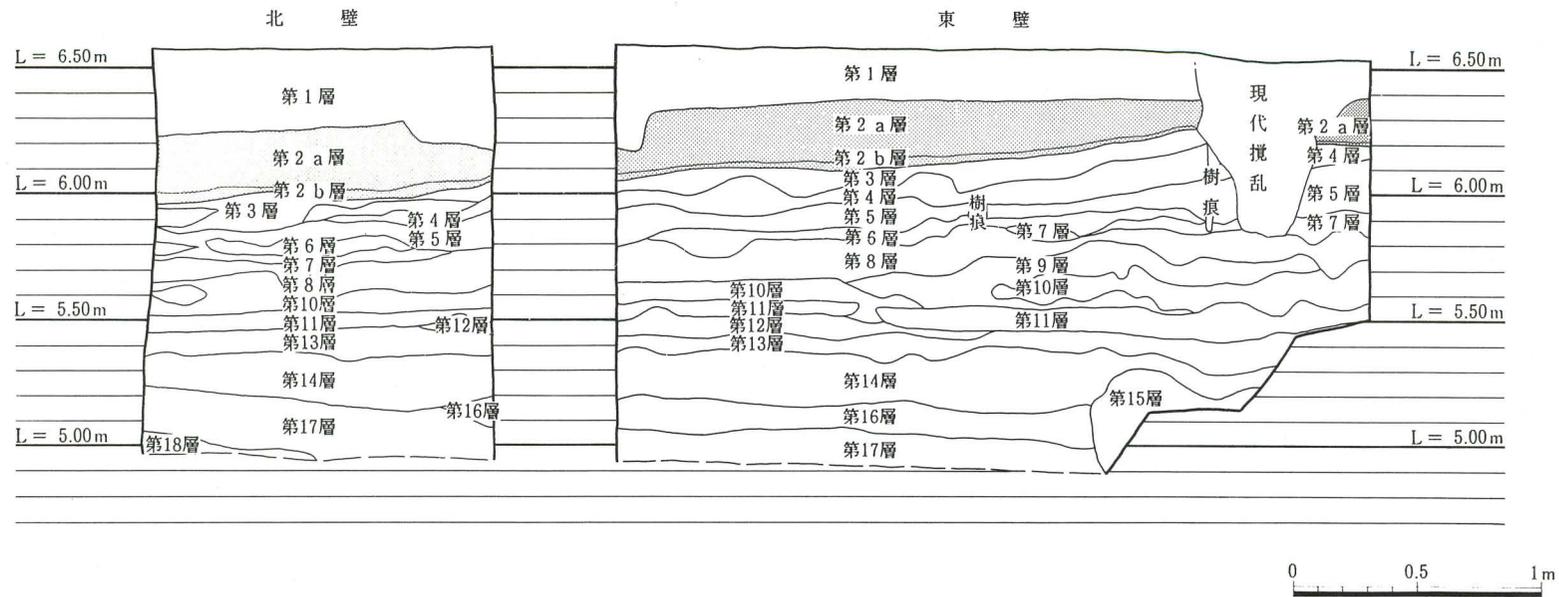
第17層：粒子の細かい砂利層である。N6/0, 2.5Y6/6

第18層：第16層に層質的に類似している。N7/0

2 トレンチで確認された第2層(紫コラ)以下の層序は、いわゆる湿地帯で形成されたものであることから、西暦874年3月25日の開聞岳の火山灰で埋没するまでの期間、2 トレンチが設定された周辺は湿地帯の可能性が考えられよう。



第11図 2トレンチ位置図 (S=1/400)



第12図 2 トレンチ北壁・東壁土層断面実測図(S=1/30)

第V章 第2地点の調査

(1) 概要

第2地点は、敷領遺跡の周知の範囲の中で南側に位置しており、地形の状況に合わせて3ヶ所のトレンチを設定して掘り下げを行った。(第13図)

トレンチを設定した地点の現状利用法は雑種地であり、海紅豆が植栽されている。宅地建設等による地下に対して攪乱を行われた状況はなく、比較的地下の遺物包含層の存在状況は良好であろうと推測出来たところである。

トレンチは、西側から東側に3トレンチ、4トレンチ、5トレンチと設定し、表土層の除去までは重機を用い、それ以下の層の除去および掘り下げは人力で行った。

第2地点では、まず3トレンチの北側を6m×4mで確認調査を実施し、第3層の「紫コラ」層直下から畦を伴う水田土壌が確認された。トレンチを設定した場所は広い空地となっており、新たにトレンチを設定し畦の延長や水田面1枚を全て面的に検出することが出来ると判断し、東側に4トレンチ、5トレンチを設定し水田面検出の調査区範囲を拡張した。

第2地点における3ヶ所のトレンチの層序および、遺構については、一連の遺構であるため、個別に述べる方法を取らずに、3ヶ所のトレンチをまとめて述べていきたい。

(2) 層序 (第14・15・16図)

3トレンチ、4トレンチ、5トレンチの土層堆積状況は基本的に同じものであり、一括して説明する。

第1層：表土層である。海紅豆の樹根が広く広がっており、腐植土も発達しているため、非常にやわらかい。7.5YR4/4

第2層：いわゆる中世黒色層に比定出来る層である。第2地点においては無遺物層である。7.5YR2/1・1/1

第3層：「紫コラ」層である。西暦874年3月25日に開聞岳より噴出した火山性噴出物の堆積層である。分層が可能である。

第3a層：紫コラの2次堆積層である。5R6/1

第3b層：紫コラの1次堆積の火山灰層である。5R3/1

第3c層：火山礫であり、遺構面直上で確認出来る。

第4層：第3c層の火山礫によって直接埋没している層である。第2地点においては水田土壌であり、非常に粘質に富んでおり軟質層である。10YR8/3・10YR7/6

第5層：水田耕作面土壌の直下に普遍的に確認出来る環元土壌である。第4層に比べやや引き締まっている。10YR7/2

第6層：いわゆる「青コラ」層の2次堆積層であり、ラミナが確認できる。

第7層：小礫や軽石等を含む土壌である。無遺物層である。

(3) 遺構 (第17～20図)

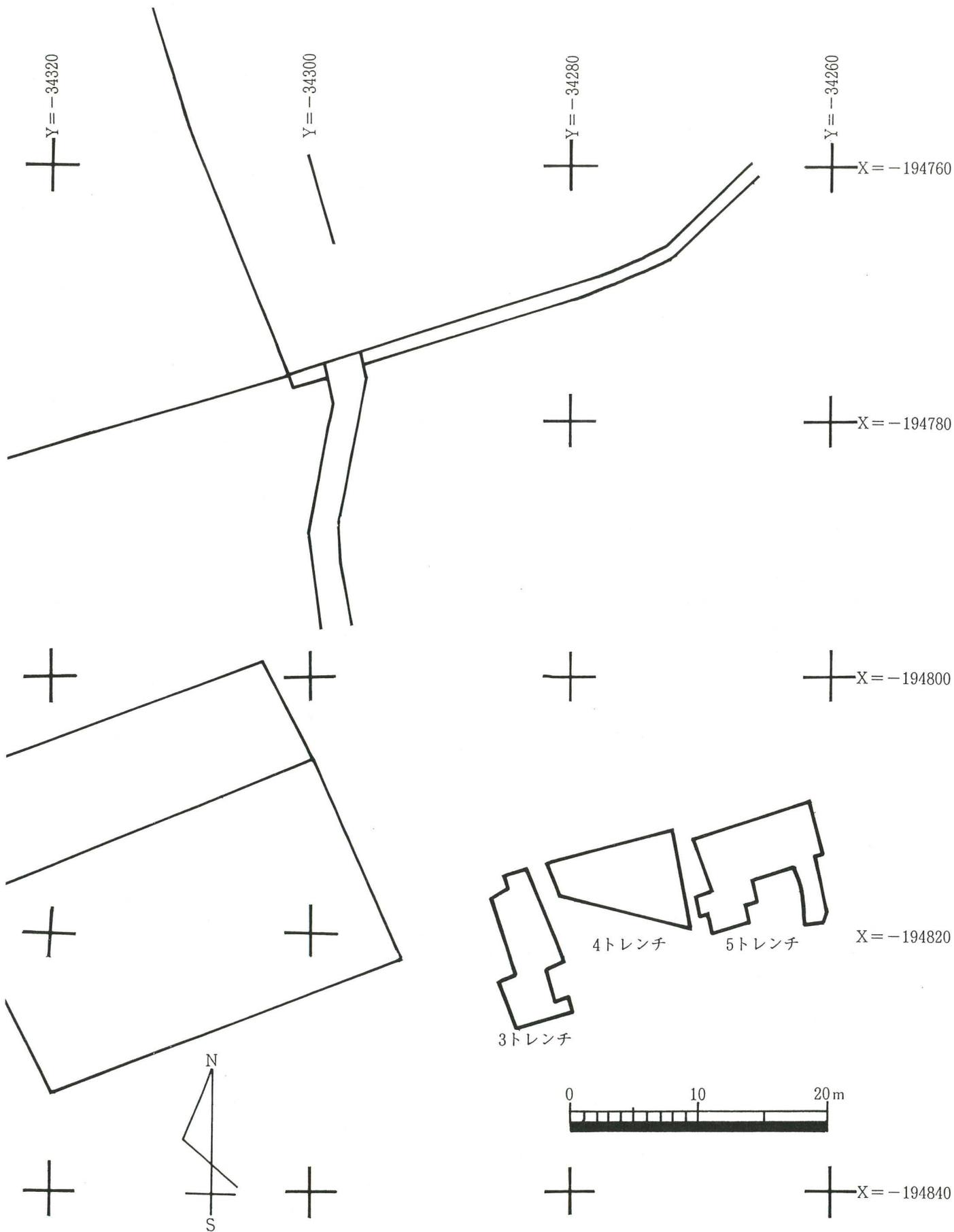
水田跡について

第2地点に設定した3・4・5トレンチにおいて、第3層（「紫コラ」層）直下より畦を伴う水田跡が約130㎡の面積で検出出来た。(第17図)

水田跡は、畦により水田面が区画されている。この水田跡について、区画、水口、水田面の痕跡、足跡、植物のスタンプの項目に分けて、その検出状況を述べていく。

a. 区画

130㎡の確認調査トレンチ内において、畦によって区画された水田面を良好な状態で10枚検出出来た。調査期間や確認調査地点の植栽等による土地利用状況からの規性より、水田面1枚を平面的に全て検出することは出来なかった。よって、水田面1枚の平面形態や面積等について把握することは難しかったが、3ヶ所のトレンチの水田跡の検出状況からある程度推測することは可能であった。



第13図 3・4・5トレンチ位置図(S=1/400)

水田は畦によって区画され、その畦は上場、下場幅から大畦と小畦に分類した。

・大畦は上場幅約40～50cm、下場幅約1mで土盛りし整形しており、水田の空間を大きく区画するもの。

・小畦は上場幅約20cm、下場幅約50、高さ約10～15cm（棚田状の場合は30cm）で土盛りしたもので、大畦で囲まれた一定の範囲内を小さく区画するもの。

小畦によって小区画された10枚の水田面の平面形態は、長方形（水田面⑦・⑨）、三角形（水田面③）、不定形（水田面⑤）が検出状況から推測出来る。

水田が営まれた水田立地は、東側（海岸）にむかってゆるやかな傾斜のある火山性沖積地であり、その立地や地形に合わせて大畦、小畦により水田を区画したと考えられる。水田面のレベルは水田面①・②が5.48mと最も高く、水田面⑩が4.90mで水田面①・②とは58cmの高低差がある。直線距離で約27m離れており約1mで2cm弱の傾斜角度である。

また、水田面⑥と⑦は約8cm、⑤と⑦・⑧は約13cm、⑦・⑧と⑨では約19cmの水田面レベル差があり、いわゆる棚田状を呈している。

b. 水口

水田を営むために重要な導水技術が解明出来る水路や水門、井堰は検出出来なかったが、隣接する水田面に水を導く水口が2ヶ所確認出来た。水田面⑥－⑦の水口はレベル差が約8cmほどあり、水田面⑦には、尻水口より水田に水が入り込むことによる窪地が残されている。水田面⑦－⑧はレベル差は無く、水口は小畦から張出し状に土盛りしていた形態であり、水田面⑥－⑦の水口とは形態的に異なる。なお、水田面⑦－⑧の水口には加工痕のある軽石が置かれていた。調査面積が狭いこともあり、水田面⑥→⑦→⑧の配水系統は復元出来るが全体においてはほとんど明らかにすることが出来なかった。水口と畦の補強等の杭や木材は検出出来なかった。

c. 水田面の痕跡

10枚の水田面は非常に凹凸が激しく、その凹凸に上場・下場を引くと図に示してあるとおり、規格性のある溝状のものであることが分かった。その痕跡は畦に対して平行もしくは直角になるように残されており、水田面②・⑤・⑥⑦・⑨の痕跡の観察によると、2条で1単位であるように見える。水田面⑤では水田の形（三角形の端の部分）に合わせるかのように、2方向の痕跡が確認出来る。小畦の方向や水田の平面形態を考慮に入れて痕跡の内容を推測すると、A：農具痕跡、B：稲の株を除去した痕（二稲の植えた列）が考えられる。Aだと2条1単位で溝状の痕跡が残る農具の比定や、Bでは痕跡の断面観察による株痕の層的な確認の問題が残されており、今後の調査で明らかにしていきたい。

d. 足跡

4トレンチの水田面③・⑤・⑦において、列をなしている足跡と考えられるものを検出した。（第19・20図・写真図版3・4）

水田面③では2種類確認出来た。1つは大畦に平行に残されているもので直径10～15cmの円形をし深さ3～5cmを測る。下場にはハート形もしくは小さな楕円形が2つスタンプ状に残されている。もう1つは水田面③の中央部にあり、形態は半円形をしており深さは先のものに比べて浅い。

水田面⑤では東側の小畦に平行に、水田面③の前記したものと同じものが列をなしている状態で検出されている。

これは明らかに人間の足跡とは考えられず、そのスタンプの状況から牛馬等の足跡も考慮に入れて積極的に考えていく必要がある。

e. 植物のスタンプ（第15図・写真図版4）

4トレンチ南壁面付近において、第3b層から3c層にかけて植物のスタンプを検出することが出来た。

検出状況は、非常に固く固結している第3b層の除去作業中で、植物が水田面上から真上に延びて、根元付近の茎と葉の一部が残存する状況であった。すなわち、西暦874年3月25日の開聞岳の火山灰降灰直前に水田面に植えていた植物が、火山礫（第3c層）と火山灰（第3b層）によって埋まっていった状況そのものである。スタンプは2次堆積層（第3d層）部分には残されておらず、1次堆積層のみにスタンプ状に残されていた。今回は、植物の植種の同定までは出来なかったが、水田雑草の可能性もあり、今後改めて植物種の同定作業を行っていかねばならない。

第Ⅴ章 確認調査の成果

平成7年度重要範囲確認調査による敷領遺跡の埋蔵文化財確認調査による成果について以下述べていく。

第1地点においては、1・2・6トレンチをそれぞれ設定し、掘り下げを行い遺物包含層の確認を行った。特記しておく点としては、西暦874年3月25日の開聞岳より噴出した「紫コラ」火山灰層直下の埋没面である。確認調査で「紫コラ」を除去すると、水田土壌もしくは湿地帯特有の粘土質土壌が現われ、その上面においては火山礫が入り込んだピット状の遺構を確認することが出来た。ピットの掘り込みは大変浅く、断面を裁ち切って埋土を確認したが火山礫以前の埋土は確認出来なかったが、掘り込んだ土壌と埋土として入り込んだ土壌が同質同色であるならば、上記のように誤認した可能性もある。

また、溝状の遺構も6トレンチにおいて確認出来、何らかの土地に対する人の働きかけがあったと推測出来よう。

1トレンチでは、古墳時代ごろと考えられる地層上面で掘り込み状の遺構を検出したが性格までは判らなかった。

1・2・6トレンチの調査から、敷領遺跡の北側では、古墳時代（「青コラ」2次堆積以降）は湿地帯が広がり、一部においては人によるなんらかの土地利用があったと考えられる。推測の域を出ないが、1・6トレンチ周辺では第2地点同様水田等の生産地として利用された可能性もある。

第2地点には3・4・5トレンチを設定し掘り下げを行ったところ、「紫コラ」で埋没した水田跡が検出出来た。西暦874年3月25日と日付が特定できる水田跡は、平成6年度に小田遺跡¹⁾で検出された棚田状水田に次いで2例目である。小田遺跡では幅1mのトレンチ調査のため水田の区画や水田1枚の面積やその他の関連以降は検出出来ず、その実態は不明瞭であった。130㎡の面積で検出出来た敷領遺跡の水田跡が全国的に唯一日付が特定出来、水田の平面形態や関連遺構、痕跡が判かる事例として、その価値や成果による研究はますます高まっていくと考えられる。

第2地点で検出された西暦874年3月25日の水田跡は、大畦と小畦によって区画されており、10枚の水田面が確認出来た。水田の平面形態は長方形、三角形、不定形が認められるが、大畦と一緒に検出されていることから大畦によって大きく区画された一定範囲の端部の可能性もあり、端部ならではの空間的規制による平面形態の不ぞろいとも考えられる。

水田跡と一緒に水路・水門・井堰、溜井等の関連施設は検出されなかったが、敷領遺跡の北側と南側には海岸に向かって東流する川があることから、旧河川流路は不明だが、水田跡を検出した周辺にあるものと考えられる。

検出された水田面は東側にゆるやかな傾斜地形に合わせるかのように、西側から東側に水田面のレベルがゆるやかに低くなっている。また、3ヶ所において隣接する水田面が10cm以上のレベル差がある棚田状の様相を呈する所もある。

10枚の水田面において2ヶ所の水口が確認出来、その状況から水田面⑥→⑦→⑧の配水系統が復原可能である。5トレンチの水口に置かれていた軽石製加工品は「水口祭り」との関連も踏まえながら検討していく必要があろう。

水田面に残された牛か馬の足跡と考えられるものは、その列の状態や足跡の形態（下場形も含む）を十分に観察し、大阪府池島・福万寺遺跡の事例を参考に再検討していくべきであろう。今回、第17図で赤字による牛馬の足跡と考えられたものは、現場で十分観察し上場・下場の形とそれの並び方から検討し、可能性のあるもののみ印をつけている。現場において牛馬の足跡と考えられた円形もしくは半月形のものには火山礫のみが入り込んでおり、慎重にそれを竹串を使って取り除いて下場の形を検出している。水田面土壌と火山礫は層質・色調が全く異なっており、検出の際に間違えることは少ない。

水田面⑤のものは、小畦と大畦と並行して残っており、当時の様子が垣間見られよう。

また、水田面には溝状の痕跡が小畦に対して並行もしくは直角になる状態で検出された。先の本文中では農具痕跡と稲の株根を除去した跡の2通りの可能性を考えている。農具痕跡であろうと推定されるものは、3トレンチの水田面②南側にある。それは作業を行った者が後退しながら鍬状の農具を振ったような痕跡として水田面に残されており、鍬状の農具の一振りの痕跡が幾重も切り合っている様子から推測している。一振りの痕跡を観察すると水田面に鍬状の農具を振り落としてから胸元に引いている様であり、振り落とされた所は直線的で下場は最も深く、胸元に行くに従って下場が浅くなりつつ立ち上がっており、一振りの痕跡の長軸方向の断面形態はおおよそカタカナの「レ」の字に似ている。

それに対して、水田面⑤・⑥・⑦・⑨で認められるものは、2条で一単位のように促えることが出来る。これは上

記の鋤状の農具痕跡のように切り合いを確認することは安易ではなく、溝状の痕跡を形づくっている1つの単位の痕跡の形が読み取れない。

鋤状の農具痕跡と考えられたものとは形態的に異なるようである。これについては、稲の株根を手もしくは農具を用いて除去した跡と考えられることも出来よう。

今後、敷領遺跡第2地点の水田跡について周辺調査による成果を踏まえたうえでの課題を列挙しておく。

- 大畦，小畦によって区画された水田1枚単位の平面形態や面積。これに，岡山県百間川原尾島遺跡のように稲株根が検出出来れば水田面1枚あたりの収穫量を試算することが出来る。
- 全国から検出されている水田跡との比較。班田制が他地域より遅れて施行された薩摩国の揖宿郡に営まれた水田が，どのように形態的に特徴があり，他地域と比べ導水・土木技術のレベル的な違いや差という地域性の検討。班田制が崩壊していく中での薩摩国への施行だが「隼人」に対してどのような状態で班田制を導入させたのか，また租税に対する関連もあり，収穫量の試算と含めて検討していかねばならない。
- 水田面に残されている遺構の解釈。農具痕跡についてはその農具の推測等。
- 水路や井堰を含めての配水系統の復元。
- 西暦874年3月25日の水田面に残されている遺構からの開聞岳の噴火の日時の季節的な同定作業。すなわち，水田を営んでいるなかで，一年中のサイクルのどの段階で火山灰によって埋没しているか，その姿を読みとることであるが，それは，水口の状況（水口と尻水口が開いている。）や，水田面に残されている農具痕跡や稲の株根の状態そして，第4トレンチ南壁付近で検出出来た植物のスタンプ等から検討していく必要がある。植物スタンプについては今回植種の同定は出来なかったが，雑草と考えた場合雑草は水田雑草と畑雑草，田畑共通雑草に分けられる。²⁾ 水田面の土壌をウォーター・フローテーションや種子同定分析を行い，植物スタンプの植種を推定し，季節的な成長の度合いより開聞岳の火山噴火の季節的な同定が出来よう。
- プラント・オパール（植物珪酸体）分析や花粉分析を用いて水田面上下層と比較し，栽培種の種類の特定作業。
- 寄生虫卵分析より，肥料すなわち「こやし」の使用や牛馬を用いた畜農耕の有無の検討作業。
- 水田面1枚毎の使用年度や二期作の検討。

上記のような課題を念頭に置き，南九州における班田制前後の生産遺跡の解明に努めていく必要があると考えられる。（文責 鎌田）

(1) 平成6年度に公共下水道管きよ付設事業に伴い小田遺跡を1m幅の狭いトレンチを設定し，調査を行った結果，西暦874年3月25日の開聞岳の火山灰直下より敷領遺跡と同様な土壌を有す水田跡を検出出来た。水田面は大畦，小畦によって区画されており，隣接する水田面の高低差は30cm以上を測り，遺跡の立地等をかながみした場合，谷水田に特有な棚田状を呈している。

(2) 工楽善通『水田の考古学』東京大学出版会 1991年

SUMMARY

The archeological site of Shikiryo is located in Ibusuki City on the southern most tip of Kyushu. In 1995, the first excavation of this site by the Ibusuki Board of Education began. Six trenches were set up at this site. The following findings from these trenches were obtained. First, in trench No.1 and No.6, pillar holes were found belonging to the Heian period that had been buried by the 874 AD eruption of Mt. Kaimondake. Second, rice fields also from the Heian period were found buried from the 874 AD eruption of Mt. Kaimondake. The rice fields that were found were divided by low walls made from heaps of clay. Third, scratch marks were discovered on the cultivation surface made from farming tools. The scratch marks ran parallel to the clay heaped walls. Fourth, the foot prints of humans, cattle, and horses were found on the rice field surface. Fifth, rice field surfaces resembling steps were found. These rice fields became lower as they descended towards the sea.

(written by Hiroaki KAMADA proof-reading, Tammy L. SCHMIDT)



1 トレンチ確認調査状況(南側より)



1 トレンチ確認調査状況(東壁・北壁)



1 トレンチ第12層上面遺構検出状況



1 トレンチ北壁土層断面写真



6 トレンチ確認調査状況(東側より)



6 トレンチ第6層検出状況(南端より)



6 トレンチ第6層上面ピット検出状況(北東端より)



6 トレンチ西壁土層断面状況

写真図版 2 1 トレンチ・6 トレンチ確認調査状況写真



2 トレンチ確認調査状況(東南より)



2 トレンチ完掘状況(南側より)



2 トレンチ北壁
土層断面写真



2 トレンチ第2 b層検出植物スタンプ



3 トレンチ水田跡検出状況



3 トレンチ小畦・水田面の痕跡検出状況(東側より)



3 トレンチ第3層の「紫コラ」による小畦の埋没状況(東側より)



3 トレンチ小畦検出状況(南側より)

写真図版3 2 トレンチ・3 トレンチ確認調査状況写真



4 トレンチ第3層の「紫コラ」による埋没状況(西側より)



4 トレンチ水口検出状況



4 トレンチ小畦と足跡検出状況(北側より)



4 トレンチ足跡検出状況(牛足跡か?)



4 トレンチ大畦と足跡検出状況(西側より)



4 トレンチ足跡検出状況(馬足跡か?)



4 トレンチ水田跡検出状況(東側より)



4 トレンチ南壁土層断面より検出の植物スタンプ

写真図版 4 4 トレンチ確認調査状況写真



5 トレンチ水田跡検出状況(西側より)



5 トレンチ水田跡検出状況・右手は棚田状を呈す(西側より)



5 トレンチ棚田状水田跡検出状況(南側より)



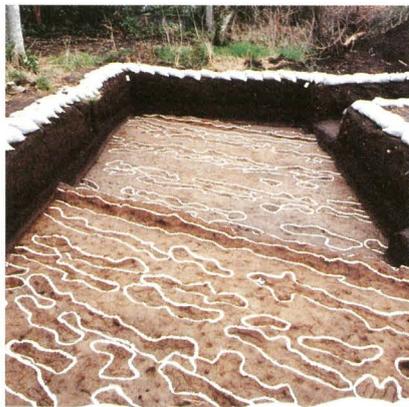
5 トレンチ棚田状水田跡検出状況(北側より)



5 トレンチ小畦・水田面の痕跡検出状況(西側より)



5 トレンチ水田跡小畦検出状況(東側より)



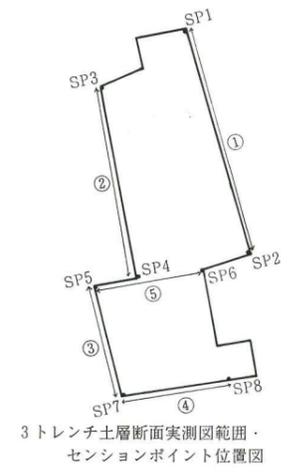
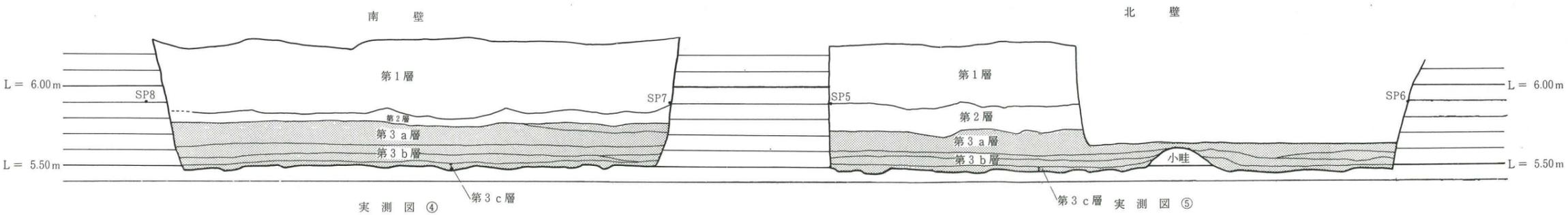
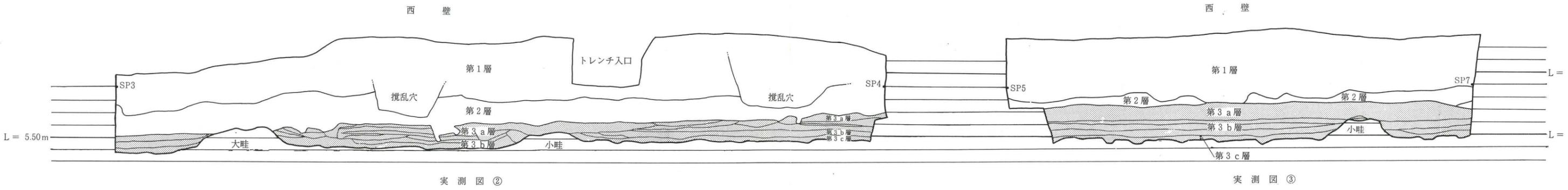
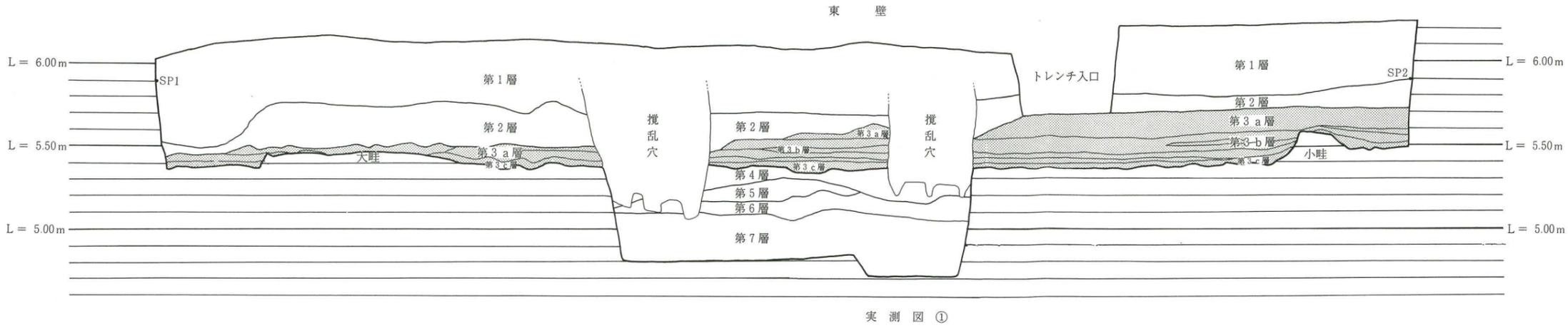
5 トレンチ水田跡検出状況(西側より)



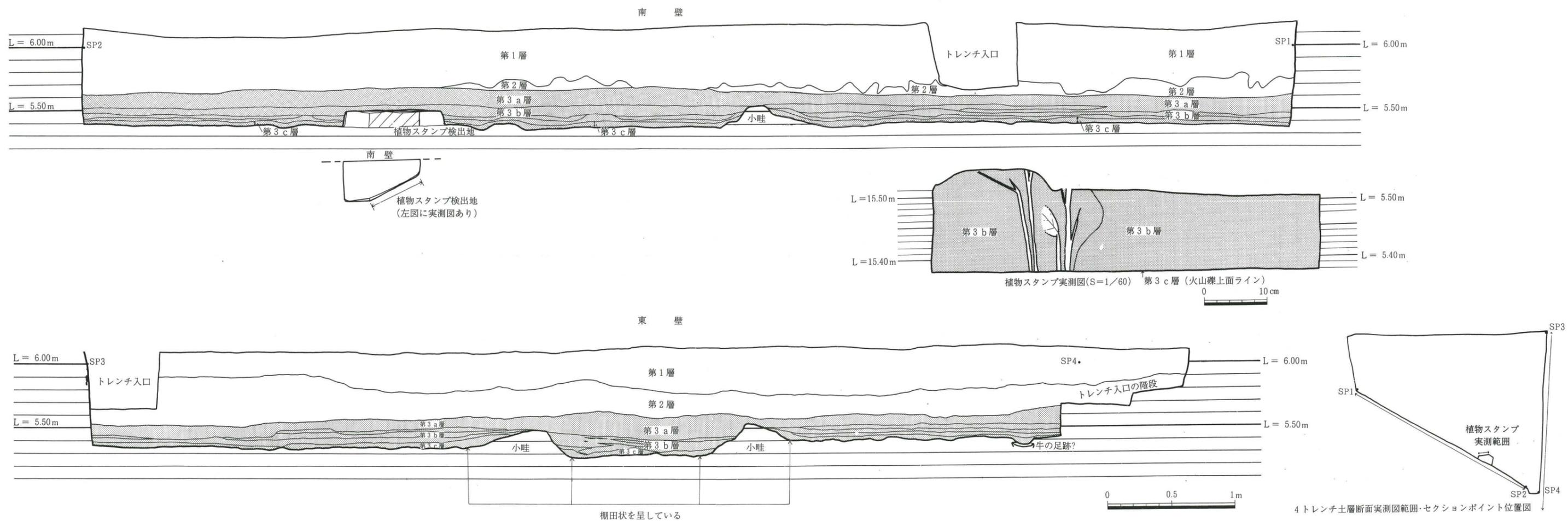
5 トレンチ水田跡
検出状況
(南側より)



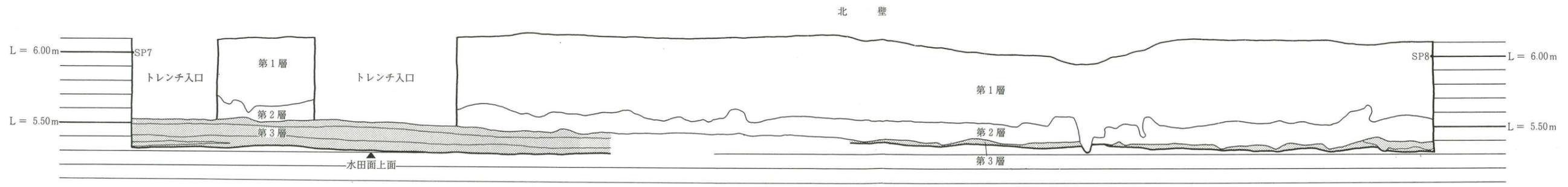
写真図版 6 第 2 地点水田跡検出状況



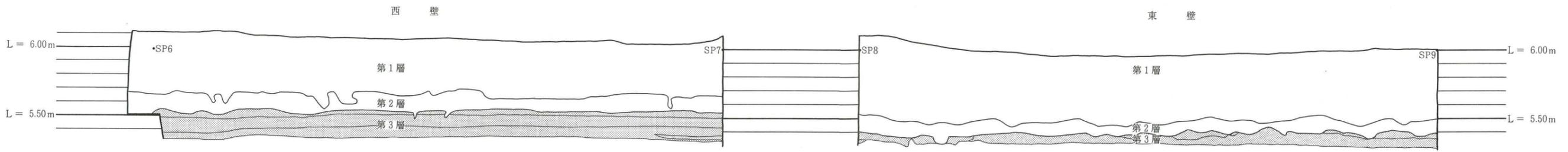
第14図 3 トレンチ土層断面実測図 (S=1/30)



第15図 4 トレンチ土層断面実測図 (S=1/30)

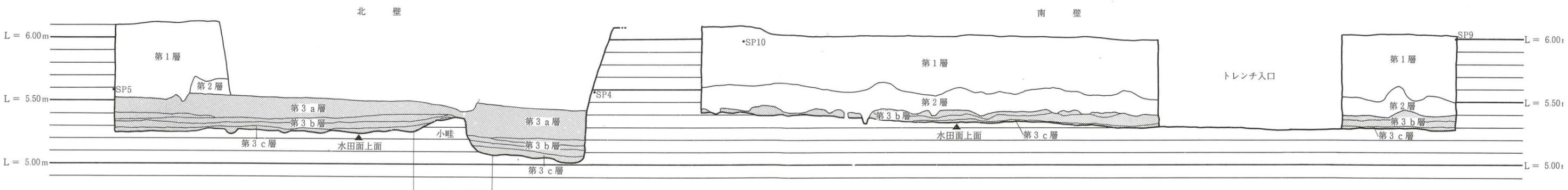


実測図①



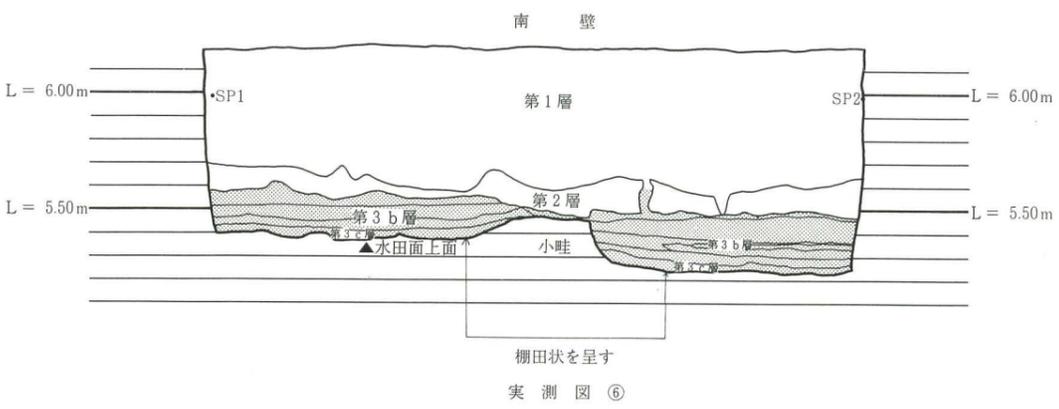
実測図②

実測図③

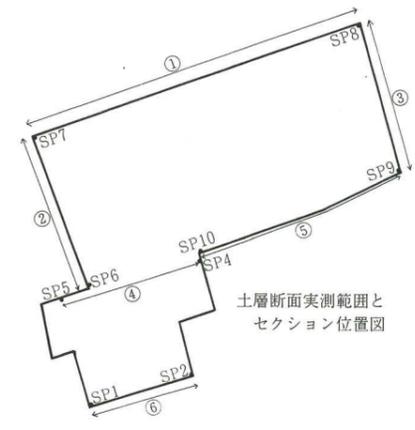


実測図④

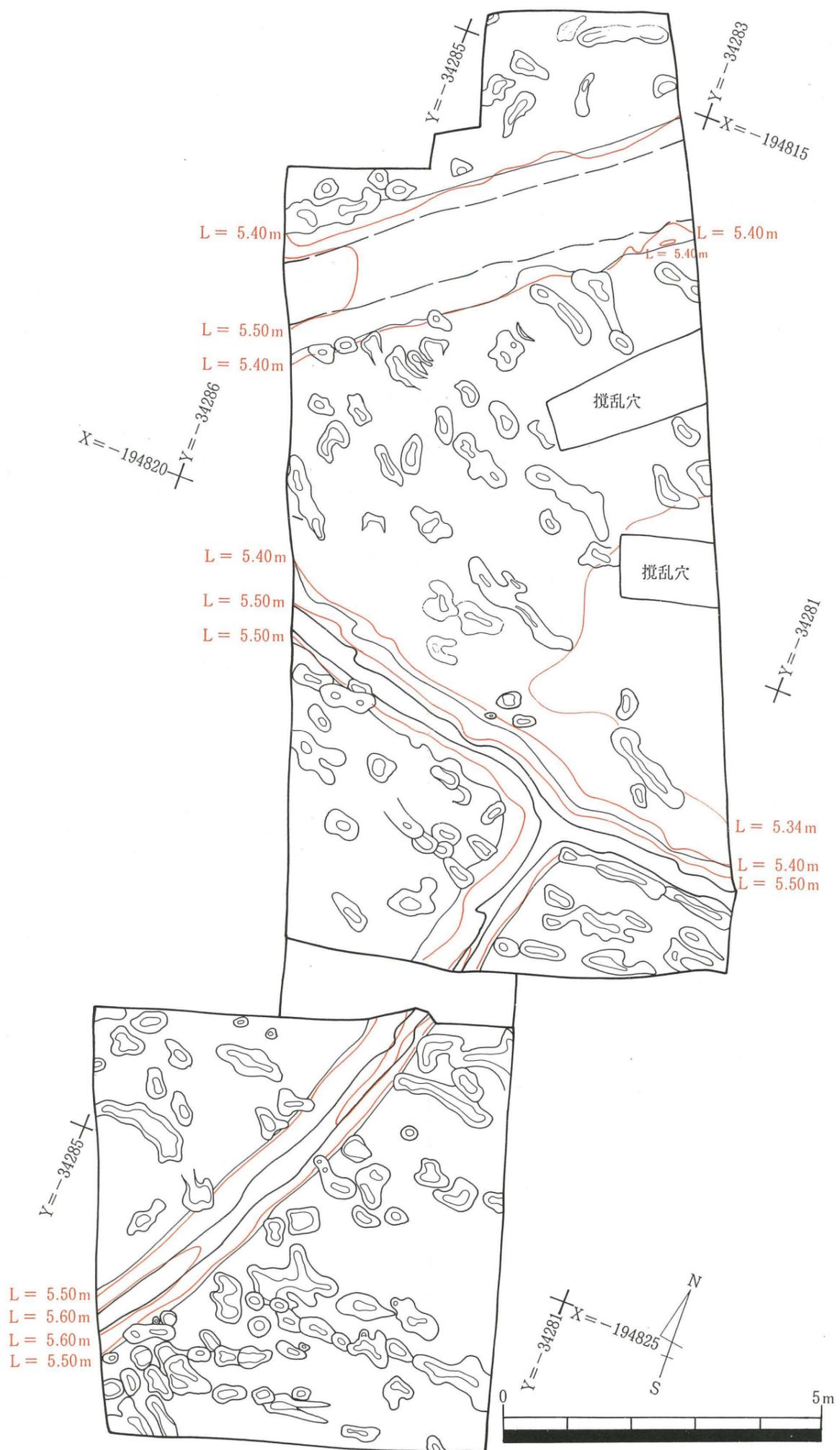
実測図⑤



実測図⑥



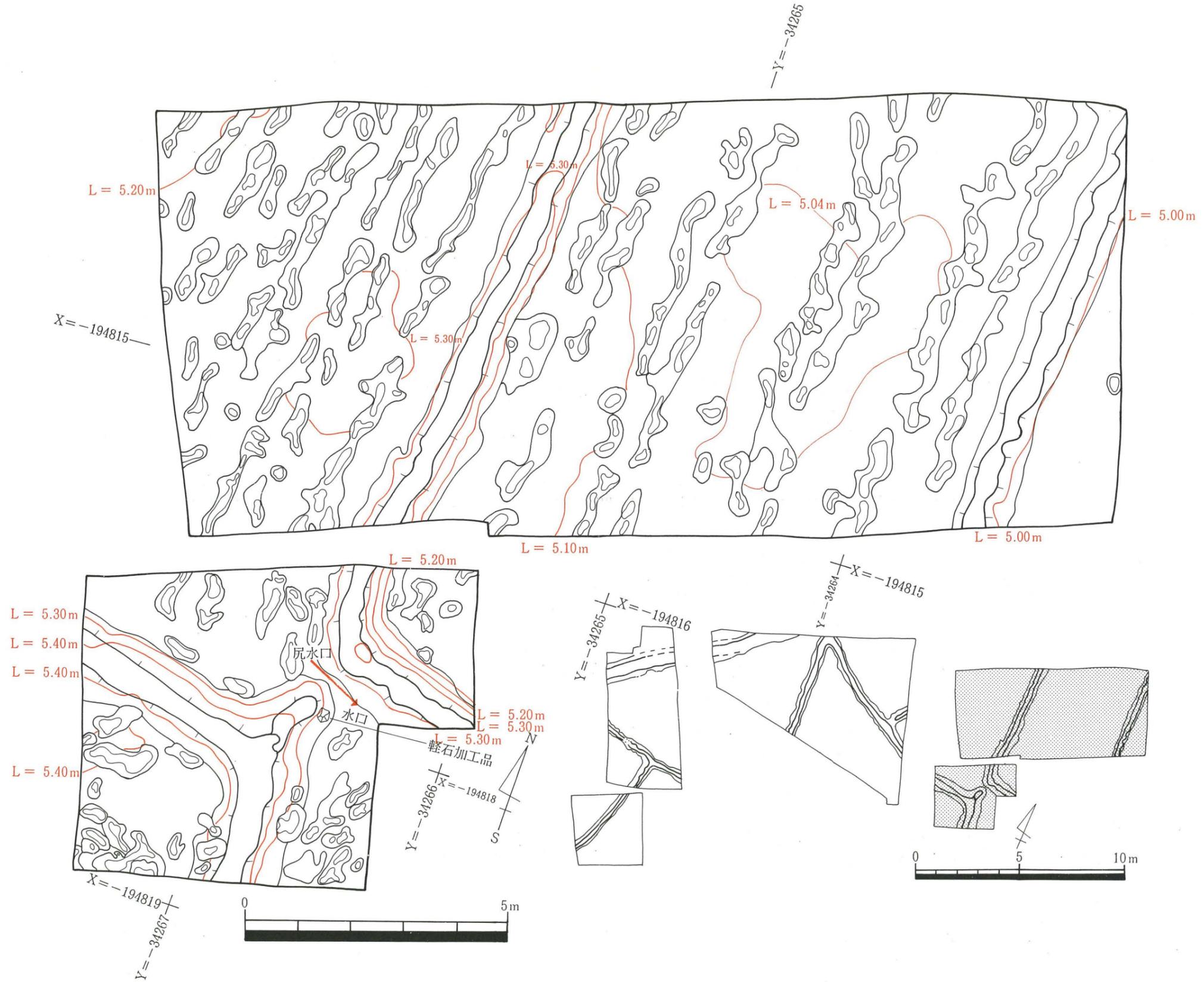
土層断面実測範囲とセクション位置図



第18図 3 トレンチ水田跡検出状況図・コンタ図 (S=1/80)



第19図 4 トレンチ水田跡検出状況図・コンタ図 (S=1/80)・位置図 (S=1/200)



第20図 5 トレンチ水田跡検出状況図・コンタ図 (S=1/80)・位置図 (S=1/200)

報 告 書 抄 録

ふりがな	はしむれがわいせき							
書名	橋牟礼川遺跡 X							
副書名	橋牟礼川遺跡範囲確認調査報告書							
巻次	10							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	渡部 徹也 ・ 鎌田 洋昭							
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会(指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ)							
所在地	〒891-04 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL 0993-23-5100							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
橋牟礼川遺跡 Aトレンチ (向吉遺跡地点)	指宿市 指宿市十二町向吉	46210	2-92			19950710～ 19960331	35	範囲確認 調査
1トレンチ	〃					19951202～ 19960331	27	
2トレンチ	〃					19951218～ 19960331	12	
3トレンチ	〃					19960130～ 19960331	32	
敷領遺跡	指宿市十町敷領		2-89			19961207～ 19960331	149	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
橋牟礼川遺跡 Aトレンチ (向吉遺跡地点)	生産遺跡	平安時代	畠跡					
1トレンチ	祭祀遺跡	弥生時代 終末～中世	中世階段状遺構 弥生時代終末～古 墳時代の祭祀遺構	成川式土器, 石器				
2トレンチ	集落跡	古墳～ 平安時代	杭列跡	成川式土器				
3トレンチ	〃	古墳～近世	近世建物跡 古墳時代柱穴群	成川式土器				
敷領遺跡 1トレンチ 6トレンチ	生産遺跡 または 集落跡	平安時代 古墳時代	ピット状遺構 土壇	成川式土器				
3.4.5トレンチ	生産遺跡	平安時代	水田跡			西暦874年3月25日に噴火した 開聞岳の火山灰により, 埋没 した災害にあった水田跡。		

橋牟礼川遺跡X

平成 8 年 3 月

発行 鹿児島県指宿市教育委員会
指宿市十町 2 4 2 4
☎ 0993-22-2111
印刷所 中央印刷株式会社
鹿児島市春日町12番16号
☎ 099-247-3300

